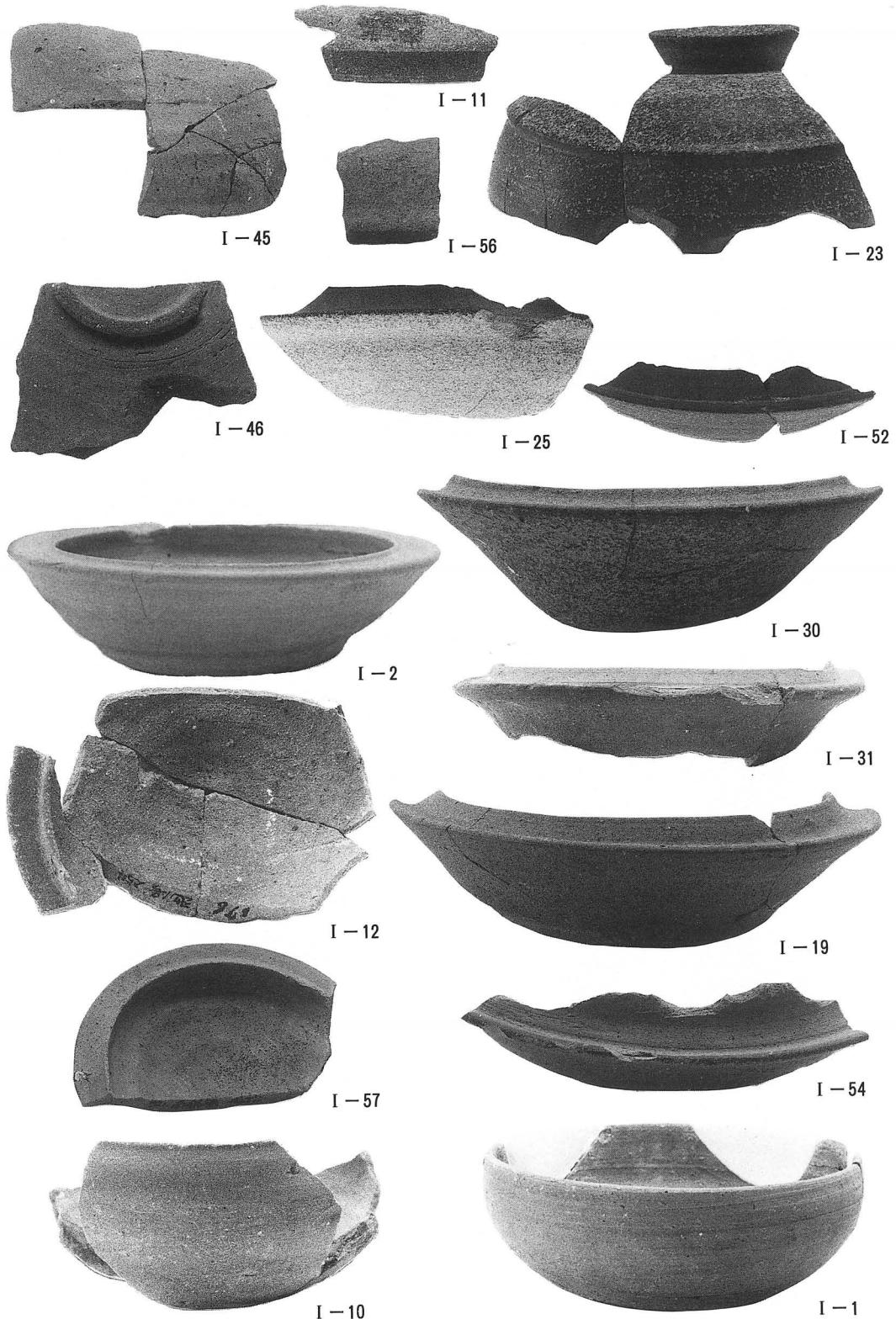


池ノ奥 1号墳出土遺物



池ノ奥 1号墳出土遺物



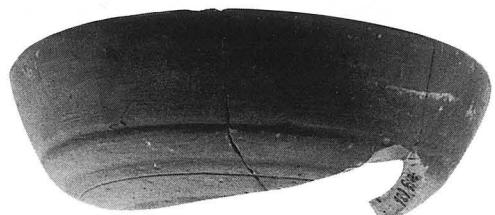
I - 20



I - 18



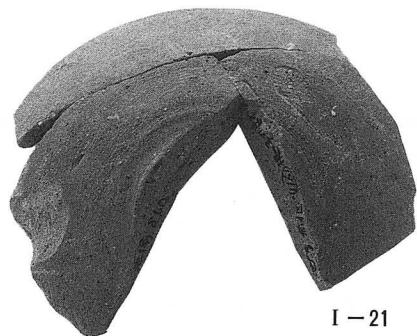
I - 6



I - 7



I - 44



I - 21



I - 35



I - 32

池ノ奥 1号墳出土遺物



I - 36



I - 33

I - 37



I - 34



I - 50



I - 13

I - 55



I - 43

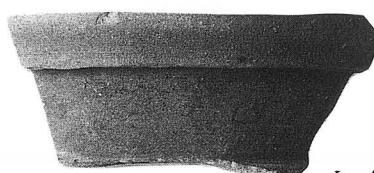


I - 22

I - 24

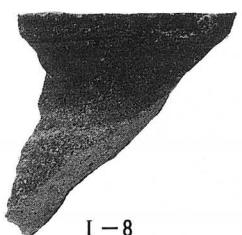


I - 65



I - 64

池ノ奥 1号墳出土遺物

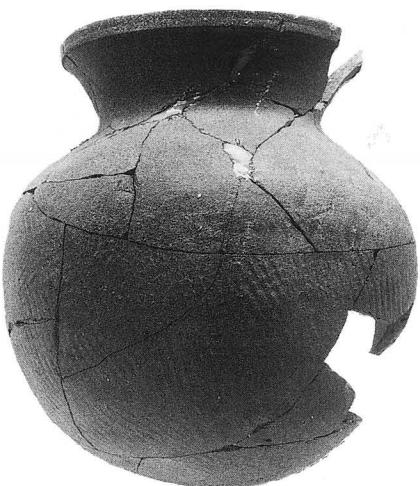


I - 8

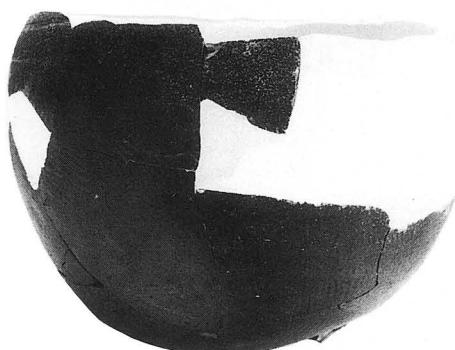


MLB 992

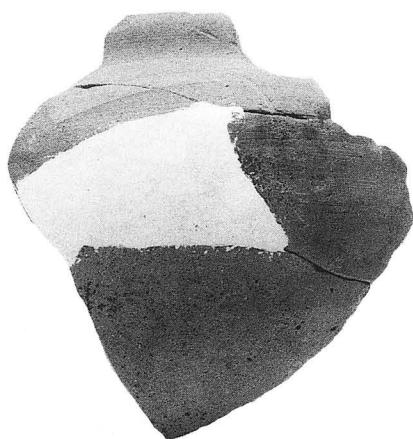
I - 61



I - 48



I - 40



I - 42



I - 41



I - 47



I - 38



I - 39

池ノ奥 1号墳出土遺物



I - 78



I - 69



I - 71

I - 60

池ノ奥1号墳出土遺物

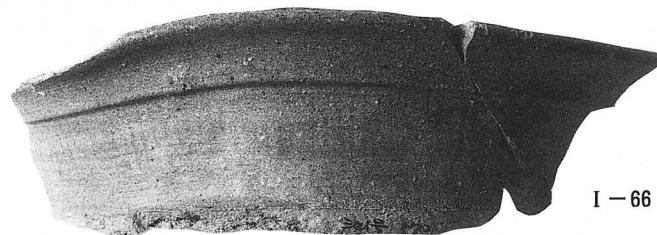
- 400 -



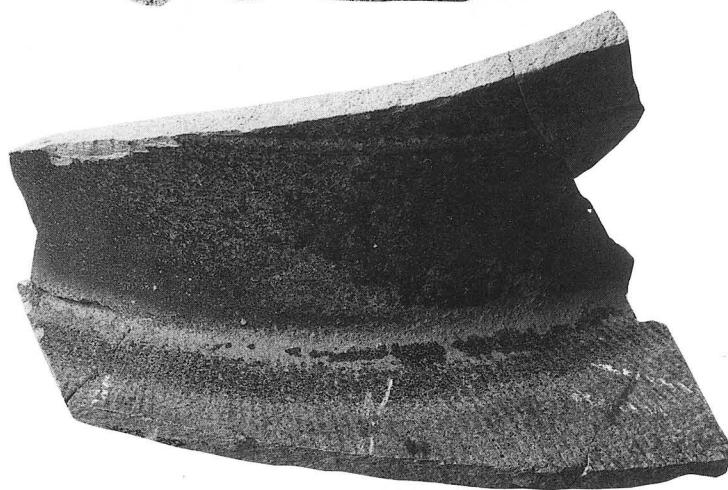
I - 77



I - 79

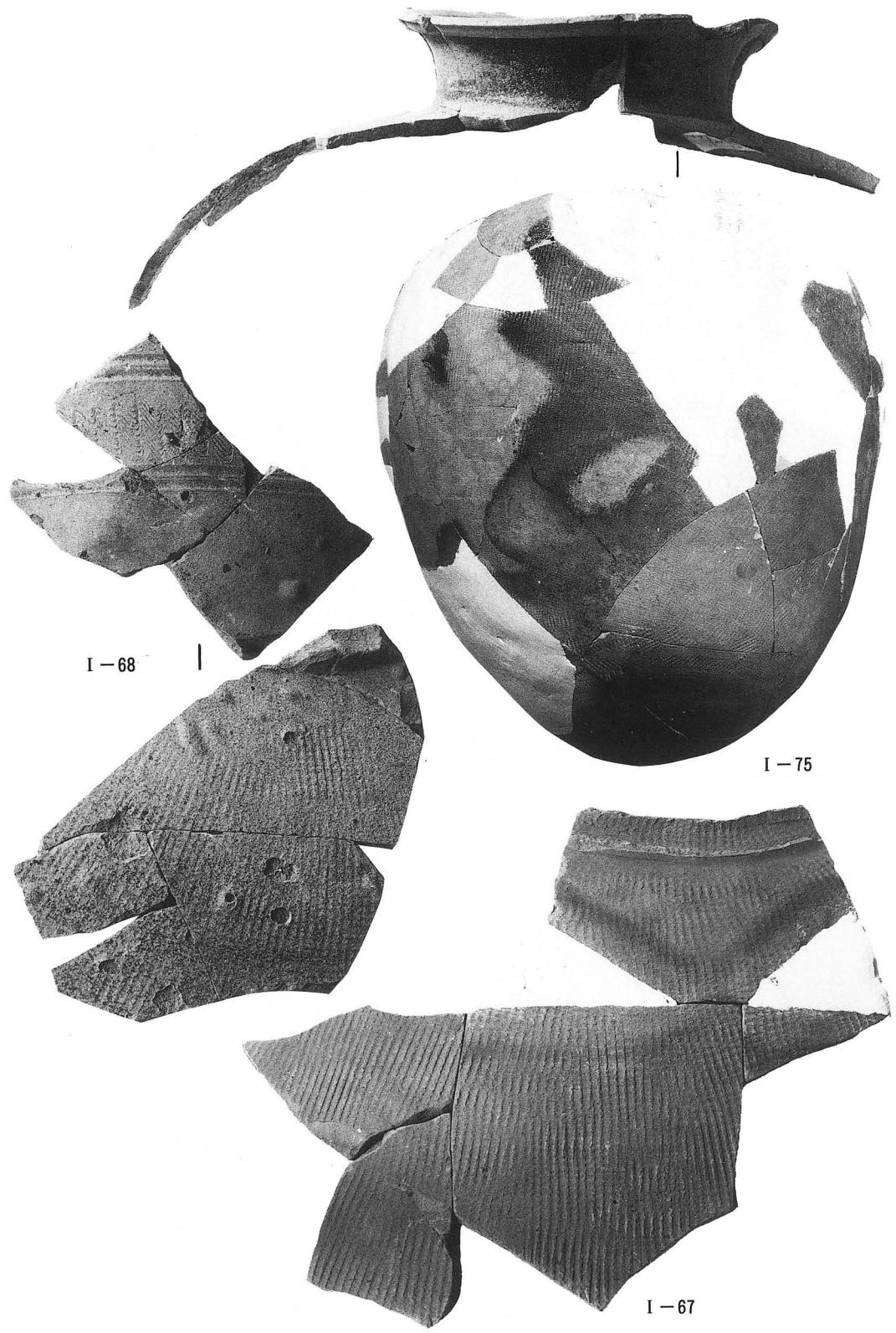


I - 66

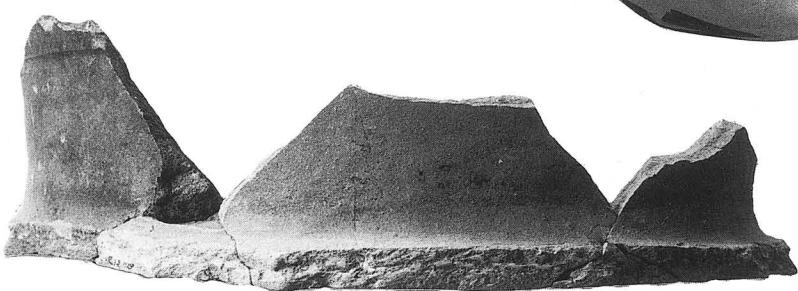
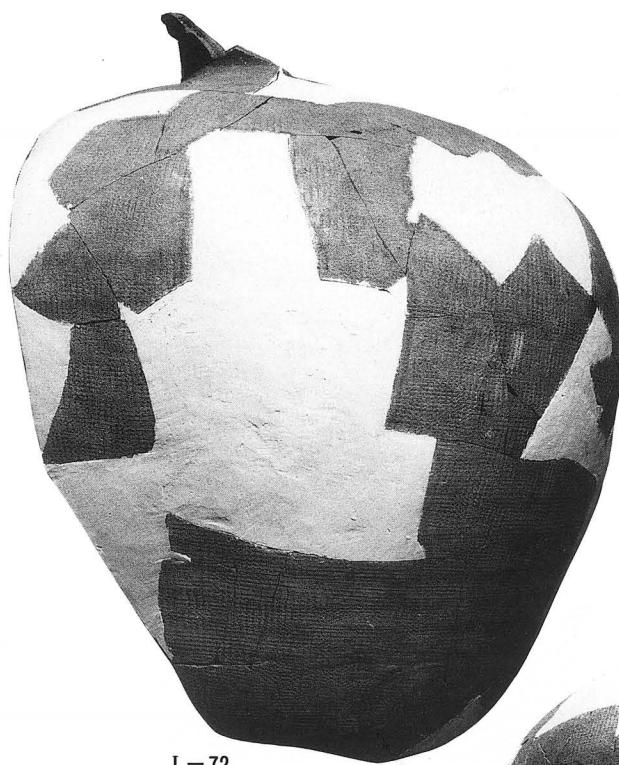


I - 76

池ノ奥1号墳出土遺物

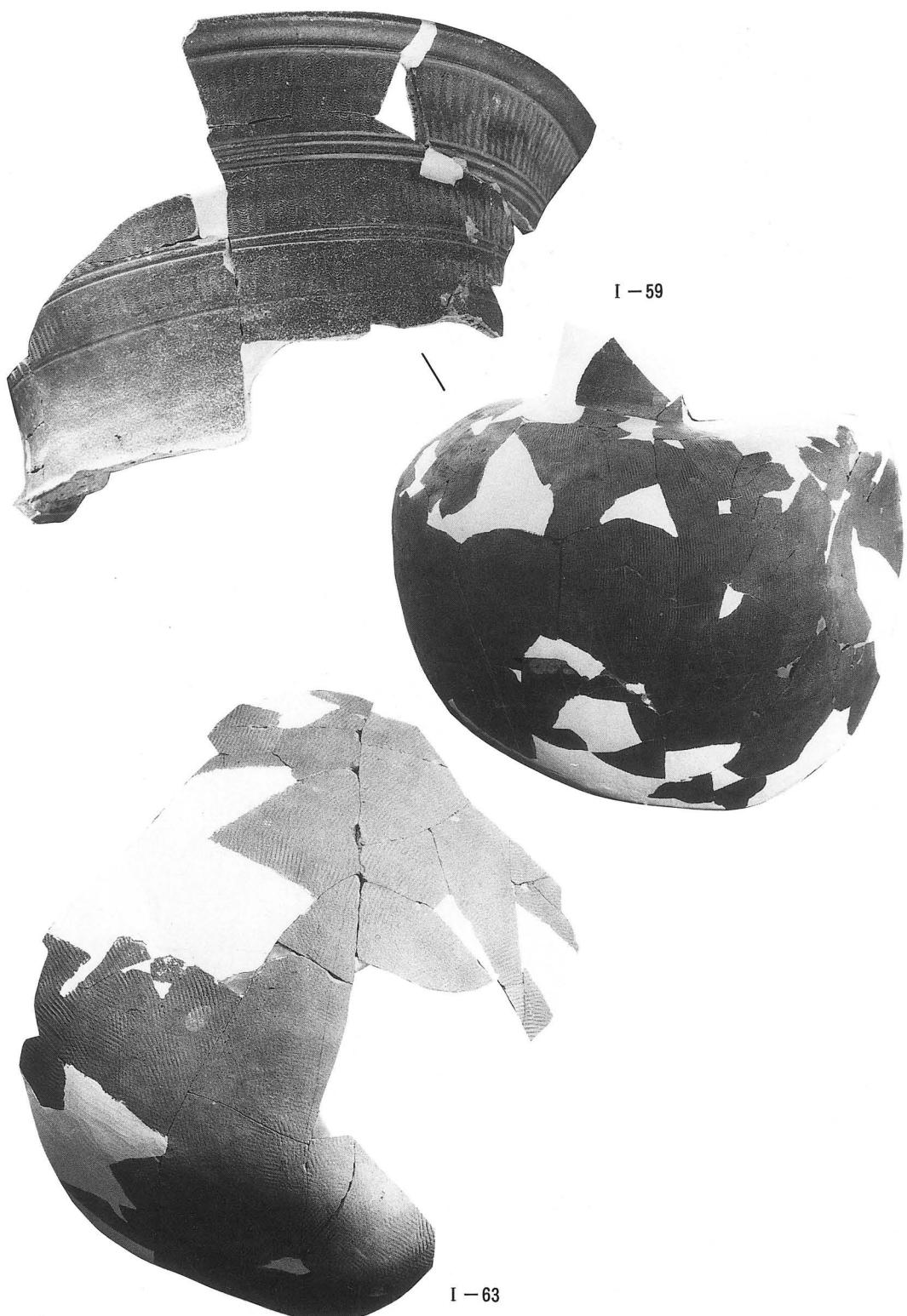


池ノ奥 1号墳出土遺物



I - 80

池ノ奥 1号墳出土遺物



池ノ奥 1号墳出土遺物



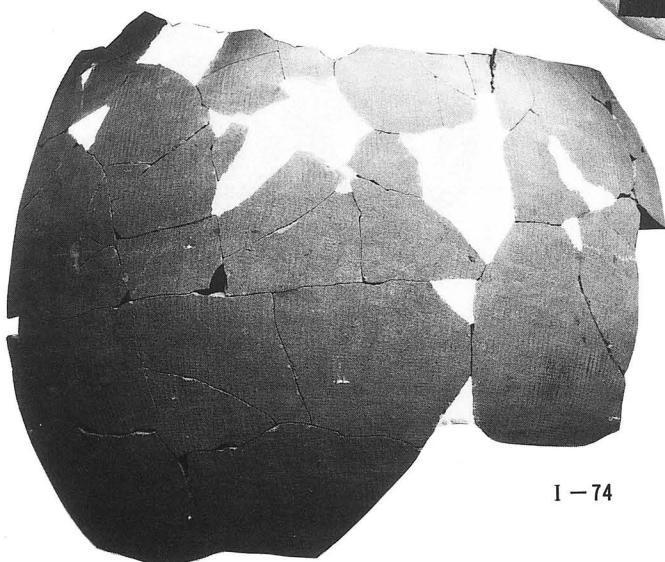
I - 81



I - 70

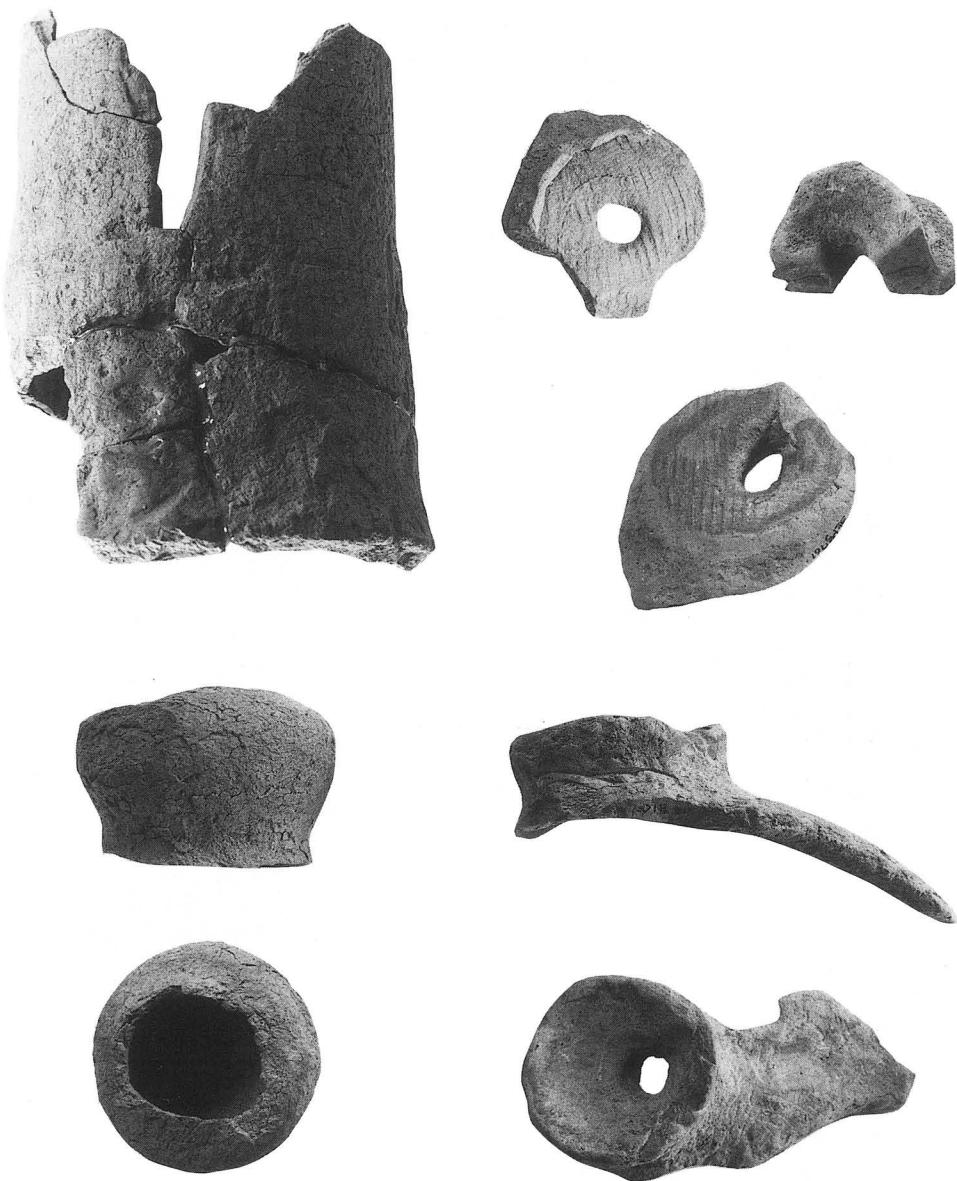


I - 62

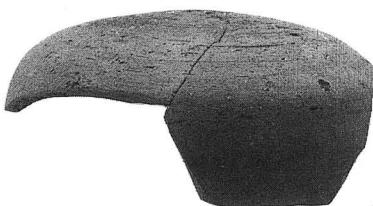
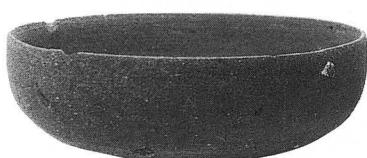
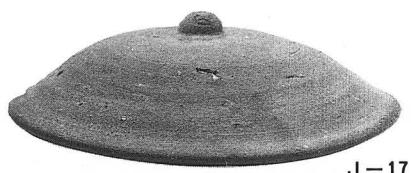


I - 74

池ノ奥 1号墳出土遺物



池ノ奥 1号墳出土子持ち壺



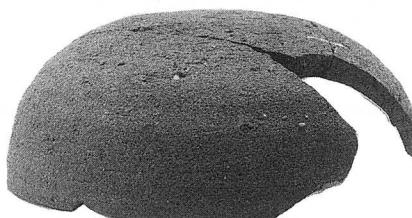
池ノ奥 2号墳出土遺物



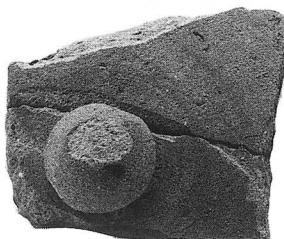
J-7



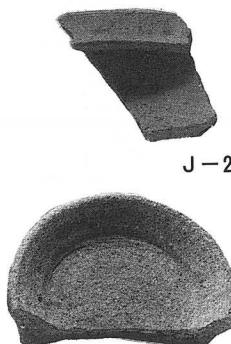
J-23



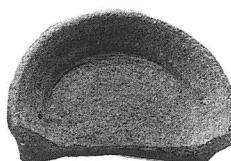
J-25



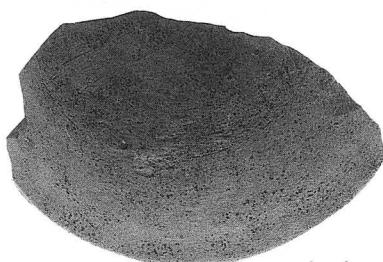
J-42



J-29



J-44



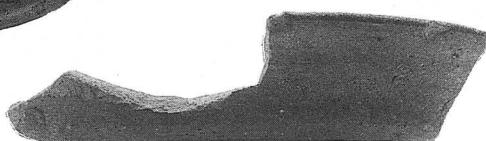
J-1



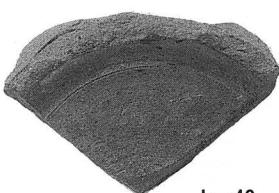
J-12



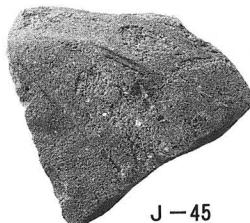
J-38



J-26



J-40



J-45



J-33



J-32



J-14



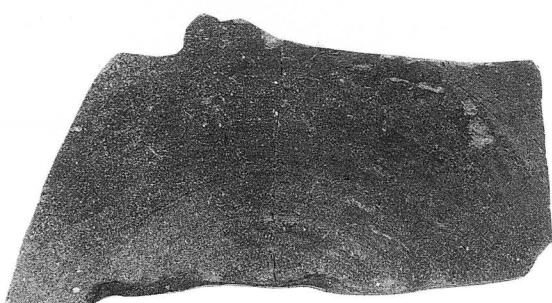
J-13



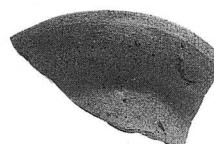
J-37



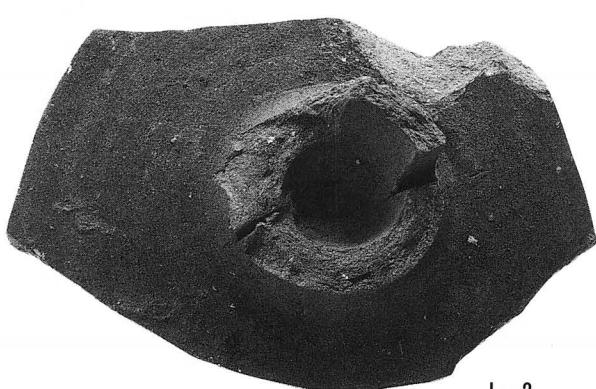
J-27



J-3



J-31

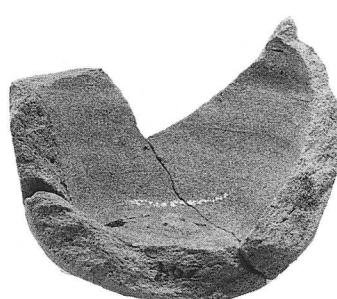


J-2



J-41

池ノ奥 2 号墳出土遺物



J-15



J-24



J-6



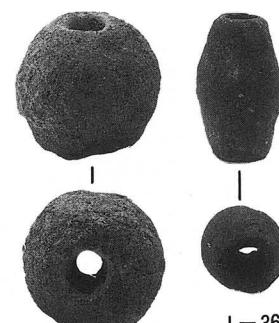
J-4

J-5



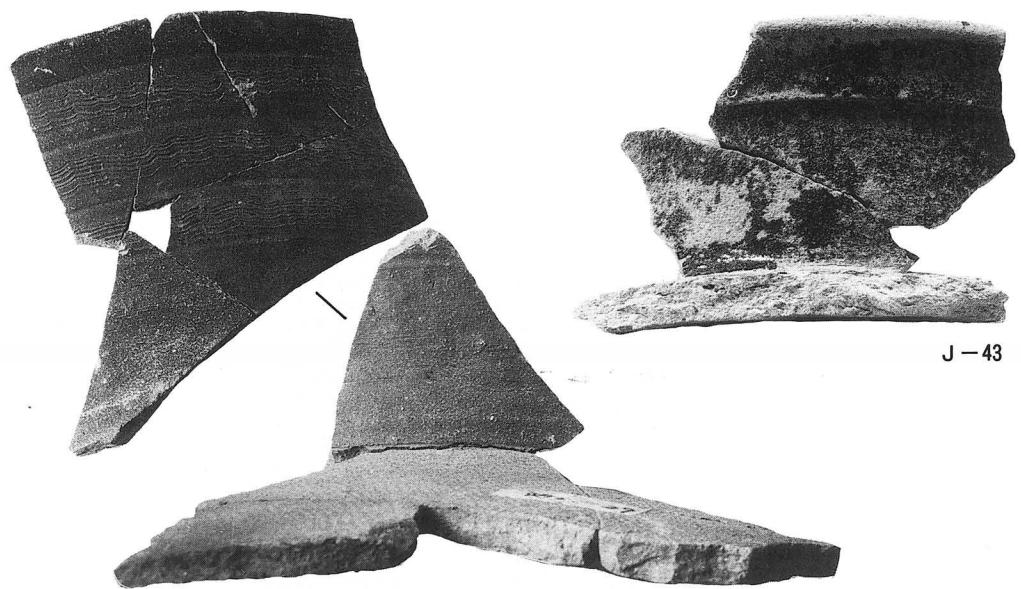
J-22

池ノ奥 2号墳出土遺物



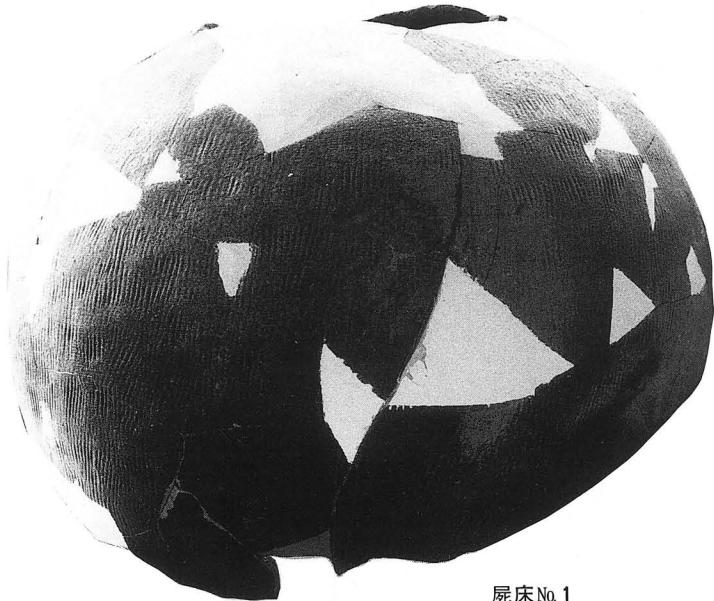
J-35

J-36



J-43

J-39



尸床 No. 1



特 殊 円 筒 棺

# 池ノ奥 C・D 遺跡



# 池ノ奥C・D遺跡

## 1. 調査に至る経緯

東工業団地内の調査は、昭和61年度においてはイガラビ遺跡を実施していたが、遺跡の調査区の北側に所在する低丘陵の斜面を踏査中、斜面上から突帯を付けた極めて特異な甕片を表面採集した。そこでイガラビ遺跡の調査区の方から2本のトレーナーを設定して調査した。しかし、表土から地山面まで平均40cm掘り下げるも、摩滅した須恵器甕片や中世の陶器片が僅かに出土しただけで、特殊土器片は含まれていなかった。

そこで、特殊土器は丘陵の上部にあるものと仮定し、イガラビ遺跡直上の丘陵尾根を分布調査した。

尾根は、西方に所在する池ノ奥1号墳の方から徐々に傾斜していくが丘陵の突端部に向けてはまた逆に高くなっていく。

分布調査の結果、この尾根が最も低くなるところを中心に、表土上から多数の甕片に混じって、同様の特殊土器片も多く発見され、大体半径10m四方位の尾根から斜面にかけて、なんらかの遺構があるものと推定された。この一帯を池ノ奥C遺跡、また丘陵先端部を池の奥D遺跡と呼称することになった。

これらの土器類は、全て破片で発見され、しかも表面採集によって多量に発見されたことや、遺跡の東南部は調査地点で畑を開墾されていたことなどから、かなり搅乱を受けた結果であろうことが容易に推測された。

しかし、それ以外の地区では、一部今回の工事のためにブルトーザーの走った形跡があるにせよ、近年全く人為的な改変が行われていないように見受けられたので遺構の大部分は残存している可能性も考えられた。

### 1) 池ノ奥D遺跡

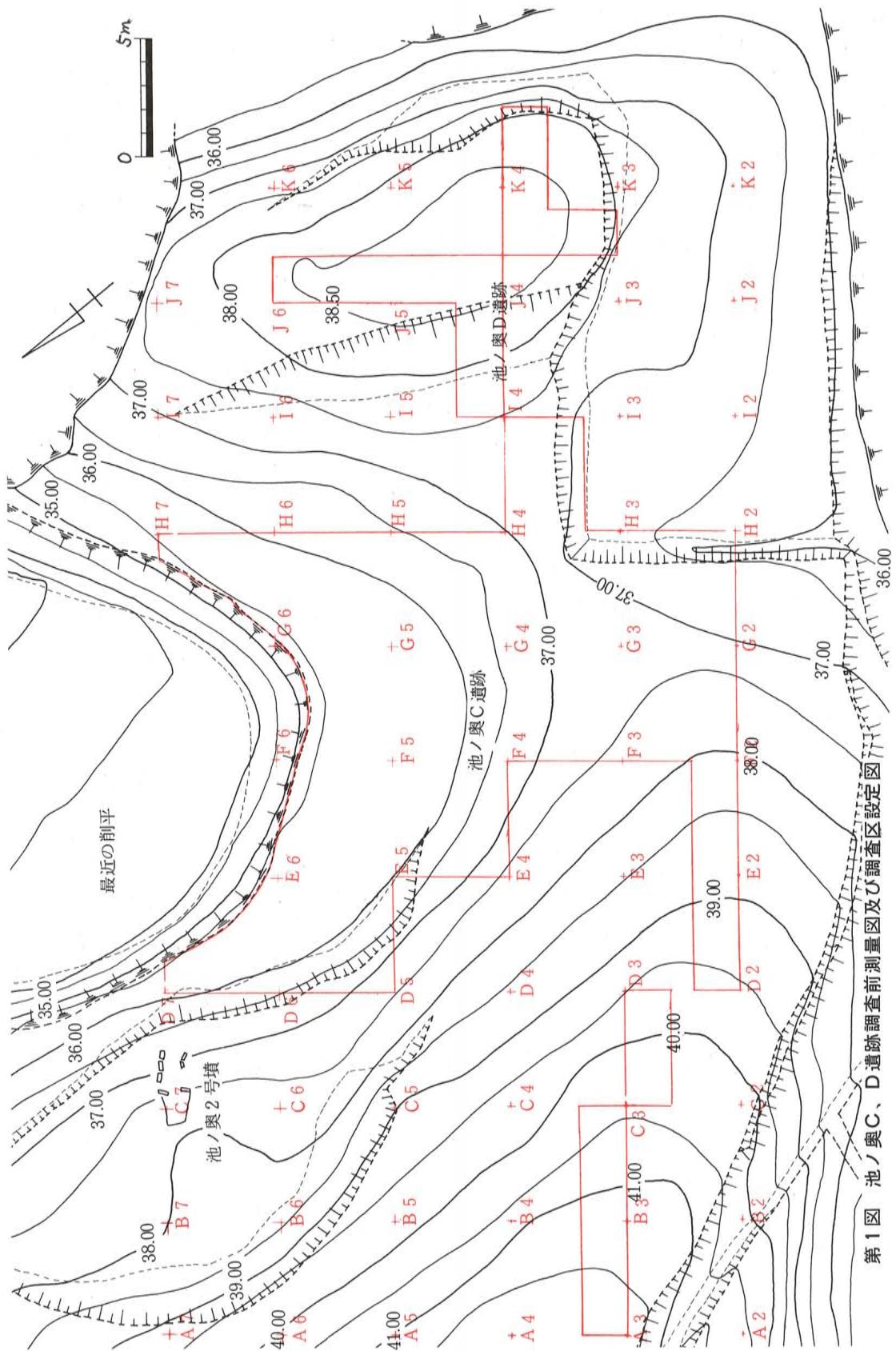
東西15m、南北20m、高さ1.5m程の古墳と推定したので、最高所を中心東西に幅2m、長さ13m、南北に幅2m、長さ15mの直交するトレーナーを設定して調査した。

(第1図) 調査期間は昭和62年4月2日～昭和62年4月13日までの内、7.5日間を要した。

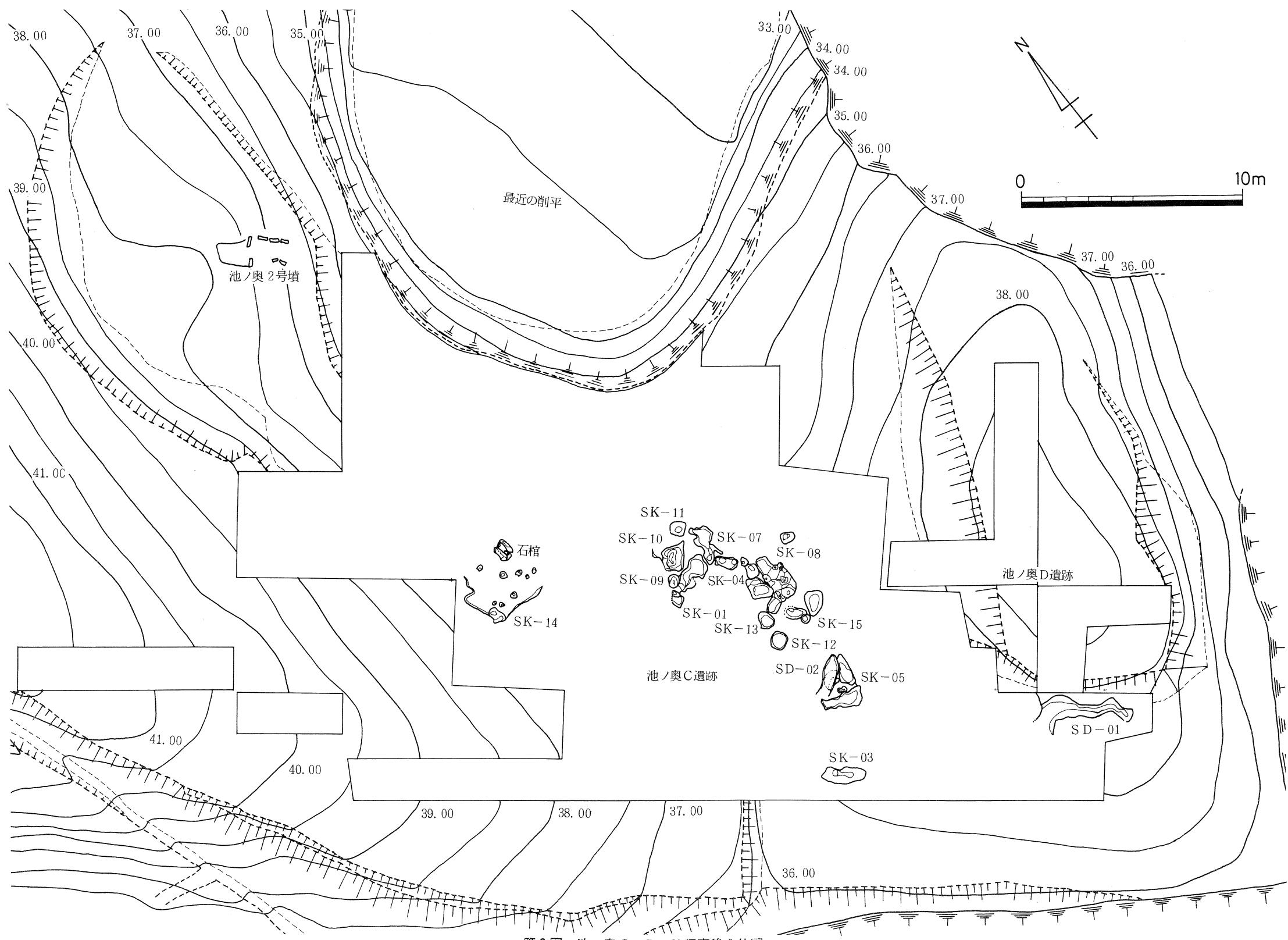
### 2) 池ノ奥C遺跡

調査区は、隣接する池ノ奥2号墳の石室主軸を基準として5mの方眼を組み、第1図のように設定した。グリッド西南端の杭をもってグリッド名とする。

調査期間は昭和62年4月2日～昭和62年8月11日までの内、62日間を要した。



第1図 池ノ奥C、D遺跡調査前測量図及び調査区設定図



## 2. 調査の概要

調査の結果、池ノ奥D遺跡からは遺構は検出されず、表土及び第2層から特殊土器A類を含む須恵器片29が出土したのみであった。

池ノ奥C遺跡からは小形石棺一基、集石群、溝状遺構2、土壙15基が検出され(第2図)。遺物は特殊土器20個体以上、須恵器の甕18個体以上、その他の須恵器類多数が出土し、破片総数3,000片を数えた。

### (1) 土層について

#### 1) G 2 杭～G 6 杭 (第3-1図-①)

遺跡の中央部を南西から北東へ等高線にはほぼ直交する土層断面である。

G 2 杭からG 3 杭までは表土と暗褐色砂質土の2層であり、表土から20～30cmで明褐色～黄褐色粘性土の地山に達する。

G 3 杭からG 5 杭までは、第2層の暗褐色～茶褐色砂質土の下に第3層暗褐色砂質土がみられ、土壙群の基盤となっている。この土層は10～40cmの堆積があり、表土から30～70cmで黄褐色粘性土の地山に達する。

G 5 杭からG 6 杭までは、表土から地山までの間に6層にわたる堆積があり、南西部や南東部から流れ込んだ様相が見られる。第1層表土は黒褐色土、第2層は明褐色～褐色砂質土、第3層は褐色～やや暗褐色砂質土、第4層は暗褐色～黒褐色土、第5層は暗黄褐色砂質土、第6層は黄褐色砂質土であり、表土から50～85cmで黄褐色～明褐色粘性土の地山に達する。

遺物はG 2～G 6間の第4層までの各層に特殊土器を含む須恵器片多数が出土している。

#### 2) E 4 杭～I 4 杭 (第3-1図-②)

1)のGラインにG 4 杭で直交する土層断面である。表土は茶褐色～暗褐色土、第2層は褐色～茶褐色砂質土、第3層は明褐色砂質土であり、この第3層から土壙群が検出されている。表土から第4層明褐色～黄褐色粘性土の地山までは30～70cmを測る。

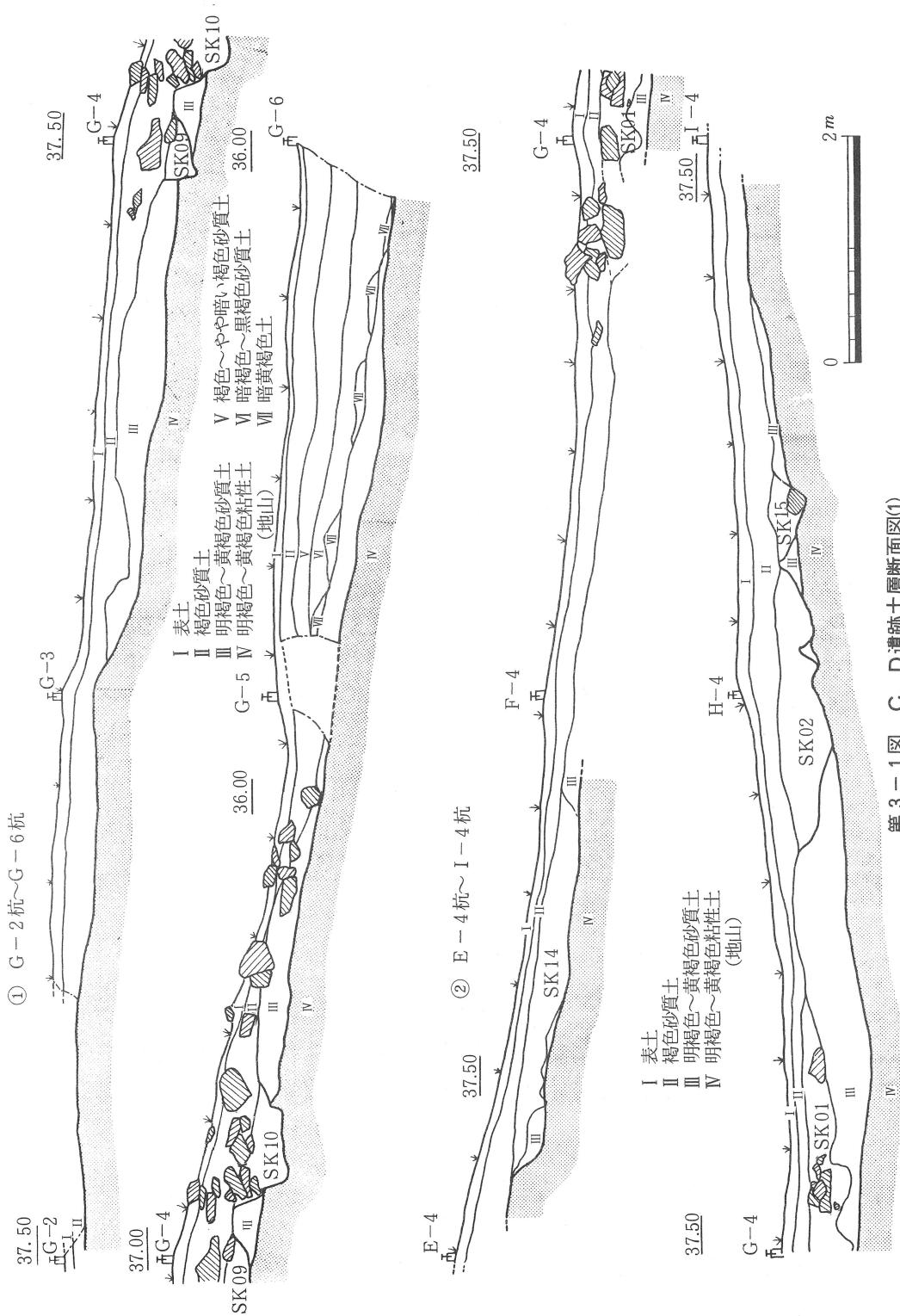
遺物は各層にわたって出土している。

#### 3) I 4 杭～K 4 杭 (第3-2図-③)

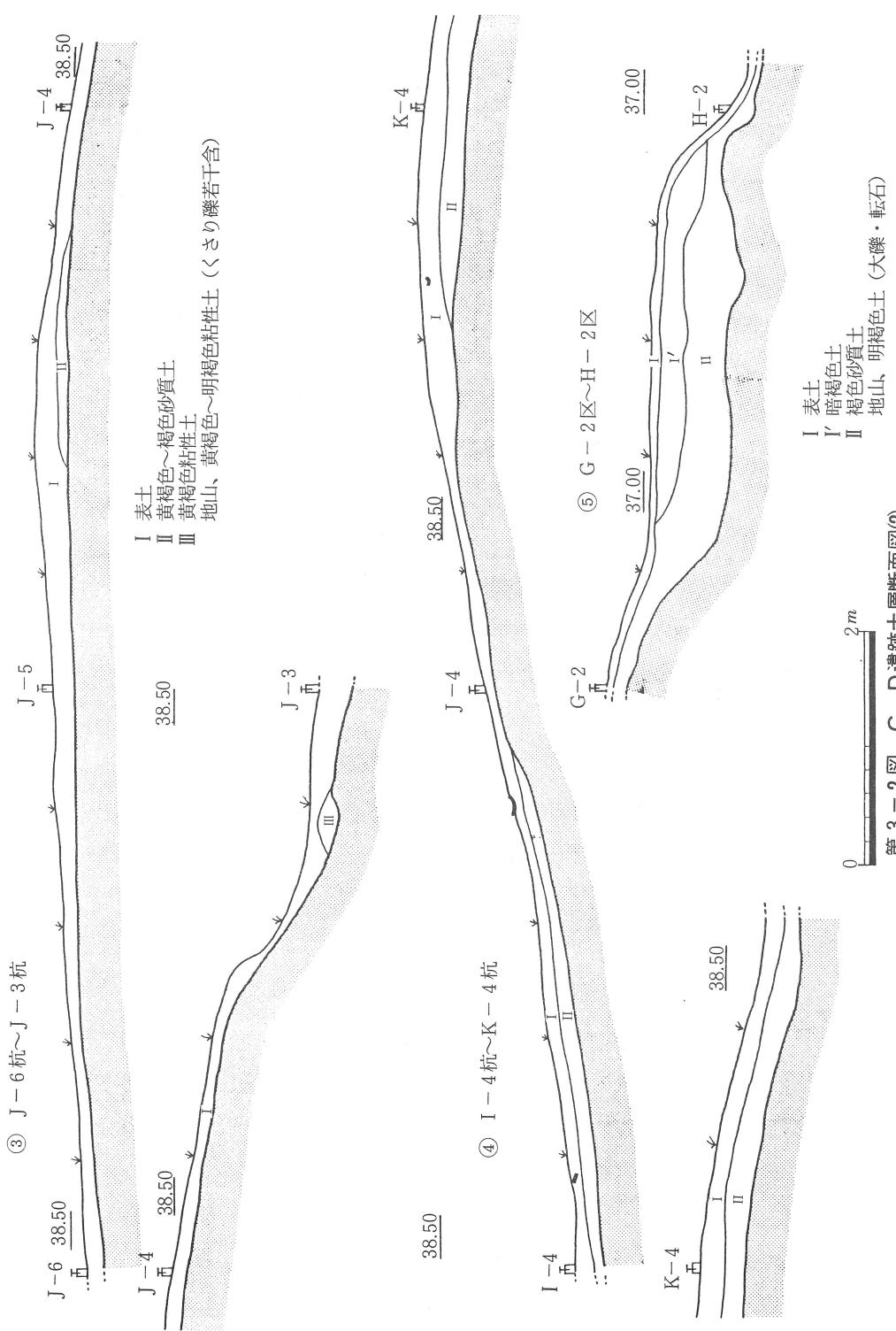
2)の4ラインから続くD遺跡の東西の土層断面である。表土と第2層黄褐色砂質土の下は黄褐色～明褐色粘性土の地山であり、表土からは10～40cmを測る。

遺物は特殊土器を含む須恵器片が出土している。

#### 4) J 3 区～J 5 区 (第3-2図-④)



第3-1図 C, D遺跡土層断面図(1)



第3-2図 C, D 遺跡土層断面図(2)

3)のD遺跡東西ラインに直交する南北の土層断面である。南側のJ3区一帯は、畑の耕作で削平され低くなっている。大部分が暗褐色砂質土の表土一層であるが、J4区中央部の約2mの範囲にのみ第2層褐色砂質土が10cm弱堆積している。表土から黄褐色～明褐色粘性土の地山までは10～25cmを測る。

遺物は特殊土器を含む須恵器片数点が出土している。

#### 5) G2区～H2区（第3-2図-⑤）

1)のGラインにG2杭北2mで直交する土層断面である。G2区東端は畑耕作により削平されている。表土と第2層褐色砂質土からなり明褐色土の地山に至るのであるが、その地山がGライン東1mまでに70cm余りも落ち込み凹凸を繰り返しながら現在の畑の地山に続いている。G2区の第2層褐色砂質土中の遺物に明治5年の銀銭・ガラス製品、I2区第3層に寛永通宝があることから、Gライン東からの落ち込みは近世～明治頃の削平の判断した。

以上見てきたように、この遺跡の基本的な層序としては第1層表土、第2層褐色系砂質土、第3層黄褐色～明褐色砂質土、第4層黄褐色～明褐色粘性土（地山）となる。検出された遺構群は第3層から地山に掘りこまれている事が判った。

#### 〔各土層中出土の遺物〕（第4図）

##### 1) 表土中の遺物

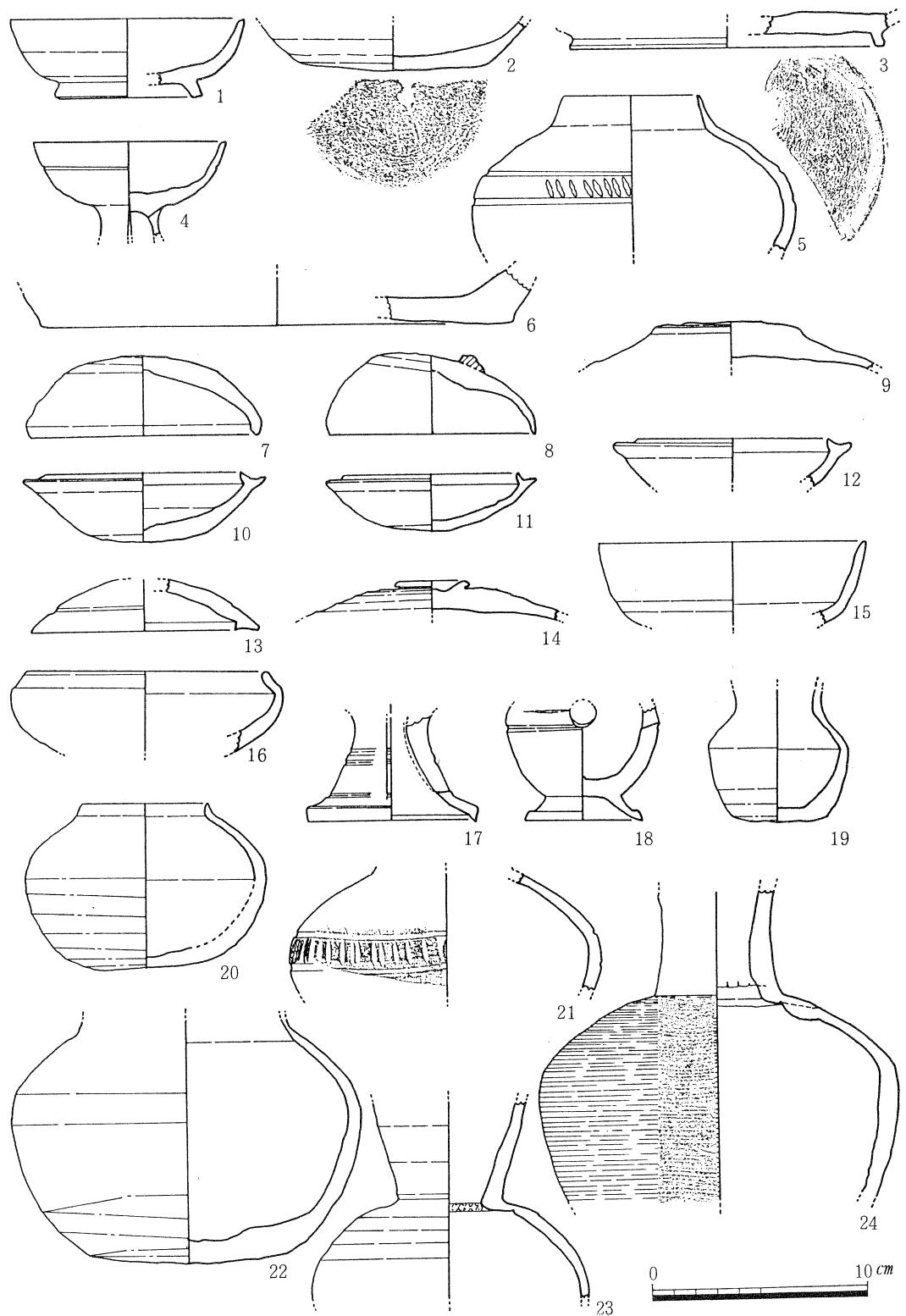
1は高台付杯で底部外面に回転ナデを施す。（柳浦3式、高広ⅢB期）2は無高台の杯で回転糸切り後、多方向にナデる。3は盤である。回転糸切り。（柳浦4式、高広ⅣA期）4は小形の高杯で脚部の四方に切り込み様の透かしを持つ。5は短頸壺で、体部に櫛状工具による刻み目を施す。6は備前焼きの甕か壺の底部である。

##### 2) 第2層中の遺物

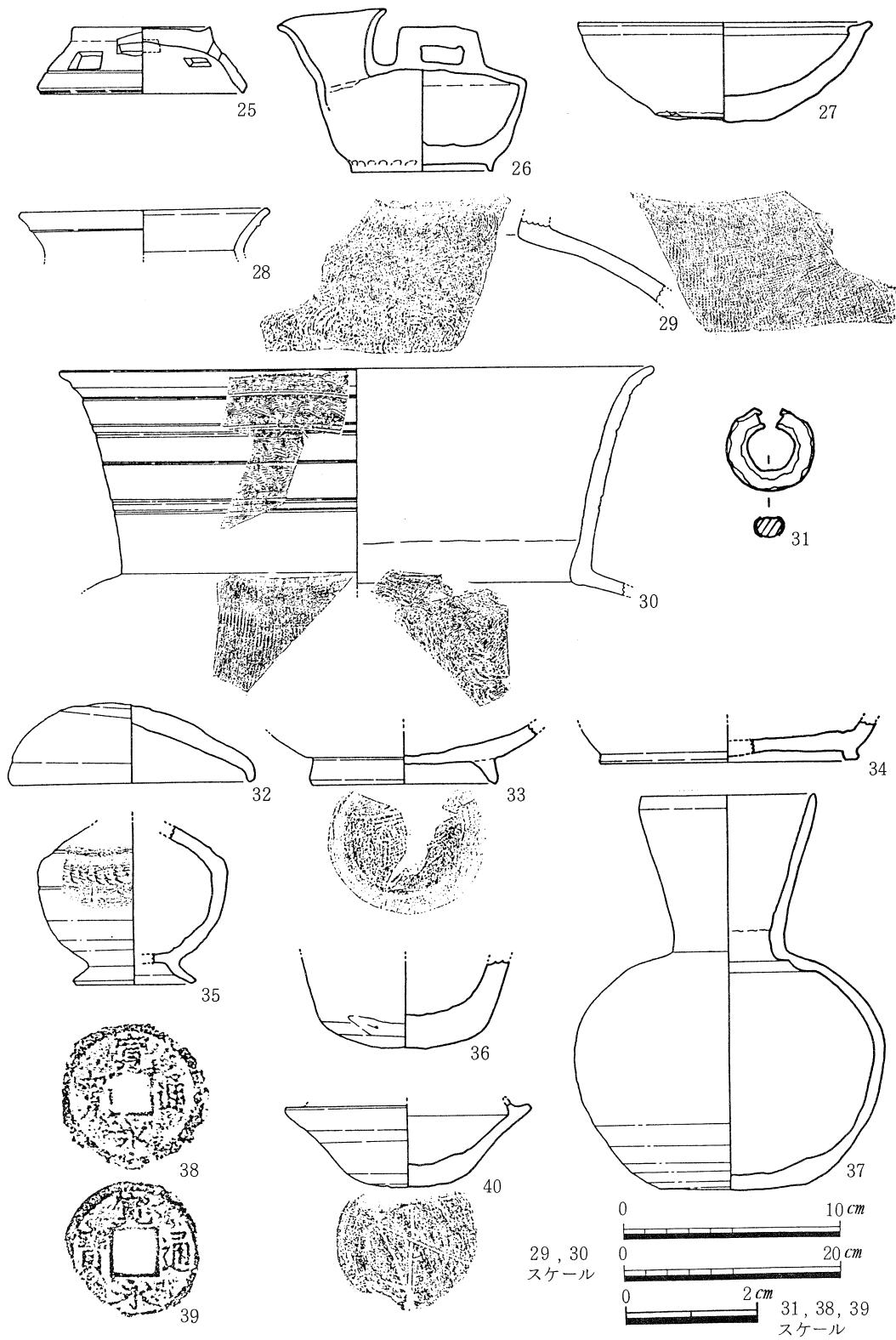
7、8は小形化した杯蓋である。（山本編年Ⅳ期、高広ⅡA期）9は端部が欠けていて形態不明であるが、実測図では蓋状のものを想定した。10、11、12は立ち上がりを持つ杯身である。（山本Ⅳ期、高広ⅡA期）13はかえりの付く小形の蓋であるが、中心部を欠き、つまみの有無、形状は不明である。14は低い輪状つまみを付ける蓋であるが端部の形状は不明である。15は杯の破片である。高台が付くと思われる。16は屈曲口縁の杯である。17は高杯の脚部片、18は低脚の付く憩、19は小壺である。20、21は短頸壺である。21の体部には板状工具による刻み目が施されている。22は広口壺、23、24は長頸壺である。25は円面硯で脚部に長方形の透かしを上段四方、下段四方に穿つ。使用痕は無い。26は小形の平瓶である。水滴として使われたものであろう。（奈

註1 註2

註3



第4-1図 表土及び第2層出土遺物実測図



第4-2図 第2～第4層出土遺物実測図

良期) 27は蓋受けを持つ杯である。0.8~1.2と厚手。口縁端部を内外につまみだして、やや内側に傾斜した平坦面を作り蓋受けとしている。底部は回転ヘラ切り未調整。その他は内外面共回転ナデ調整で、通常のIV期の杯身とは形態も手法も異なる。28~30は甕で28は口縁部、29は体部の破片であり、30は口縁部に波伏文を三段施す。31は鍍金環で外径2.0cm、内径1.0cmを測る。

### 3) 第3層中の遺物

32は杯蓋である。(山本IV期、高広II A期) 33、34は高台付杯であるが、33は底部に静止糸切り痕、34は回転糸切り痕を残し、高台の高さ、高台の付く位置が異なる。35は磧、36は壺又は磧の底部か。37は長頸壺で底部外面にヘラ記号(×)を持つ。38、39は寛永通宝である。

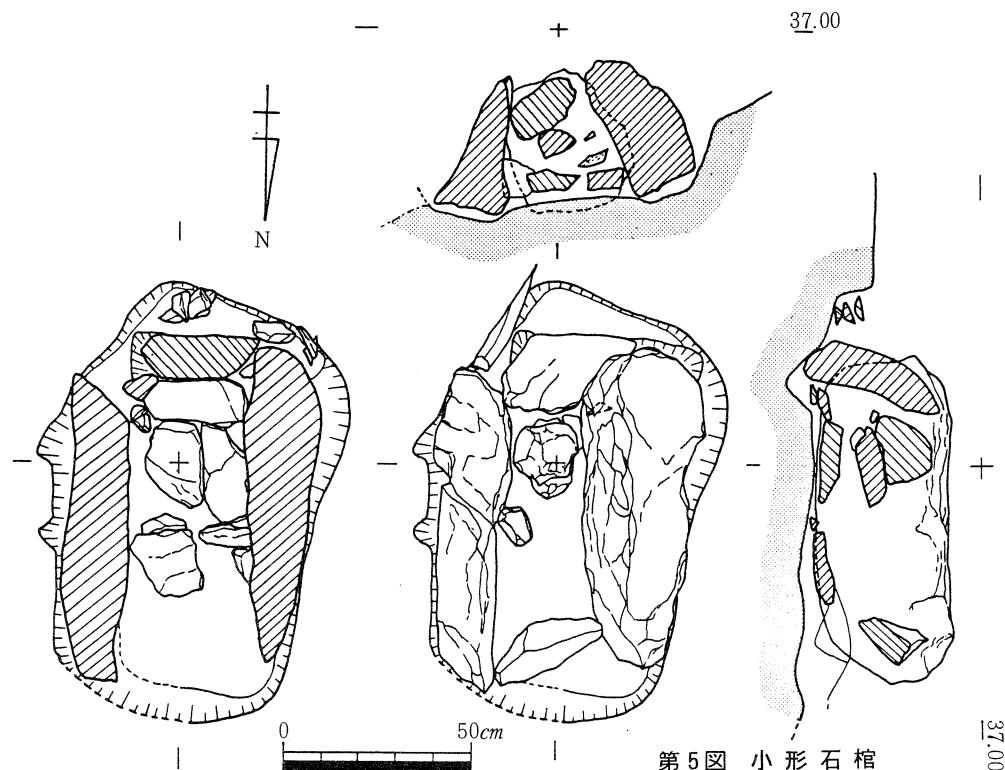
### 4) 第4層中の遺物

40は立ち上がりを持つ杯身である。(山本IV期、高広II A期)

## (2) 遺構とその出土遺物について

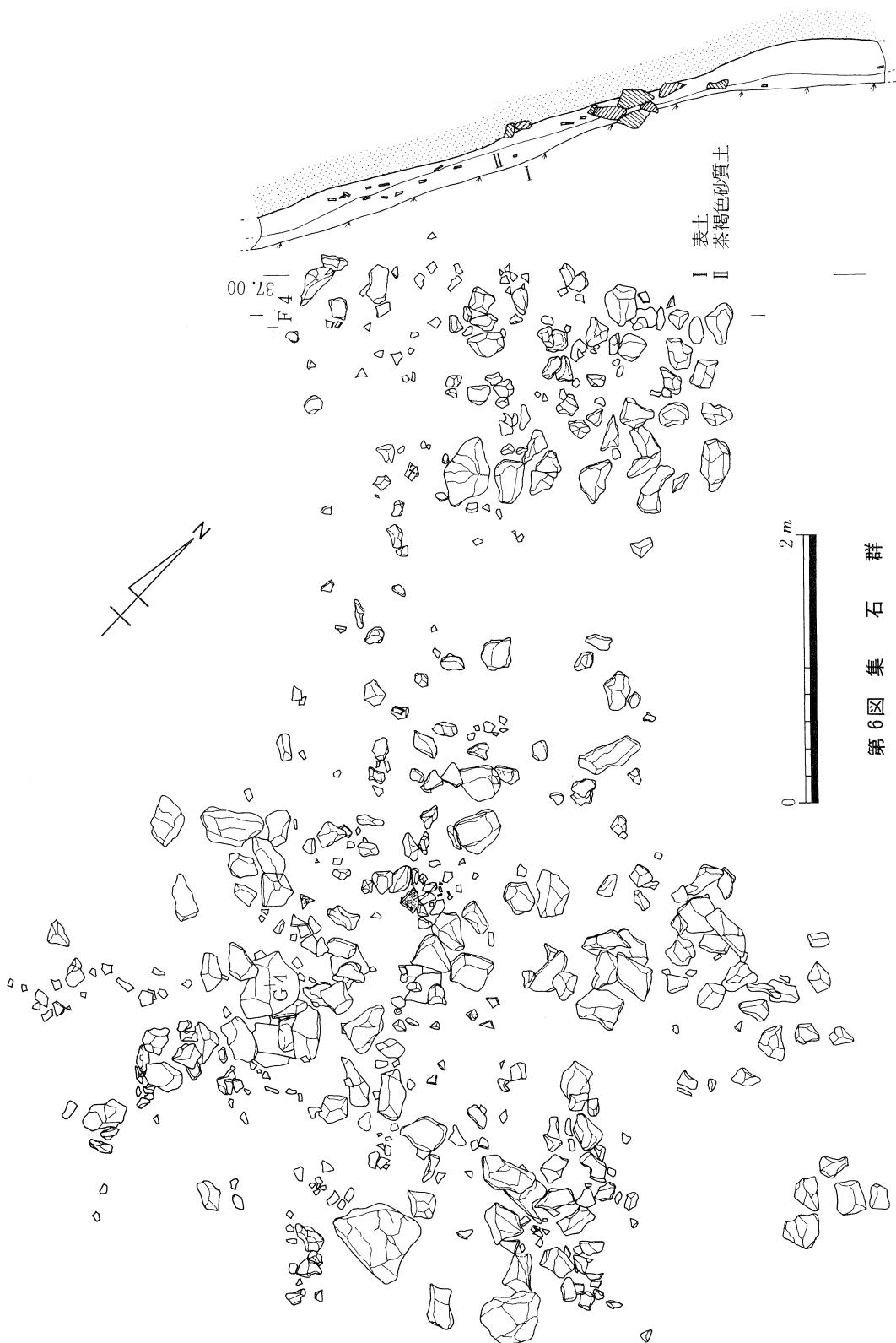
### 1) 小形石棺(第5図)

E4区検出。丘陵の東斜面に位置し、標高は床面で36.5m。長軸を南北にとる。石棺の内径は南北長70cm、東西長30cm、高さ35cmを測る。



第5図 小形石棺

第6図 石群



黄褐色粘性土の地山を  $1.2 \times 0.8$  m の範囲で深さ 10~20cm 堀り込んで平坦面を作り、掘り方とする。その内側を石の幅だけさらに 2~8 cm 堀り込んで東西の側石をたて、その側石ではさむように小口石をたてる。東側の側石は縦 35 × 横 85 × 厚み 10~20 cm、西側の側石は縦 35 × 横 85 × 厚み 20 cm、南側の小口石は縦 35 × 横 33 × 厚み 10 cm の割石である。北側の小口石は残存していない。掘り方底面には 1~5 cm 厚みで褐色砂質土を敷き、その上に縦 10~15 × 横 20 × 厚み 5 cm の板石を 7 枚置いて敷石としている。

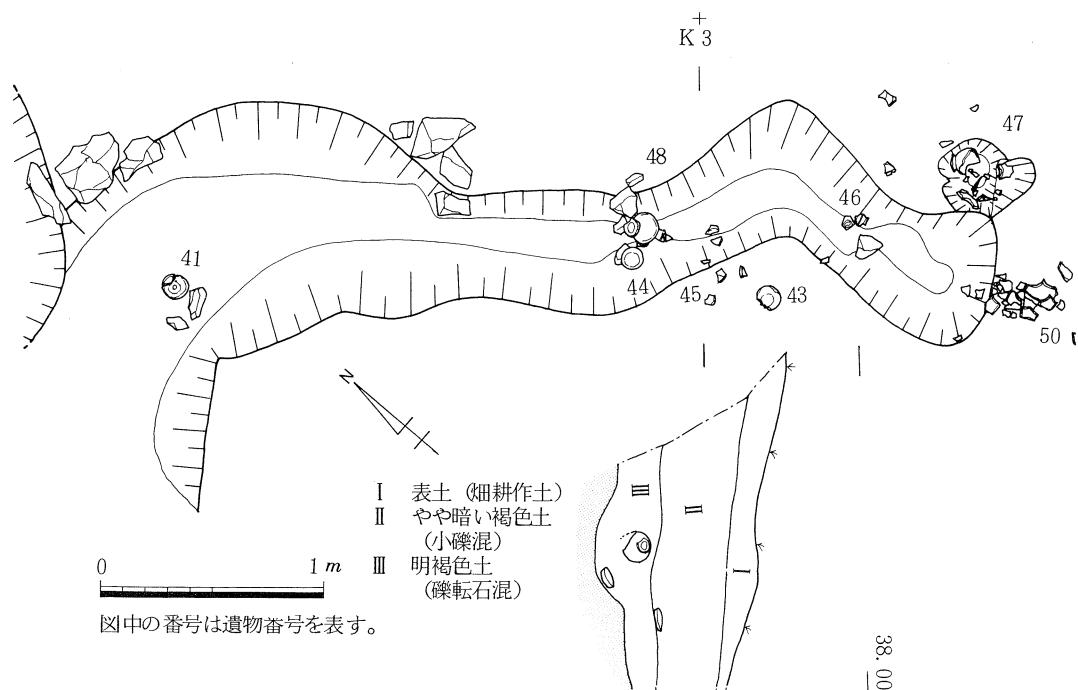
天井石は残存しておらず、石棺内には 10~25 cm 大の石が 4 個と特殊土器 A 類（第 25 図 1, 2）の破片がやや暗い褐色土と共に流れ込んでいた。墳丘は確認できなかった。

### 2) 集石群（第 6 図）

F 4 区、G 4 区の表土及び第 2 層中から 10~70 cm 大の石 200 個余りが、約 8 m 四方の広さに散乱した状態で検出された。石の上下や間からは、特殊土器片を含む多数の須恵器片が出土している。

### 3) S D - 0 1 （第 7 図）

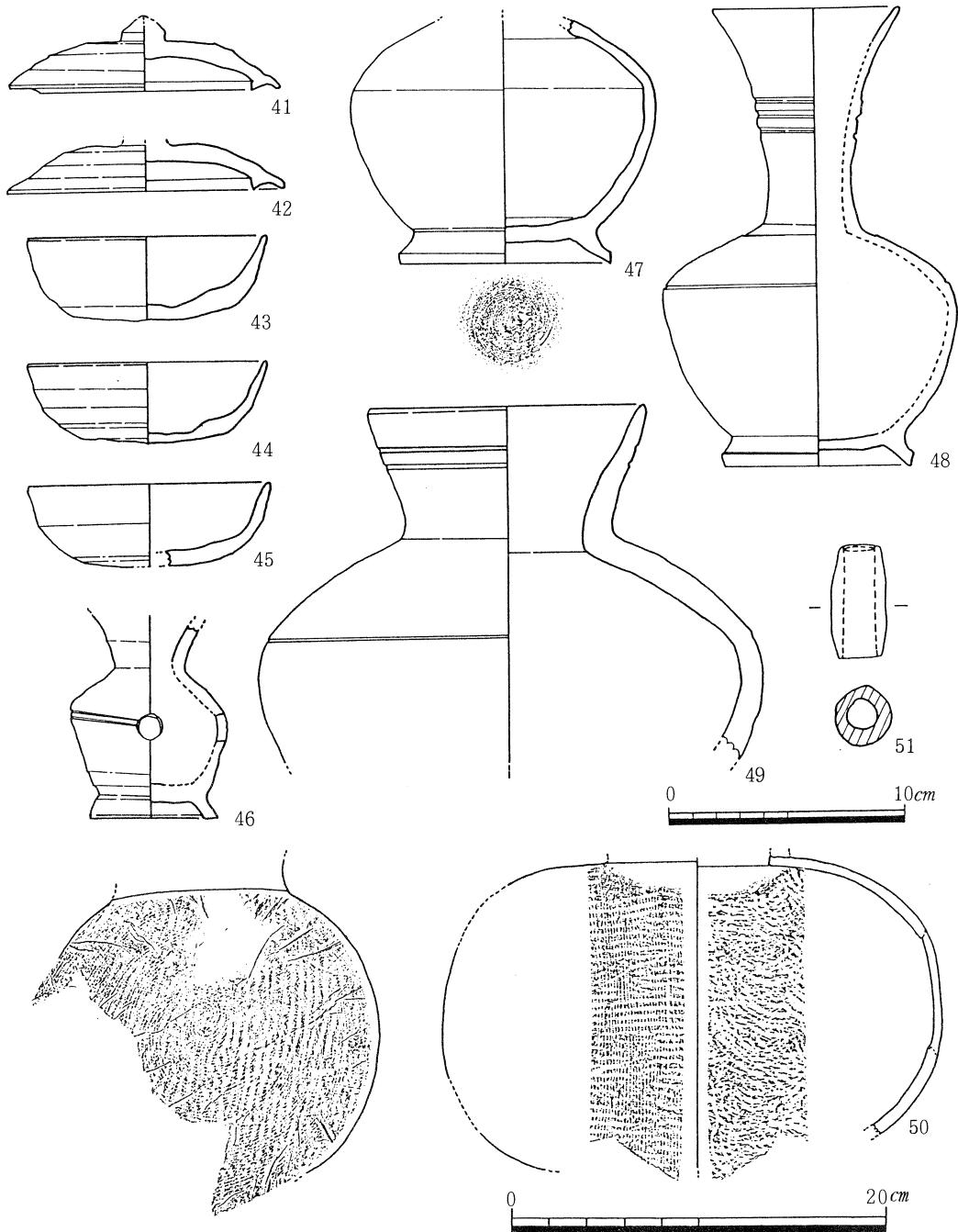
J 2 ~ K 2 区の地山面より検出。上端幅 40 cm ~ 1 m、下端幅 15 ~ 65 cm、深さ 12 cm の U 字状を呈し、長さは約 4 m を測る。西南方向に自然に消滅する。出土遺物はいずれも溝底からかなり浮いた状態、もしくは溝の外から出土している。



第 7 図 SDO 1

〔出土遺物〕 (第8図)

41は宝珠状のつまみとかえりを持つ蓋である。(柳浦1式, 高広II B期) 42も41と同型のものであるがつまみを欠損している。43~45は同型の杯で41, 42の蓋とセット



第8図 SD 01 出土遺物実測図

になるようなタイプのものである。46は鰯，47～49は長頸壺で，48はほぼ完形である。50は横瓶，51はかなり大形の管状の土錐である。

#### 4) S D - 0 2 (第9図)

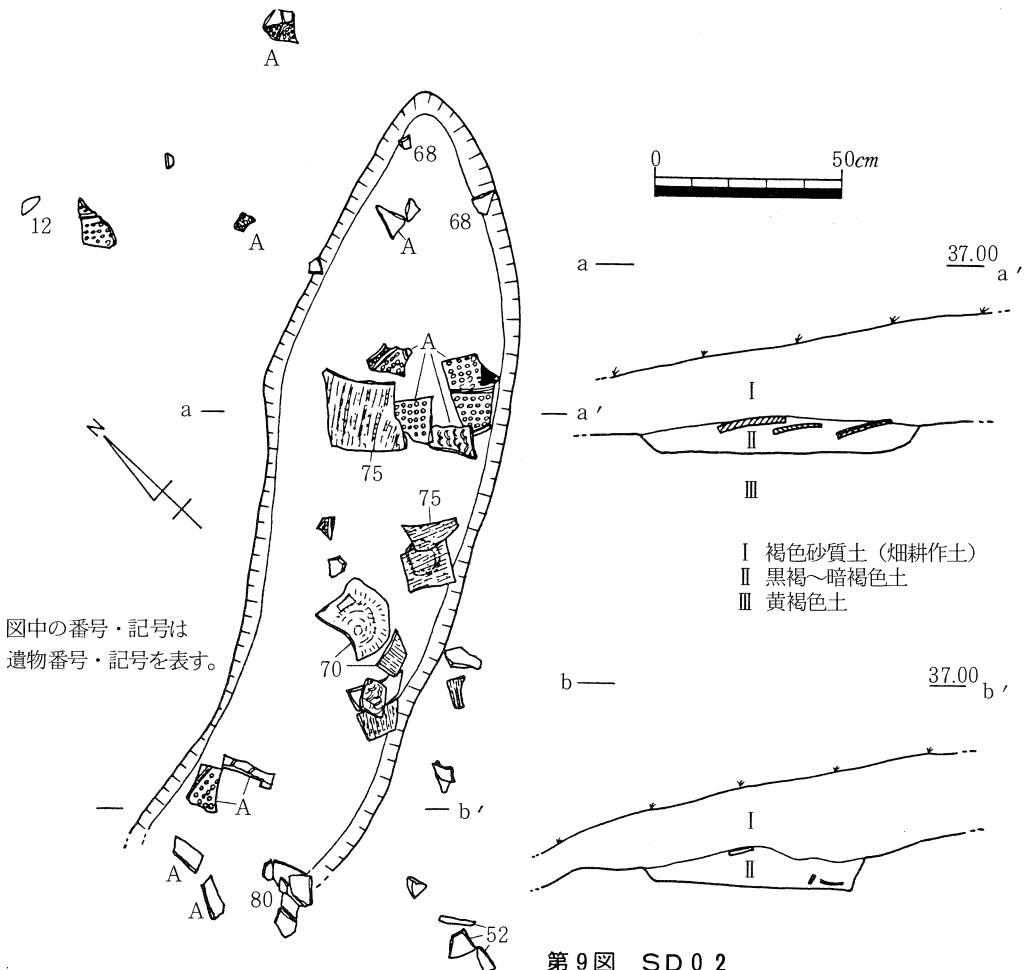
H 3 区の耕作土直下で検出。削平を受けており南西端は確認できなかった。上端幅75cm, 下端幅60cm, 深さ10cm, 長さ2.2m以上を測る。溝の埋土は黒褐色土一層である。

#### (出土遺物) (第10図, 第25図)

須恵器の甕片 (68, 70, 75, 80), 特殊土器片 A・C類がある。

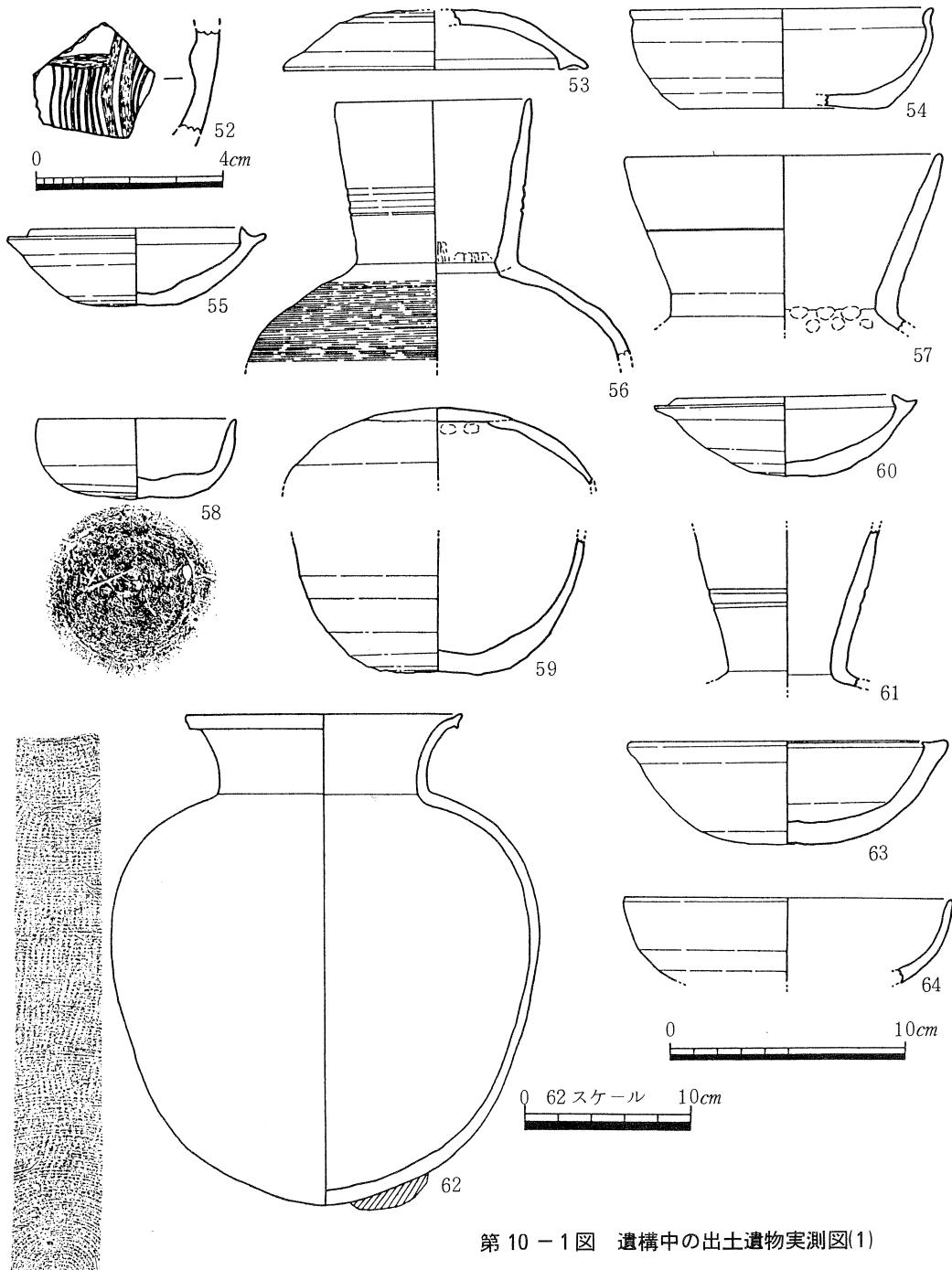
#### 3) S K - 0 1 (第11図)

G 3 区検出。G 4 杭南東2.5m程の範囲に不整形な落ち込みが連なって検出された。深さは20～40cmを測る。上層には10～45cm大の石と共に暗褐色～褐色の砂質土が、下層には褐色～暗褐色の粘性土が堆積しており、多数の土器片が出土した。

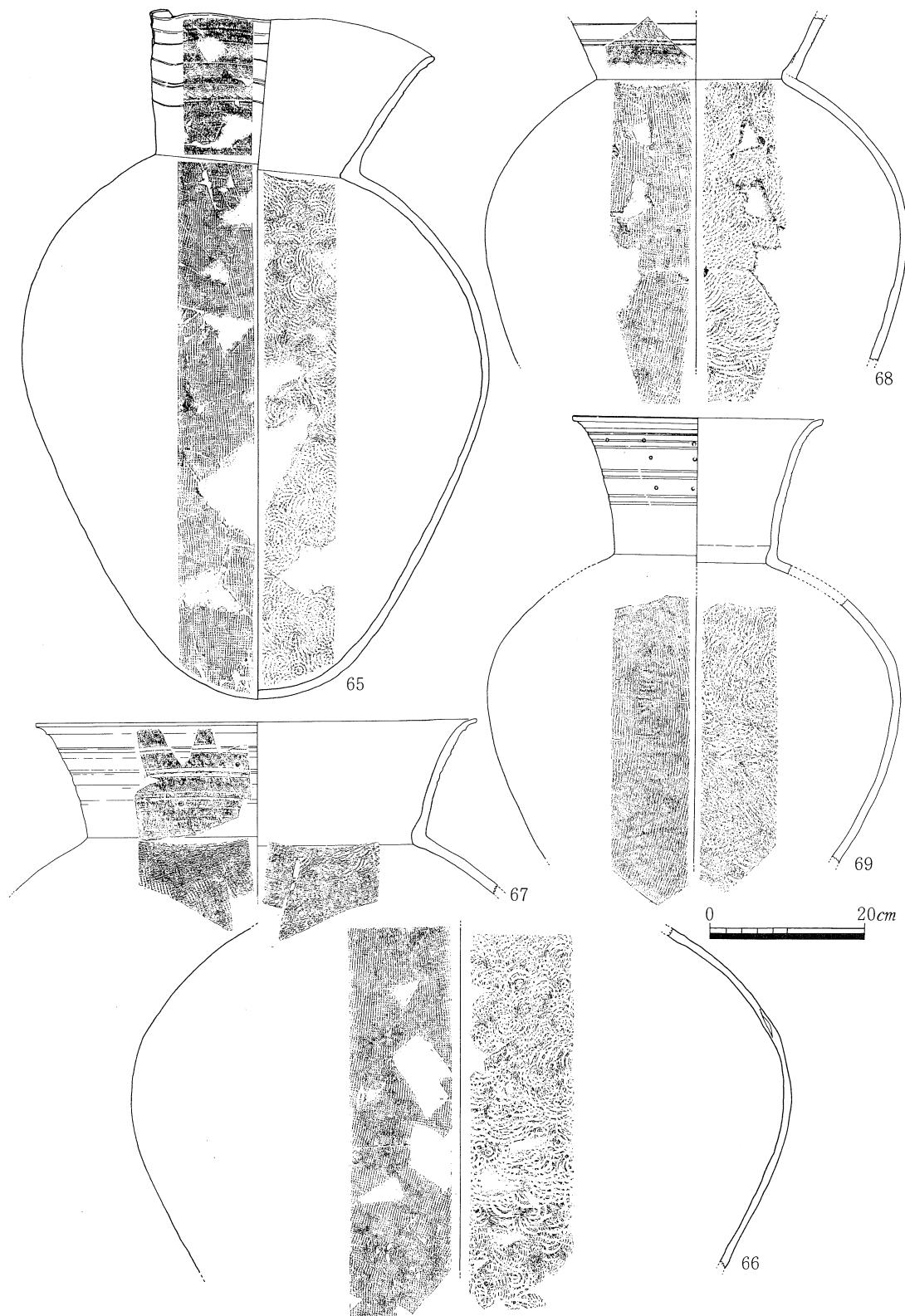


〔出土遺物〕 (第10図, 第25図)

52は青白磁の梅瓶の小破片である。櫛を施文具とした渦文を施す。中国宋代の輸入陶磁の第3期で13世紀南宗後半のものかと思われる。53はかえりの付く蓋である。54は屈曲口縁の杯で、底部に回転糸切り痕を残す。(柳浦4式) 他に須恵器甕片(72,

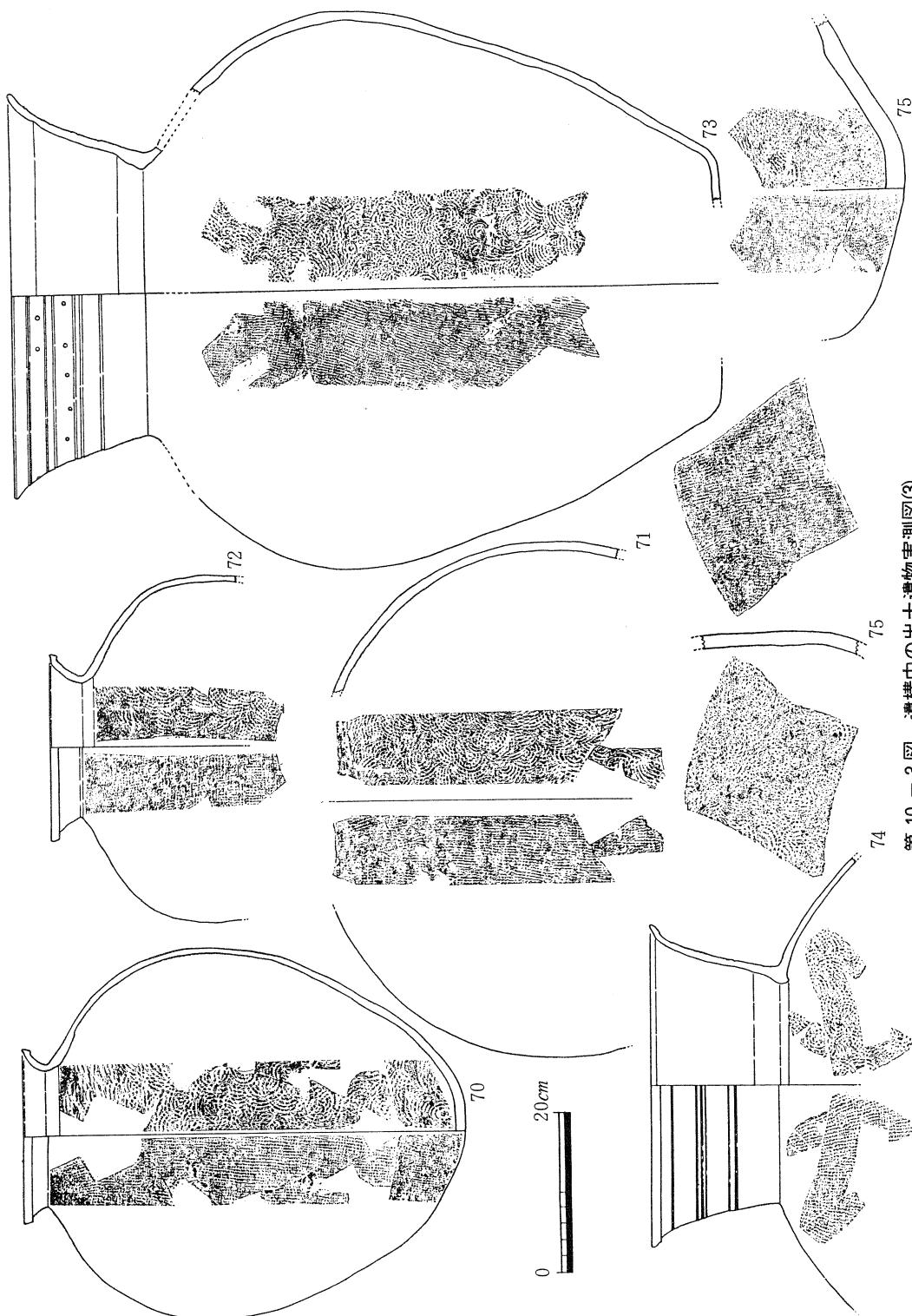


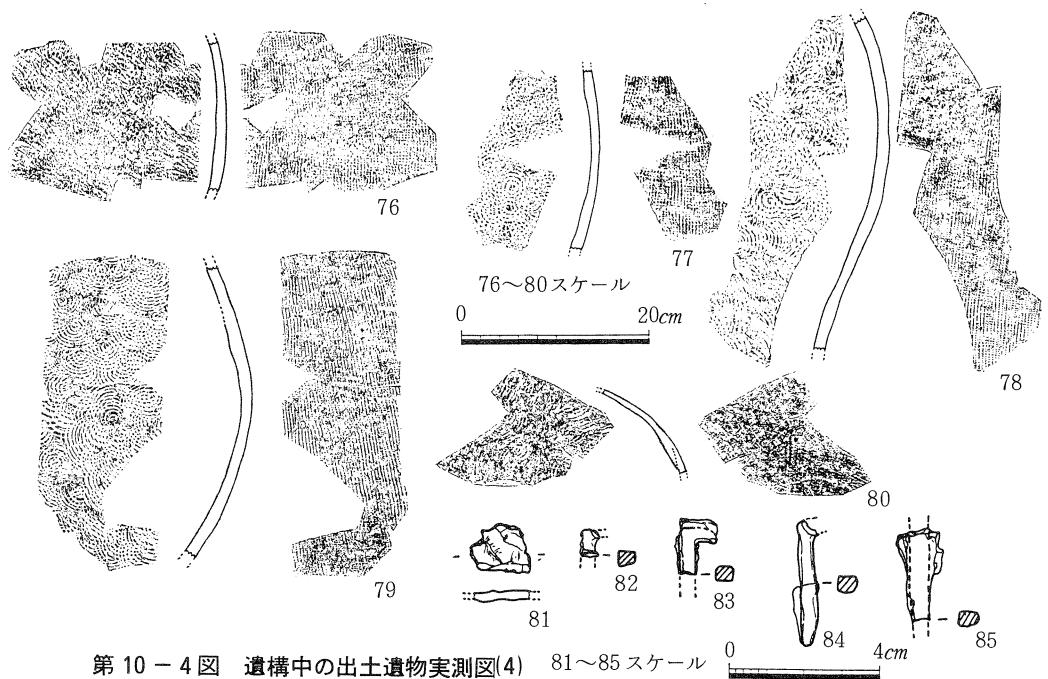
第10-1図 遺構中の出土遺物実測図(1)



第 10 - 2 図 遺構中の出土遺物実測図(2)

第 10-3 図 遺構中の出土遺物実測図(3)





第10-4図 遺構中の出土遺物実測図(4) 81～85スケール  
74)，特殊土器片A・D・H・I・J・M類がある。

#### 6) SK-02 (第12図)

H4杭を中心として東西2.5m, 南北2.5mの範囲に検出された土壙の集まりである。第3層の明褐色砂質土から地山にかけて掘り込まれている。平面プラン時出時の埋土の状態は、①土壙の黒褐色土を中心として、②・⑥土壙の暗褐色土、その周辺部のやや暗い褐色土等が複雑に切り合っていた。①・②・⑥土壙内に遺物が集中していたので、これらを中心に述べる。①土壙は上端で50×60cmの隅丸方形を呈し、深さは10～14cmを測る。上層には黒褐色土、下層には暗褐色土が堆積していた。②土壙は①の直下に在り、上端で68×105cmの長方形を呈し、深さは20～30cmを測る。暗褐色土が堆積していた。⑥土壙は②とV字をなしており、上端で60×120cmの長方形を呈し、深さ9～25cmを測る。黄褐色～黒褐色土が堆積していた。

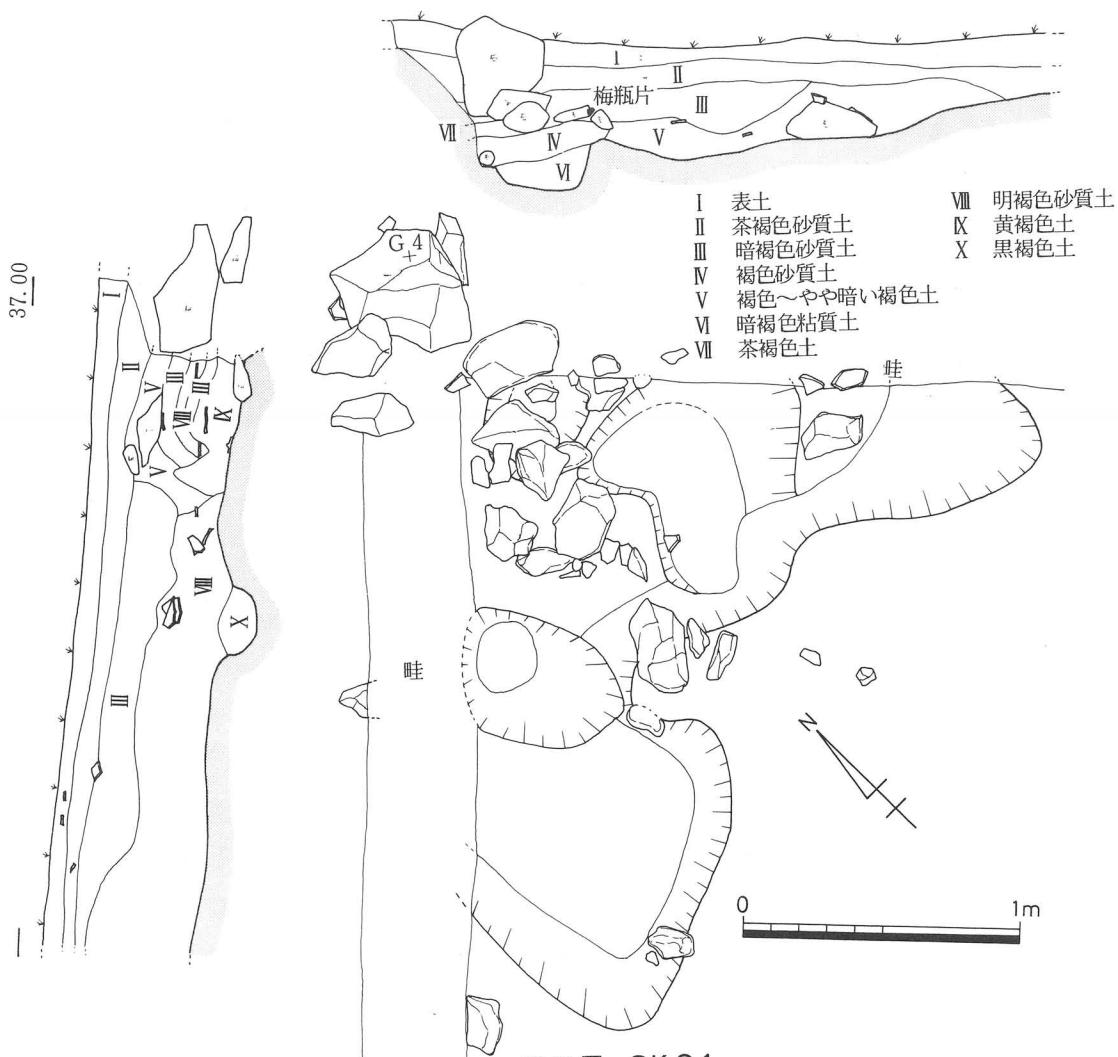
#### 〔出土遺物〕 (第10図, 第25図)

55は立ち上がりを持つ杯身である。(山本IV期, 高広IIA期) 56, 57は長頸壺である。他に須恵器甕片(65, 67, 68, 71, 72, 74, 75, 76, 78), 特殊土器片A・B・C・D・E・F・I・J・K・M・P・R類, 鉄釘(81)等が出土している。

#### 7) SK-03 (第13図)

H2区東南隅より検出。不整な長円形を呈し、東西径70cm, 南北径205cm, 深さ約30cmを測る。埋土は暗褐色～褐色土である。底面から5～20cm上で、長さ35～45cm,

37.00



第11図 SKO 1

太さ7~8cmの木材4~5本分が炭化して出土した。壙底がかすかに焼けていたが壁面は焼けていないので火が燃やされたのはそんなに長時間ではないであろう。

#### 〔出土遺物〕（第10図）

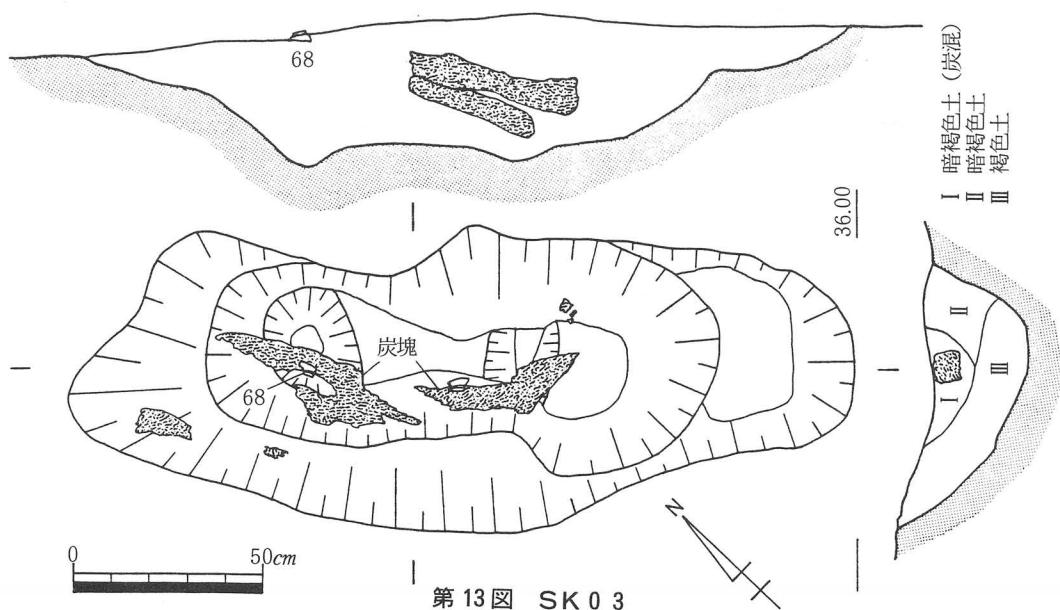
須恵器小片3、うち一片は68の甕片である。

#### 8) SK-04 (第14図)

G 4 区検出。やや不整な隅丸長方形を呈し、東西105cm、南北40~50cm、深さ25cmを測る。底面にはさらに二つのピットがあり、東側のピットは上端径20×30cm、深さ10~15cm、西側のピットは上端径30×24cm、深さ10cmを測る。埋土はピット中が暗褐色土、ピットより上は一部暗褐色土で大部分は暗黄褐色土である。



36.00



第13図 SK 03

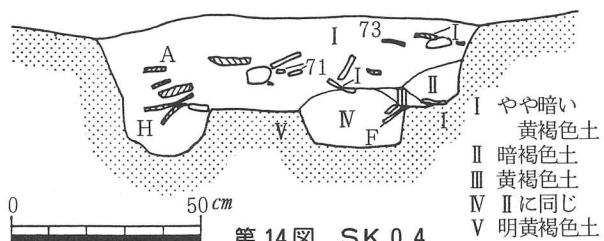
〔出土遺物〕(第10図, 第25図)

須恵器甕片(67, 71, 73), 特殊土器片A・F・H・I類がある。

#### 9) SK-05 (第15図)

SD-02の直下から東にかけて検出された不整形土壙のあつまりである。①土壙は $64 \times 155$  cm, 深さ20cmを測り, 埋土は暗黒褐色土, ②土壙は $70 \times 180$  cm, 深さ16 cmで, 埋土は茶褐色土, ③土壙は $60 \times 70$  cm, 深さ13cm, 埋土は暗褐色~やや暗い褐色土である。

〔出土遺物〕(第10図, 第25図)

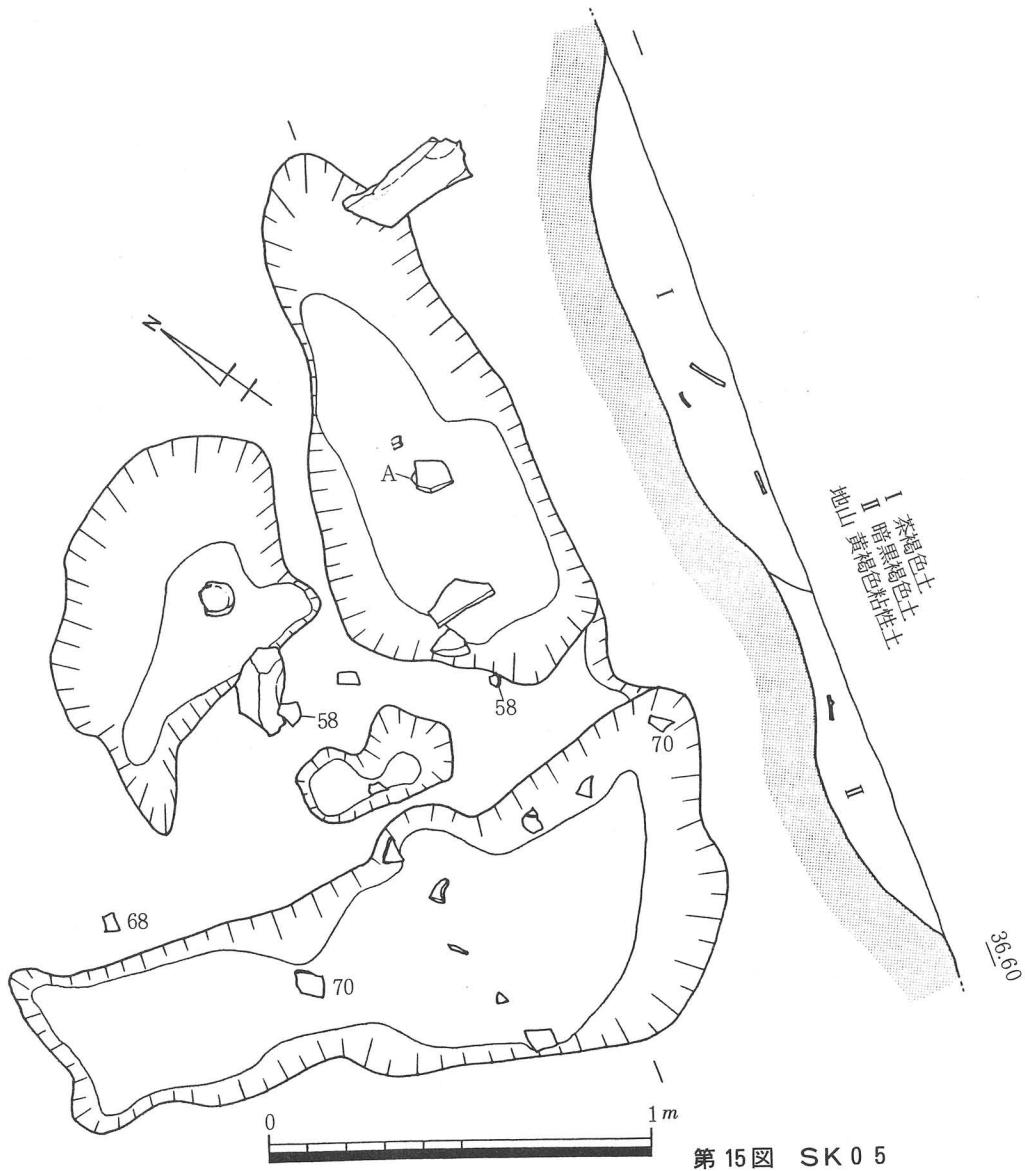


第14図 SK 04

58は無高台の杯で口縁部がかなり変形している。底部外面にヘラ記号がある。(高広ⅡB期)他に須恵器甕片(68, 70, 77, 80), 特殊土器片A類がある。

#### 10) SK-06 (第16図)

G 4区検出の不整形土壙である。最大長180cm, 深さ5~13cmを測る。北と南の端がピット状に深くなる。埋土は暗黄褐色土に礫, 転石を含む。



〔出土遺物〕（第10図、第25図）

須恵器甕片（67, 72, 74）、特殊土器片H類がある。

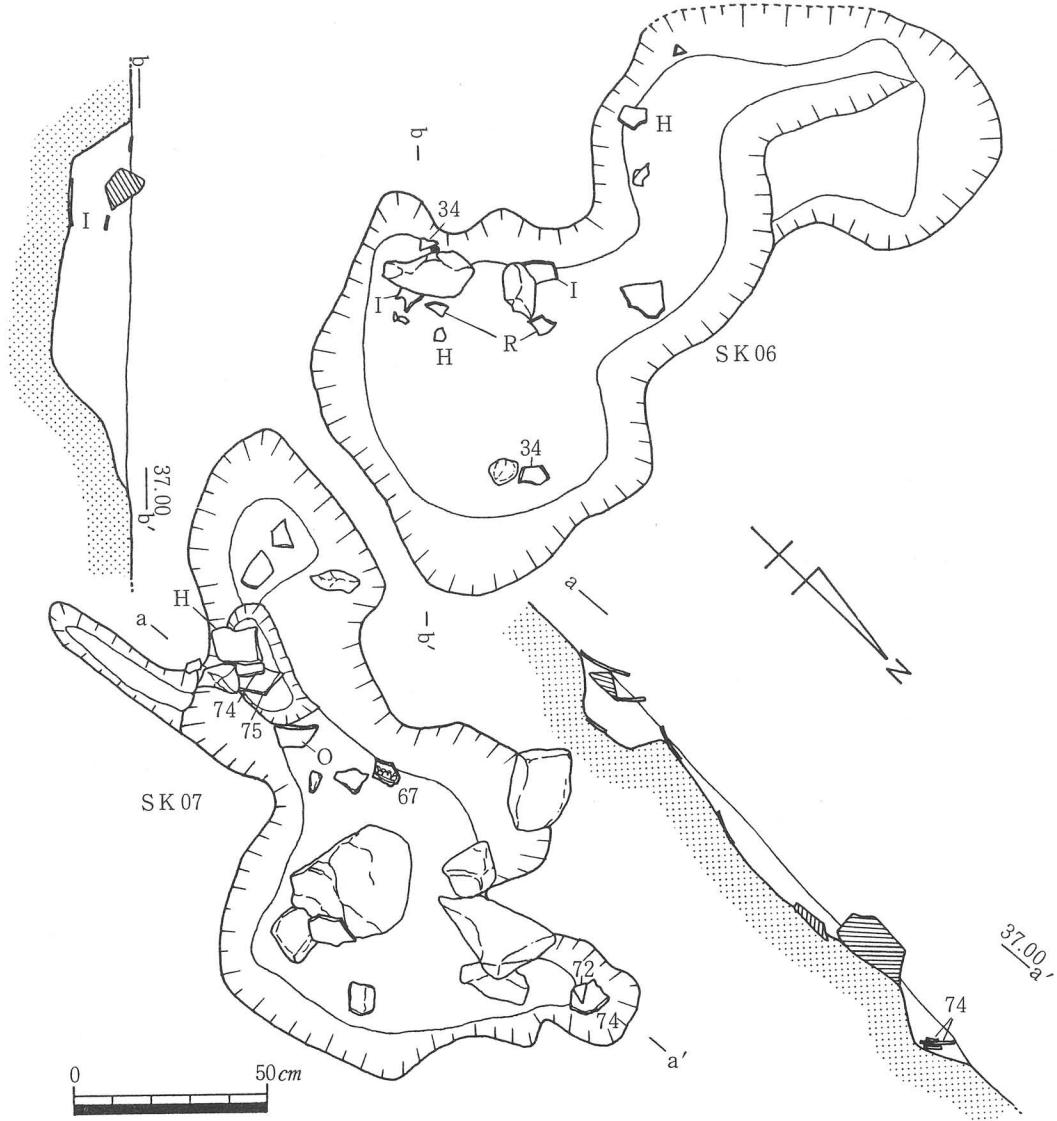
#### 11) SK-07 (第16図)

SK-06の南西に隣接する不整形土壌である。最大長180cm、深さ20cmを測る。

埋土は暗褐色土に大～小礫を含む。

〔出土遺物〕（第10図、第25図）

59は平瓶の天井部と底部である。天井部には円形の粘土板で閉じた痕跡があり、肩



第16図 SK 06, SK 07

部には注口の立ち上がり部分が見える。他に特殊土器片 H・I・K・R類がある。

12) SK-08 (第17図)

H 4区検出。東西65cm, 南北50cmの隅丸方形を呈し, 深さは最深部で30cmを測る。

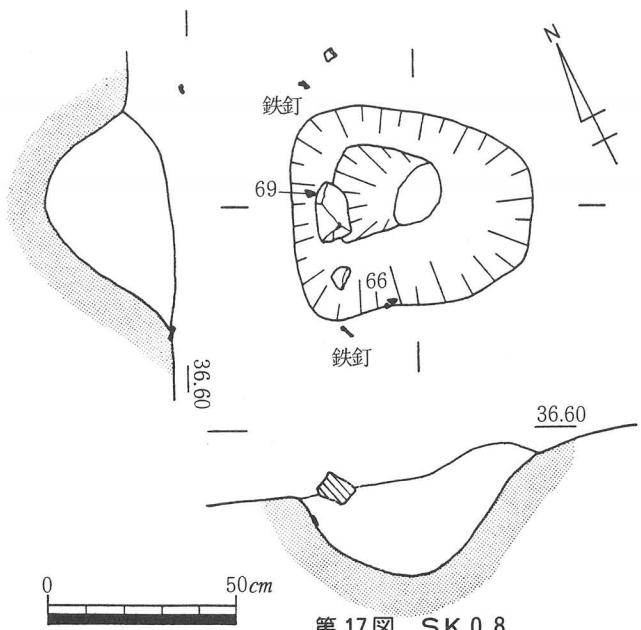
埋土はやや暗い褐色土である。

〔出土遺物〕 (第10図, 第25図)

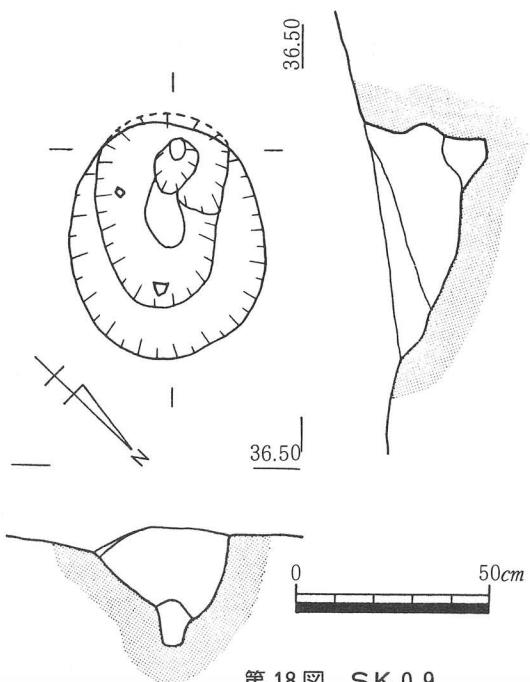
須恵器甕片 (66, 69) と土壙上端及び土壙外から鉄釘 (83, 83) が出土している。

13) SK-09 (第18図)

G 4杭直下で検出。50×65cmの楕円形を呈し, 深さは30cmを測る。埋土は暗褐色土



第17図 SK-08



第18図 SK-09

である。

[出土遺物]

須恵器小片 3

14) SK-10 (第19図)

SK-09の北に隣接する。

不整な方形を呈し、東西長

110×南北110cm、深さ40~

50cmを測る。壙底中央部が窪

み、二段になる。上層には7

~40cm大の石32個が暗褐色土

と共に詰まっており、下層に

は褐色系の土が5層にわたっ

て堆積していた。遺物は上層の石と共に出土している。

[出土遺物] (第10図、第25図)

須恵器甕片 (67, 72, 73, 74), 特殊土器片 C・D・I 類がある。

15) SK-11 (第20図)

G4区検出。SK-10の北に隣接する。やや不整形な方形を呈し、東西長65×南北長70cm、深さ30cmを測る。5~40cm大の石が14個暗褐色土と共に詰まっていた。

[出土遺物]

須恵器甕片 3

16) SK-12 (第21図)

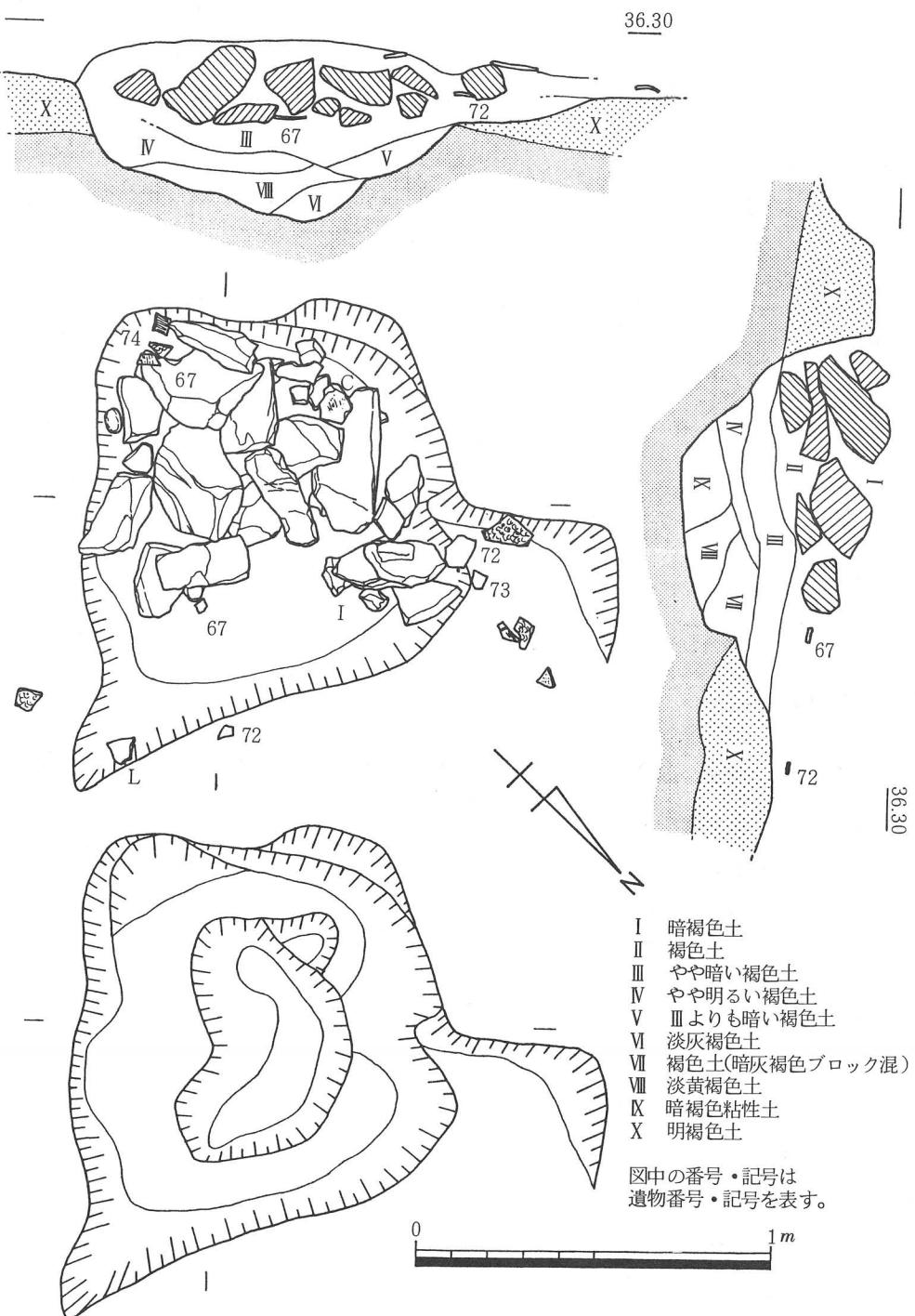
H3杭北3mで検出。直径80~85cmの円

形を呈し、深さは10~15cmを測る。埋土は暗褐色土で、遺物は無かった。

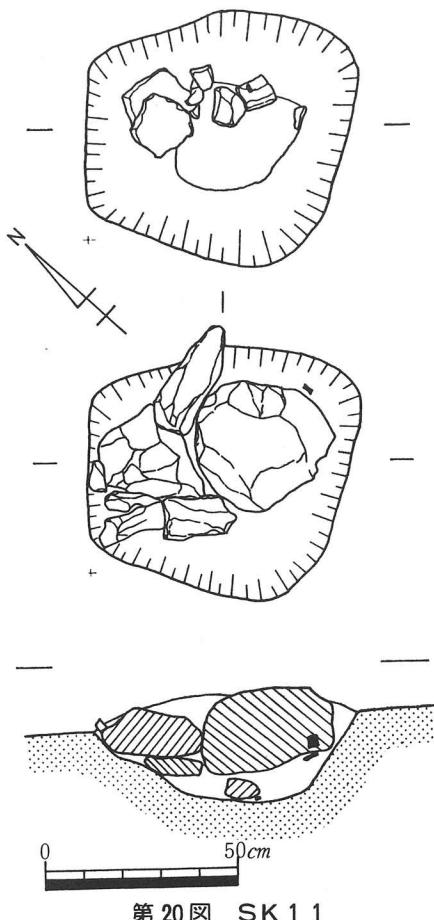
17) SK-13 (第21図)

SK-12の西北に隣接する。直径65~75cmのやや不整形な円形を呈し、深さは70cmを測る。遺物は無かった。

18) SK-14 (第22図)



第19図 SK 10



第20図 SK 11

73, 78), 特殊土器片 A・B・  
E・L・O類がある。

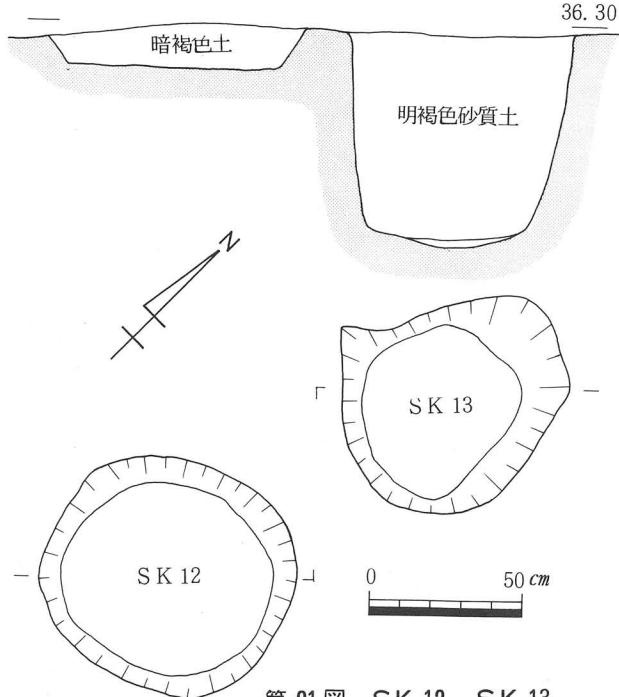
19) SK-15 (第23図)

H 4 杭東南部より検出。SK  
-02の東側に位置する。卵型  
の土壙が2基在り、それらに接  
して大甕の体～底部が残存して  
いた。前記の二つの土壙のうち、  
西側のものは東西80×南北55  
×深さ20cm、北側のものは85×  
115×20cmを測る。埋土はいず  
れもやや暗褐色土～黒褐色土を  
呈し、大甕の口縁～体部片を含む  
多量の須恵器片を出土している。

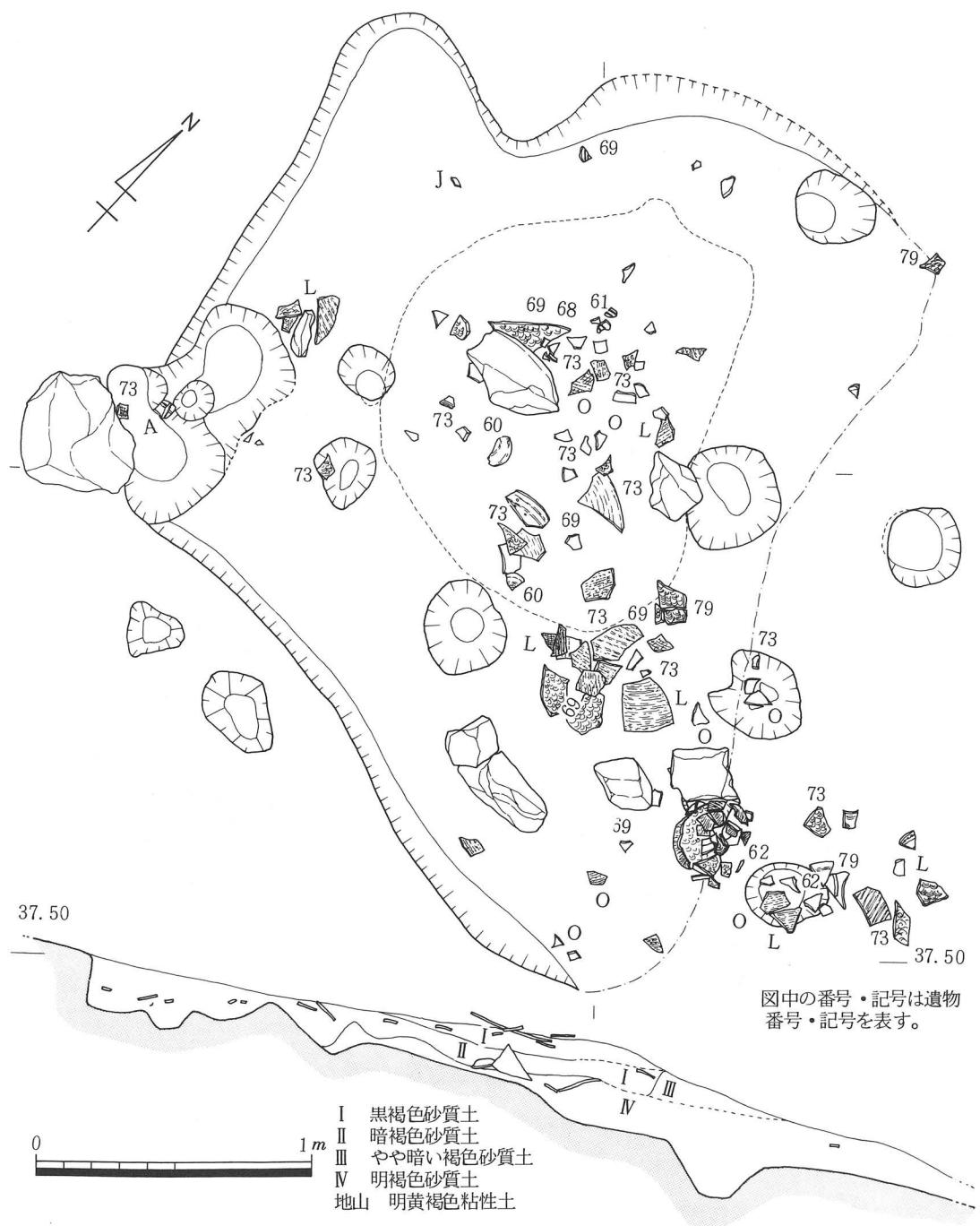
E 3～E 4 検出。2.0×2.6mの不整形な菱形状  
を呈し、深さ20cmを測る。南西隅には落ち込みがあり、  
南側の上端にはピットNo.1, 2が、底面にはピット  
No.3～10が検出された。ピットの法量は、P 1  
(東西23×南北20×深さ8)cm, P 2 (34×23×10)  
cm, P 3 (23×23×11)cm, P 4 (21×18×16)cm,  
P 5 (34×29×28)cm, P 6 (24×23×21)cm, P  
7 (37×30×26)cm, P 8 (37×37×20)cm, P 9  
(29×31×22)cm, P 10 (30×25×36)cmを測る。  
菱形状プランの内部には中心から1.2×1.5mの  
範囲に黒褐色土が堆積し、20～40cm大の石7個と共に  
多量の土器片が見られた。黒褐色土の周囲及び下  
層にはやや暗褐色土～明褐色砂質土が堆積していた。

〔出土遺物〕 (第10図, 第25図)

60は立ち上がりを持つ杯身(山本IV期, 高広IIA  
期), 61は長頸壺の頸部である。62は甕で、その場  
で潰れた状態で出土している。他に須恵器甕片(69,



第21図 SK 12, SK 13

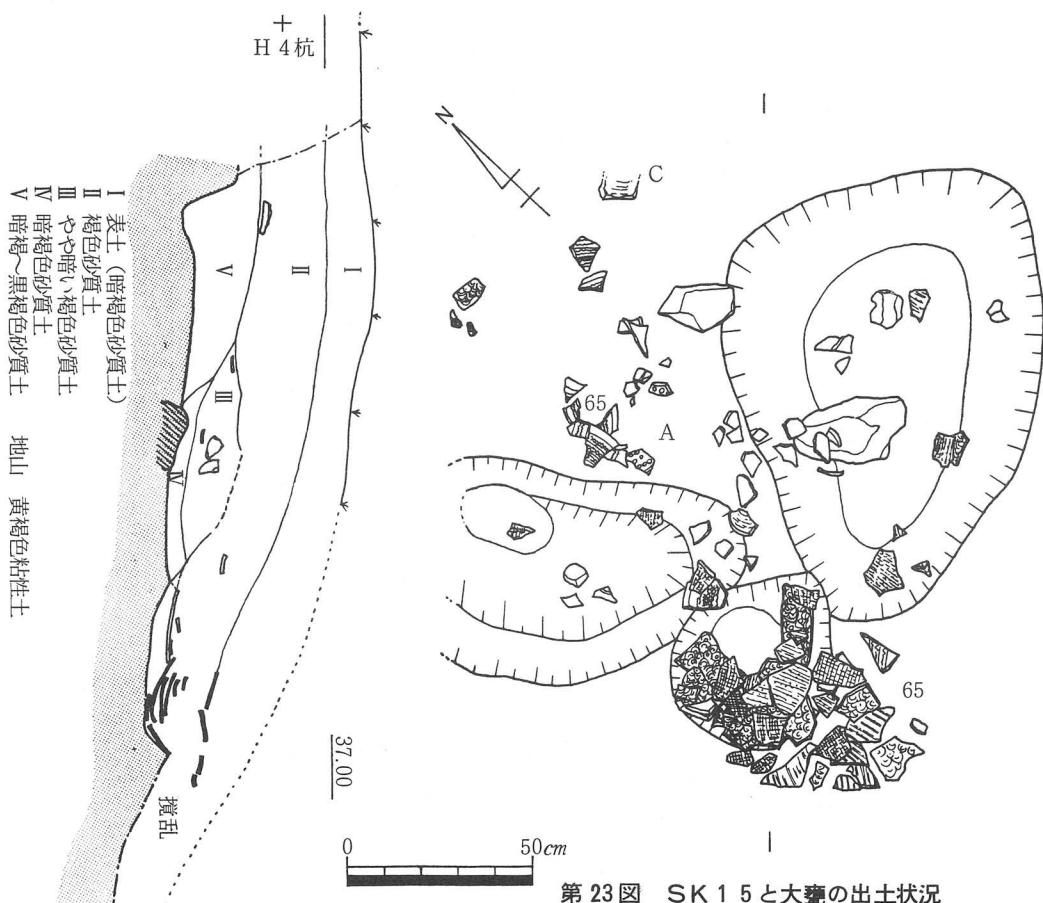


第22図 SK 14

〔出土遺物〕（第10図、第25図）

63は27と同じタイプの杯身である。器肉は厚く蓋受けはつまんで捻り出している。

底部に回転ヘラ切り痕を残し、内外面共回転ナデのみで調整する。64は高台付杯の口



第23図 SK 1 5と大甕の出土状況

縁部であろう。65は口縁部に波状文三段を施す大形の甕である。他に須恵器甕片(70), 鉄釘(82), 特殊土器片A類がある。

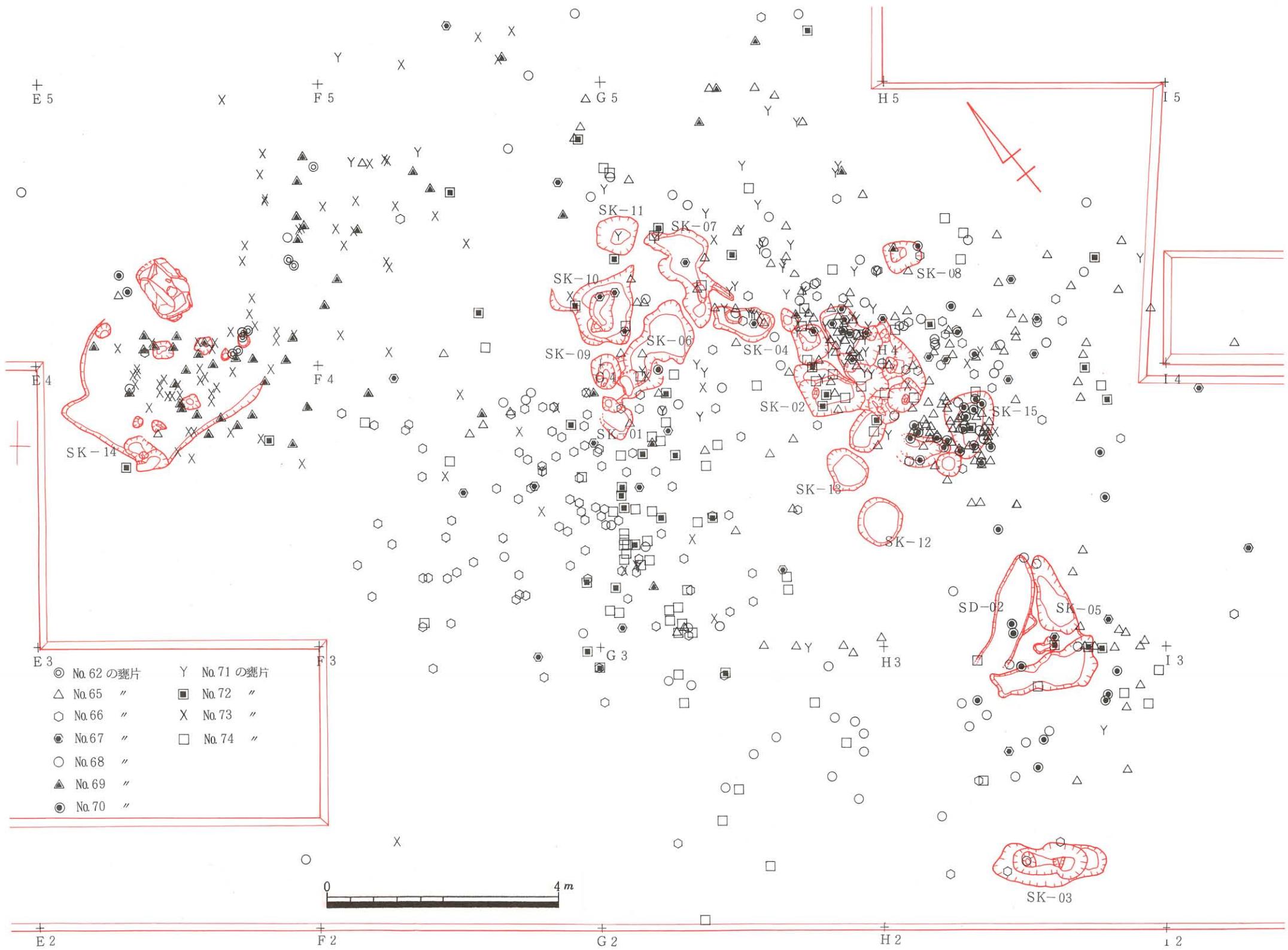
以下1)~19)まで、遺構とその出土遺物について見てきたが、多くの甕や特殊土器類については複数の遺構及び土層にわたって出土していることがわかった。(第24図、第1表)

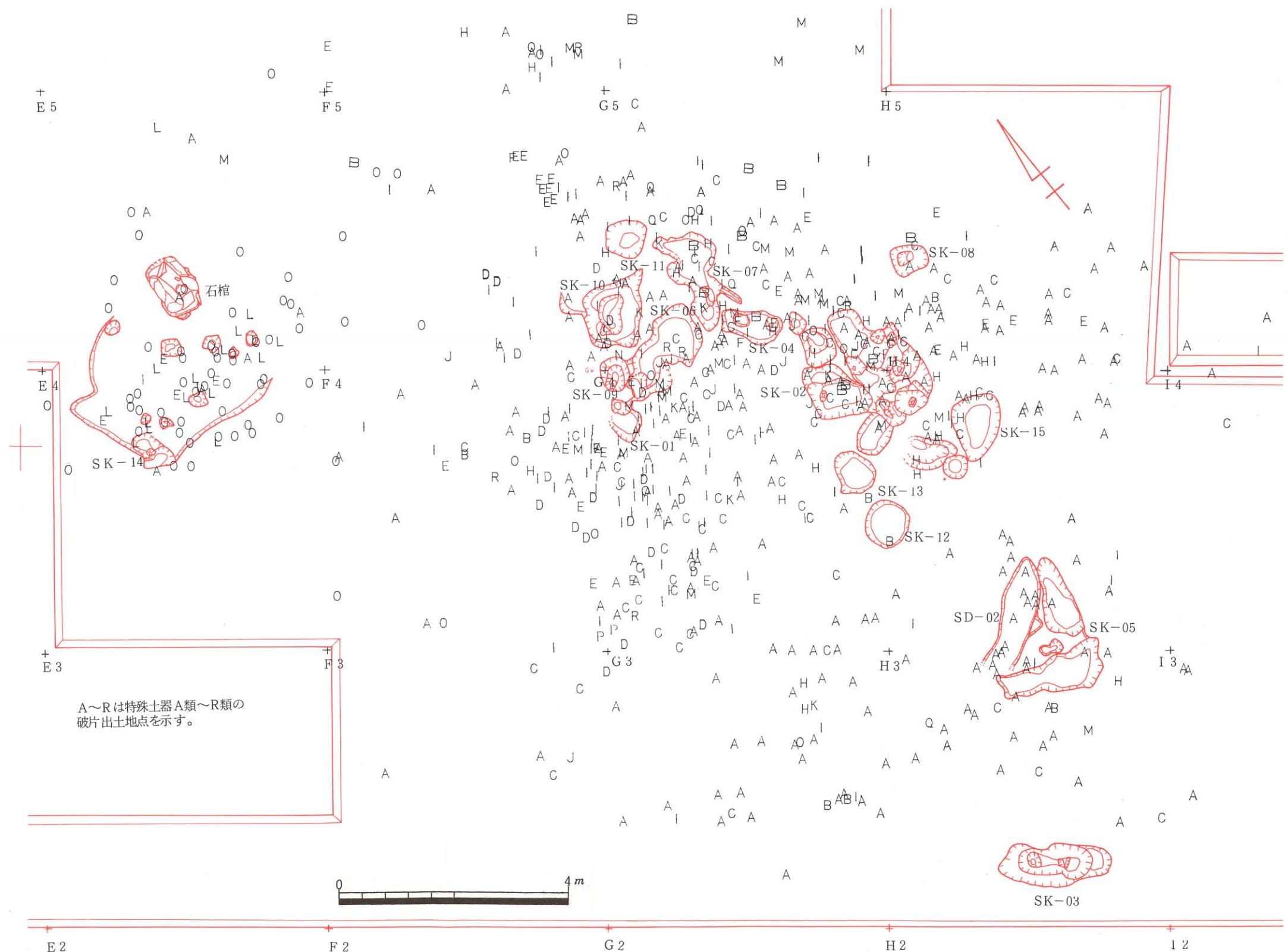
遺構中出土の甕は少なくとも15個体は確認されており、口頸部に波状文や竹管文、円形浮文などを施した大型のもの(65, 67, 68, 69, 73, 74), 口頸部の短い中型のもの(70, 72), SK-1 4出土の62のように小型のものなどがある。各個体の詳細については遺物観察表を後照のこと。特殊土器は18種類22個体以上が確認されている。

註1 柳浦俊一「出雲地方における歴史時代須恵器編年試論」『松江考古第3号』1980年

2 島根県教育委員会「高広遺跡発掘調査報告書」1984年3月

3 山本清「山陰古墳文化の研究」昭和46年7月





第24-2図 池ノ奥C遺跡特殊土器片分布図

第1表 麦及び特殊土器片の出土地一覧表

器種	出土遺構及び遺構以外の出土地
甕 65	SK-02・15
66	SK-08
67	SK-02・04・05・06・10
68	SD-02、SK-02・03・05、F5・G5区第3～4層
69	SK-08・14
70	SD-02、SK-05
71	SK-02・04
72	SK-01・02・05・06・10、F5・G5区第3層
73	SK-04・10・14
74	SK-01・02・05・06・10
75	SD-02、SK-02・15
76	SK-02、G6区第3層
77	SK-05、
78	SK-02、C5・D5区第2～3層
79	SK-14
横瓶 80	SD-02、SK-05
特殊土器	
A類	小形石棺、SD-02、SK-01・02・04・05・15、池ノ奥窯跡A-9区東側第4層、イガラビ遺跡D-2区暗褐色土
B類	SK-02・14
C類	SD-02、SK-02・10
D類	SK-01・02・10
E類	SK-02・14
F類	SK-02・04
G類	表採
H類	SK-01・04・06・07
I類	SK-01・02・04・07
J類	SK-01・02
K類	SK-02・07
L類	SK-14
M類	SK-01・02
N類	G4区表土
O類	SK-14
P類	SK-02
Q類	H2区第2層上面、G4区表土及び第2層
R類	SK-02・07

### (3) 特殊土器（A類～R類）について

#### A - 1類（第25-1図）

円筒棺の蓋である。中心部から端部に向けて放射状に8本の突帯がのびる。これらの突帯で区画された内側に、直径1cmの円文を竹管状の工具でこれまた放射状に一直線に押印する。さらに区画内の余白部分についてもやや不規則に円文を付けて飾っている。これら縦方向の突帯は、中心部から18～21cm伸びた地点で横方向の突帯を付け、両隣の縦突帯と結んでいる。しかもこの横突帯は横に一直線ではなく、端部から見ると縦突帯と接する部分で右手の横突帯が左手の横突帯より約2cm高い、つまり常に中心部に寄っていると言う規則性が指摘できる。これは装飾的な意味あいが強いものといえる。

一つ注意されるのは、縦突帯で区画した中に2区画、間隔の広い区画があり他の区画に比べ非対称となっている事である。これは縦突帯の粘土紐を張り付けるときに角度を均等に配分しなかったからであるが、時間的余裕がなかったのであろうか。この広い区画に横突帯を当てはめると中央右手に剥離痕が認められ、中央部でどうしても段差を設けなければならない。恐らくそこから新たに9本目と10本目の縦突帯が始まるものと思われる。

中心部から横突帯の手前までは回転カキ目調整を施し、横突帯付近から外方に向かっては成形時の格子叩きを残す。内面は総じて円弧叩きである。中心部は非常に硬質な焼成となっている。

中心部での厚みは2.1cm、端部近くで1.45cmと徐々に薄くなっていく。端部は欠失しているが、傾斜しながら下がるものと仮定すれば、直径52cm以上、器高17cm以上となる。

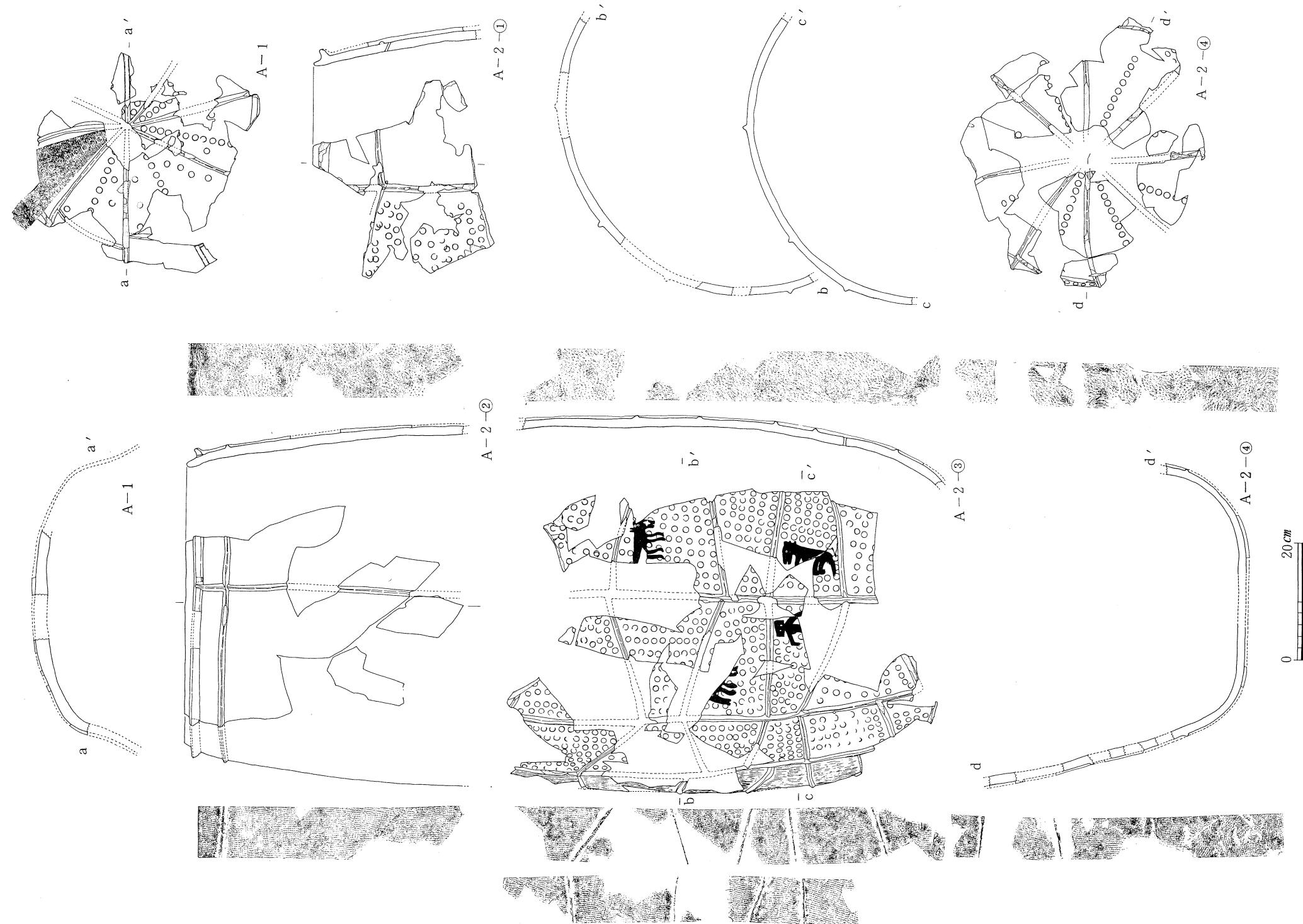
#### A - 2類-①（第25-1図）

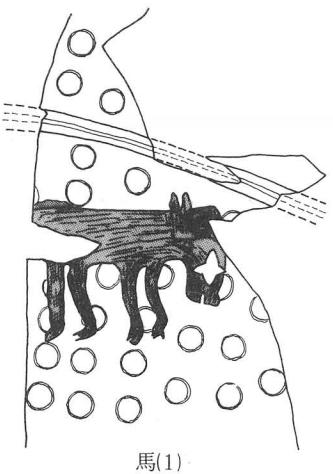
円筒棺の身の口縁部付近である。口径は不明である。口縁端部は丸く仕上げ、外面直下に長さ1.6cmの上向きの突帯（蓋受部）を横方向に付ける。この横方向の突帯から下方へ低い縦方向の突帯が付けられ、さらに上の横突帯から9cm下方で左右にやや角度をもたせて横方向の突帯をつけている。これらの突帯は断面三角状で、幅1.2cm、高さ8mmを計る。

そしてこの破片では、縦突帯に区分された右側は縦方向の平行叩きをするのみで無文であるが、左側の上から2区画目には縦方向の平行叩きの後、直径1cmの円文をまんべんなく押印している。

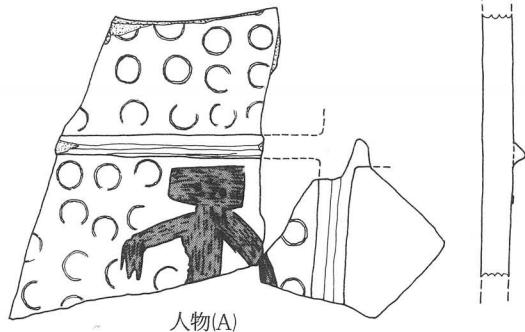
横突帯と縦突帯の交差点の一角には直径3mmの小円孔が内面へ向けて上向きに焼成前穿孔されている。

第25-1図 特殊土器A類実測図

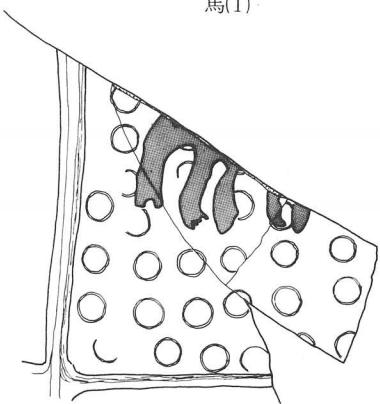




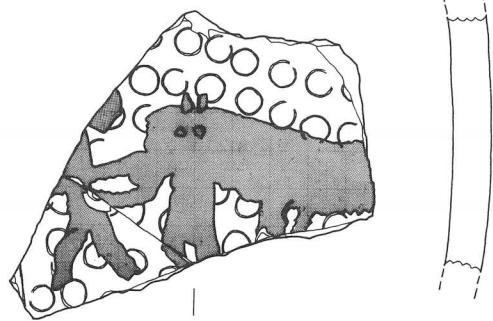
馬(1)



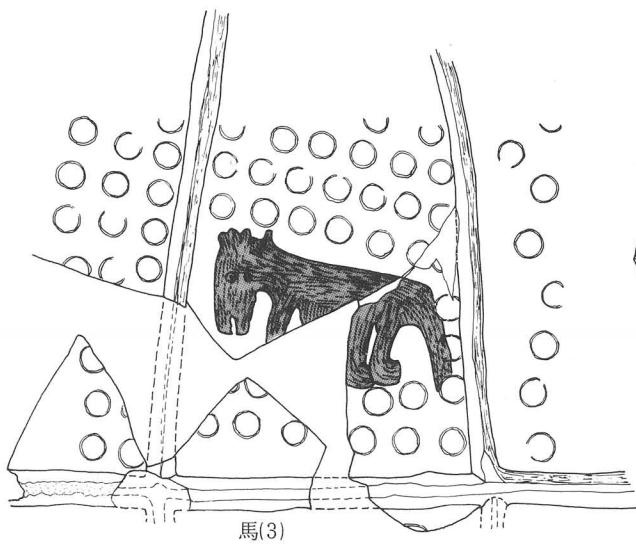
人物(A)



馬(2)

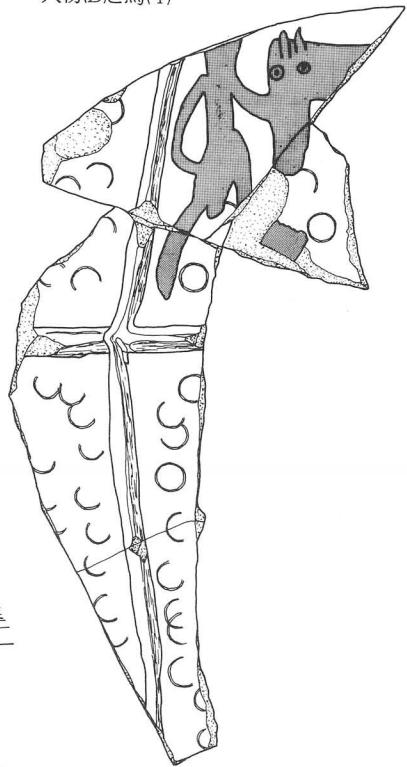


人物(B)と馬(4)



0 10 cm

第 25-2 図 特殊土器 A類実測図(2)



人物(C)と馬(5)

#### A - 2 類 -② (第25- 1図)

円筒棺の身の口縁部から体部上半部にかけての破片である。①と同様に口縁部直下には横突帯がまわるが、縦突帯との交差点横には縦方向にこの横突帯（蓋受け部）に円孔があけられている。 $2 \times 7$  mmの楕円形で焼成前の穿孔である。

この蓋受け部の下方には、3 cm余り隔てて横突帯が平行に付けられている。この破片では突帯によって区画された内側は無文様である。

口径は 46.6 cm、蓋受け部の径は49cm前後となる。

#### A - 2 類 -③ (第25- 1, 2図)

体部最大径64cmを計る。接合できた破片の内、縦突帯3区画分の斜め又は横方向の突帯で区画された内区は、全て直径1cmの円文で飾る。左側の内区は無文である。

円文で飾られた内区の内、4箇所には絵画が表現されている。即ち、右上の区画には右向きの馬が一頭描かれている。（馬1）顔は口の先まで3.6 cm、幅1.6 cm、胴体の長さは推定6.5 cm、幅1.2 cm、脚の長さ約3 cm、総高5 cm余りを計る。口は真横から見た形であるが、両目は垂直に付けられ右前方を向いている。目は直径4 mmの円形浮文で中央部に穴を穿つ。耳は長さ1 cm、幅は基部で3~4 mm、前脚・後脚ともに「く」の字形に折れた先端を逆「く」の字に再び折り曲げており不自然な形状であるが、全体としては右方へ駆けていく姿を表わそうとしたものと考えられる。口の上には辻金具とおもわれる馬具を別の粘土を貼り付けて表現している。

次に、斜め下の区画には左向きの馬が一頭描かれている。（馬2）口は真横から見た形であるが形は四角であるで象の鼻のようである。脚先は後方へカーブしており、やはり走る姿を想起させる。次に、真下の区画には右よりに人物が一人描かれている。（人物A）奇妙なことに顔は横長の四角形を呈し、 $2.6 \times 1.6$  cmを計る。上辺がやや右側に上がり中央部に直径2 mmの円形浮文を2個付けて両目を表す。肩から腕にかけては左右共に下がり、右腕は肘から下が真下に折れ、その先は自然に消失し、手は明確には表現されていない。左腕は右腕に比べて太く表現され長いようである。服装については表現されていない。

次に、「人物A」の区画の右隣の区画に馬が一頭描かれている。（馬3）この馬だけは縦方向に描かれており、頭を上方に向ける。頭から尻尾までの長さ9.4 cm、高さ5.6 cmを計る。口、目、耳、脚の形状は馬(1)とほぼ同じであり、この馬も駆けている状態を表したものであろう。

その他、接合しない破片の中に人が馬の手を差し延べている図柄を描いたものが2片

あり、これら4つの絵画の右側または反対側に位置するものと思われる。

#### 人物（B）と馬（4）

右側に馬、左側に人物を配する。人物は顔の大半を欠き表情を窺うことが出来ないが、遺存部分が胴部の中心からずれているので馬の方へ顔を向けていたのではないかと思われる。両手は共に馬の目の下の方へ差しのべられているが手先きの付近ははっきりしない。

両足はハの字を開き、とりわけ右足はくの字に曲がっているから力強くふんばった状態を表わしている。全体としては馬を前方へひいている状態であろう。

馬は顔を垂直方向に描き上部に長さ9mm、幅5mm、厚み0.2～0.3mmの耳と、その下方にさしわたし4～5mm、厚み約1mmの目を表わし、最下端には角ばった口を表現している。この破片の厚みは1.4～1.5mmを計る。

#### 人物（C）と馬（5）

向かって右側に馬、左側に人物を配する。人物は遺存高10cm、足の長さ5cmを計る。

顔は大半を欠失し、表情は不明である。首と顔の区別も明瞭ではない。右手は腰に当たがい、左手はやや下げる馬の顔につけている。右足は先端を尖らせ、つま先を表わし、左足の上部はほぼ垂直だが、下半部は急に外方へ折れ曲っており極めて不自然である。

馬の方は、顔を正面に向け長さ1cm、幅4mm、厚み1mmの耳を付け、その下に、高さ1mm、直径4.5～5mmの円文を付けて内側に橢円形の凹み穴をあけて目を表現している。このような絵画構成は、福島県・清戸迫横穴の壁画に酷似する部分がある。

#### A-2類-④（第25-1図）

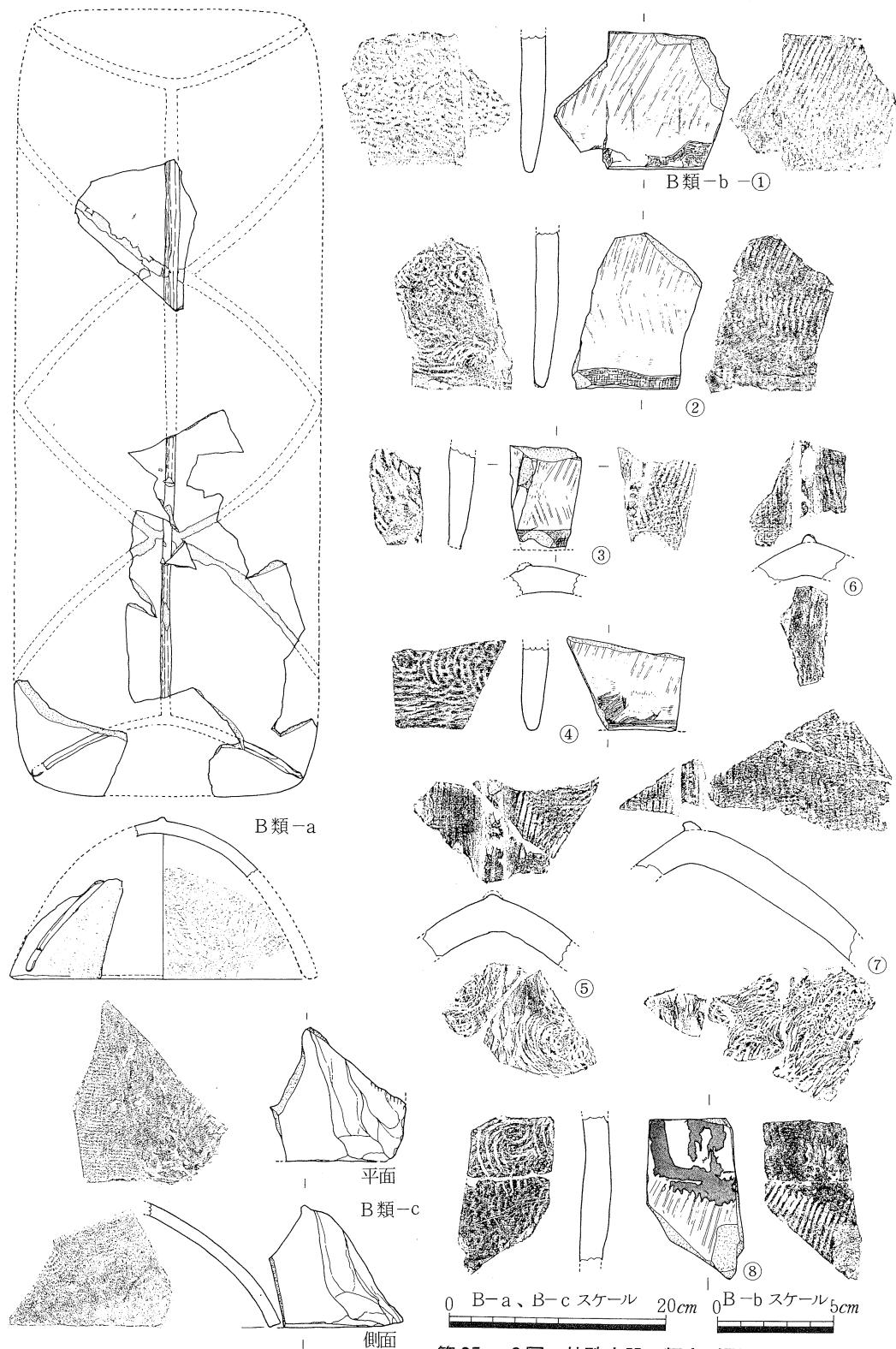
円筒棺の身の底部である。蓋と同様中心部から突帯が放射状に8本のびる。一部中心から20cm近く離れて9本目の縦突帯が始まる。そして突帯で囲まれた区画内の中心部に直径1cmの円文を放射状に一直線に施している。この縦突帯は中心部から20～24cmの所で横突帯と接続し、以下胴部に續いて次の区画では、円文をくまなく配する部分と全く無文の区画に分かれている。

この横突帯は、縦突帯と直線的に交叉している箇所もあるが、明らかに段差を設けている箇所もあり、基本的には蓋と同様段差のある装飾的要素が強いものと言えよう。

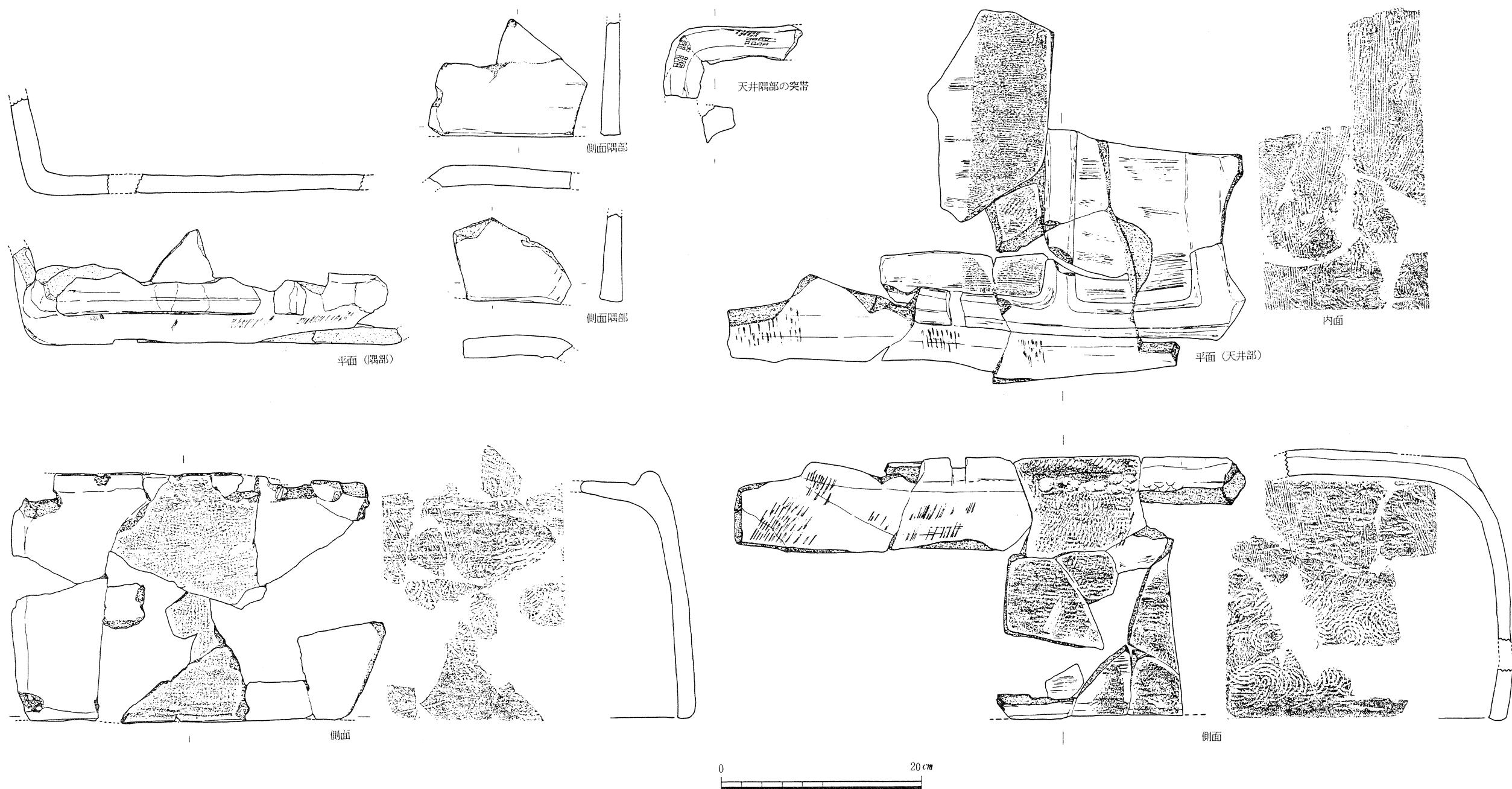
底部は直径20cmの範囲が平坦である。

#### B類-a（第25-3図）

四注式の小型陶棺の蓋である。大棟の突帯は基底幅8mm、高さ5mmの丸みを帯びた台形を呈する。降り棟も同様の形状である。大棟の端部から17cm内側の大棟からこの陶棺の胎土とは違う別の粘土で文様帯を付けている。即ち、幅1cmの帯を大棟の部分で交叉



第25-3図 特殊土器B類実測図



第 25-4 図 特殊土器 C類実測図

させ、これを端部で合わせ、交叉文を2回繰り返すものである。この文様の対称性から推定すると、長さ72cm、横幅28cm、高さ29cmとなる。

外面は平行叩きの後、長辺と平行のカキ目調整を施し、内面は円弧叩き、端部近くは横方向のヘラ削り調整、端部は布ナデ仕上げを行う。厚みは1.3cmを計る。

#### B類－b（第25－3図）

1～4は陶棺の蓋又は身の口縁部である。口縁部は徐々に幅を狭くし、端部は平坦である。端部付近は内外面共に幅1.2～1.4cmにかたり布目痕を残す。端部はナデて消している。3は妻部と平部の境目の降り棟の突帯が付けられている。突帯は幅1cm、高さ3mmである。5～7は大棟の突帯の部分である。突帯の幅は約1cm、高さ5mmを測る。外面は突帯の周囲をナデ、その他は平行叩き、内面は円弧叩きで棟の直下をナデている。8は同一個体の破片だが、別種の粘土と木炭を混合したものを器表面に塗り付けている。暗灰色を呈し、素地の色（淡灰色）とはっきり区別出来る。素地が生乾きになってから塗った為、収縮率の違いから一部剥離している。どういう文様なのか不明である。

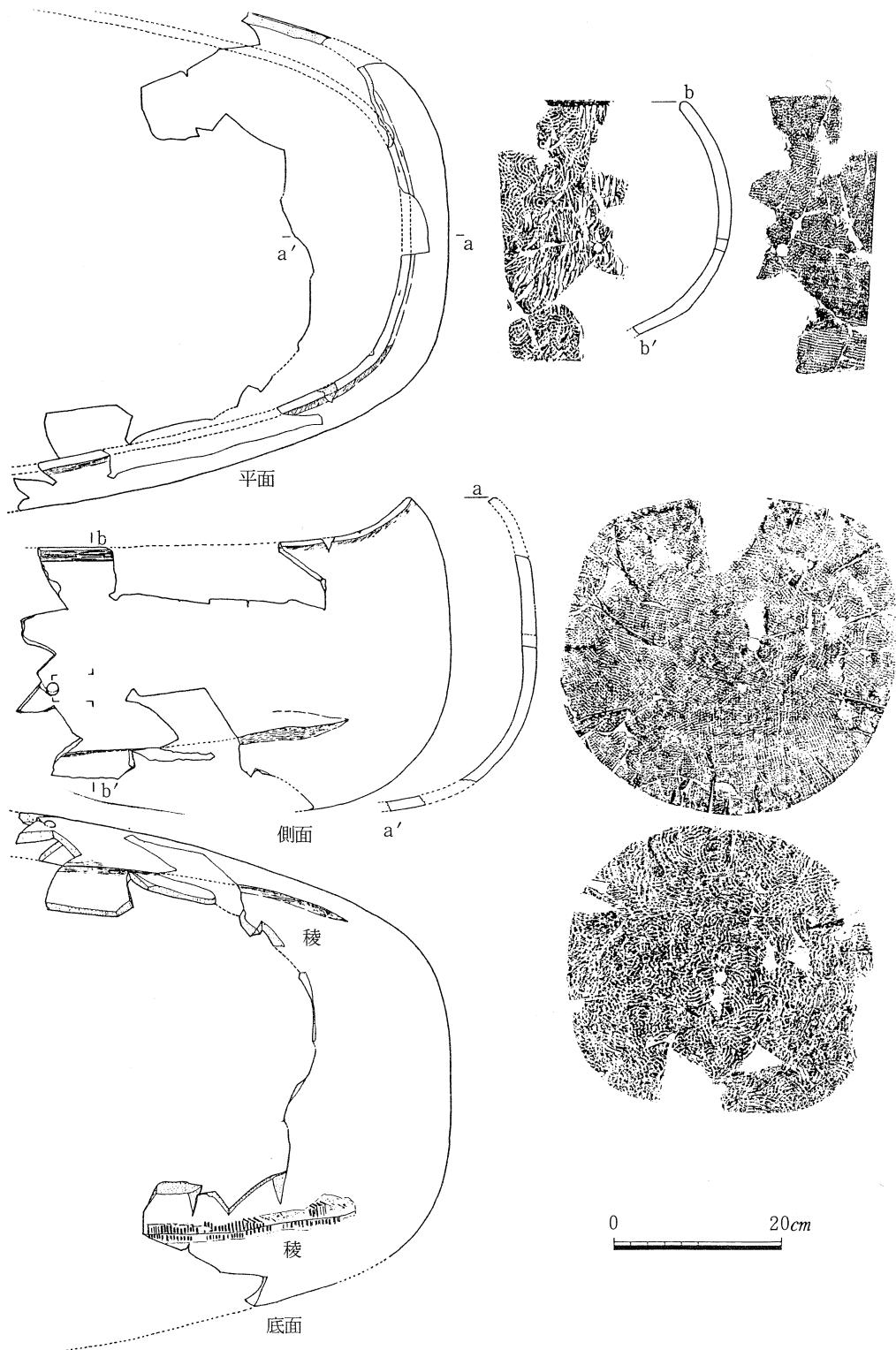
#### B類－c（第25－3図）

四注式の小型陶棺の蓋の角部の破片である。外面は横方向の平行叩き、内面は円弧叩きを施し、身との合わせ目はヘラで平坦に切る。降り棟の部分は粘土を幅広に低く張り付けてナデている。内面にも粘土を補強し、ヘラ状の工具で横にナデた後、一部を板目状工具で縦方向にナデている。

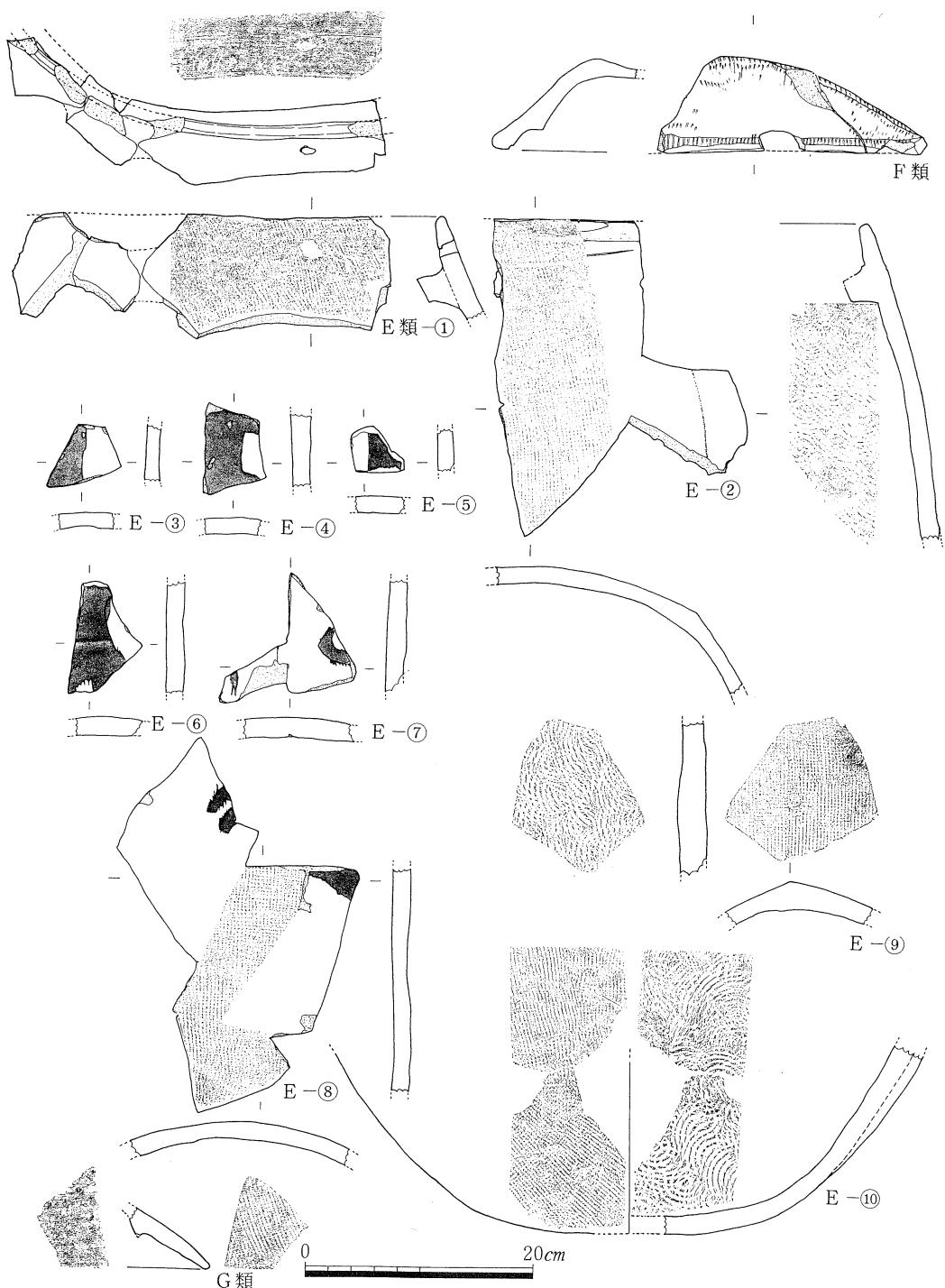
#### C類（第25－4図）

蓋になるか身になるか判然としないが、ここでは一応蓋として説明する。

側部は、高さ26cm、厚み1.5cmを測る。端部はヘラ削りによってていねいに調整され、やや丸みをもった断面となっている。外面は横方向の平行叩きで成形した後、ナデしている。内面は円弧たたきで成形している。側部と天井部の変換点には厚み3.2cm、幅3cmの突帯を付け、間隔は不明だが数箇所にヘラで横幅1.6cm、深さ1.2cmの切れ込みを入れている。縄掛けに用いたのだろう。この突帯の接合部は指で貼付した指押し痕が多数残っている。天井部は、厚み1.7cmで、外面は2～3mm間隔の荒いカキ目調整を施し、さらに前述の周縁の突帯から直角方向に、幅3cm、厚み0.6～1.5cmの突帯が数本付けられている。残存する突帯の間隔は15cmを測るが必ずしも等間隔ではないだろう。側部の断面はやや外傾気味に立ち上がり、天井部は中央部に向けて隆起している。又、端部の平面形を見ても平部がほぼ直線であるのに比べて、小口部はやや外方へ開いていることが注意される。



第 25-5 図 特殊土器D類実測図



第 25-6 図 特殊土器 E・F・G 類実測図

C類の特徴は天井部の突帯である。これは、C類のモデルとなった原体が恐らく柳行李のような竹で編んだ箱物であったのだろう。柳行李の主骨や補強材となる部分が、突帯として表現されているものと思われる。

#### D類（第25-5図）

須恵器の大甕をつくる要領で底部から胴部をつくり、口縁部はつくらず蓋をしてしまう。その上で胴部の横腹を抉り、取り口をあけている。この口を上部に向けた場合、口縁部は長辺部で高さ33cm、短辺部では5.5cm高くなり38.5cmとなる。胴部本体の長さは、胴部中央部に穿孔された円孔（直径1.45cm×1.4cm）を中心とみなせば95cmとなる。

胴部は口縁部から外方へ張り出し、短辺の中央部付近にも円孔（直径1.5cm）がカキ目の中心とずれる位置に穿たれている。

又、長辺部の底部近い位置には長辺と平行に稜線が付く。この稜線はほぼ左右対称にあり、底部がゆるやかな丸底を成すものであることから推定すれば、側部短辺の幅は64～70cm、口縁部幅52cmとなろう。

これに伴う蓋は未確認である。

#### E類（第25-6図）

口縁端部は丸みを帯びる。端部から3.5cm下方の内面に長さ2.2cm、厚みは基部で3.4cmのしっかりした突帯を設ける。段と口縁端部の間には直径1cmの円孔を焼成前に穿つ。以下胴部に向かって広がり、厚み約1.6cmを計る。口縁は正円ではなく隅丸方形となるもので、破片が少ないので正確とは言いがたいが、円孔を各辺の中央部に想定すれば一辺38cmという数字が得られる。さらに、角部には上下方向に稜線が認められ底部近くまで続く。その一部には黒色の顔料が帶状に塗彩されている。底部はやや平坦な丸底を呈す。又、胴部の稜線以外の器面にも、やはり木灰に粘土を混ぜたものを塗り付けて黒く発色させ、何らかの文様もしくは具象絵画を描いている。

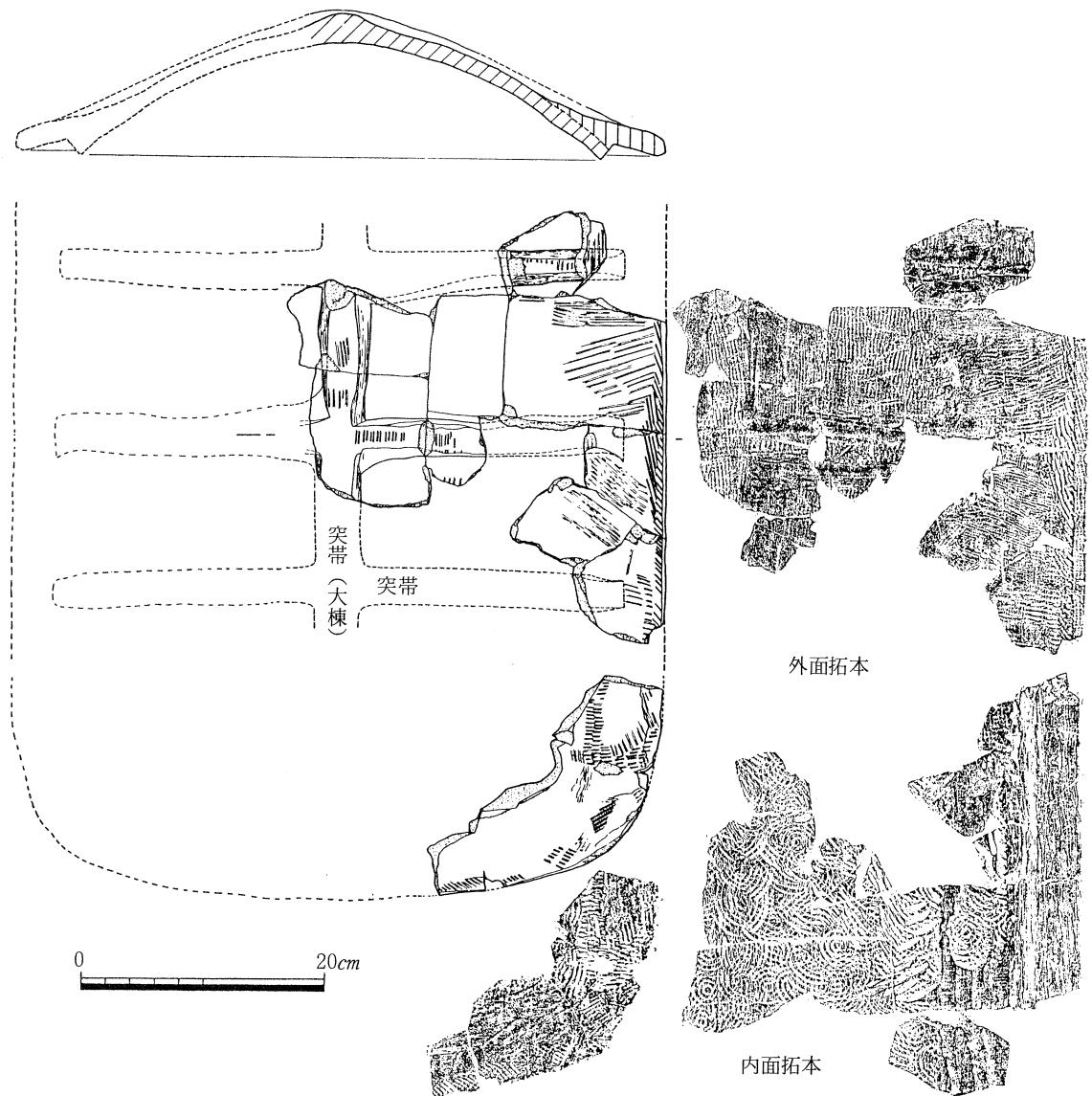
#### F類（第25-6図）

小形陶棺の蓋の角部である。妻部と平部は降り棟の稜線によって区切られているが稜線は突帯ではない。外面は平行叩きの後、横ナデ調整を施している。

内面は端部内部に幅1.3cmの段をつくり、身の受け部としている。段の上部は乱ナデで少し抉るような感じで調整され、さらにその上部は円弧叩きのままである。

#### G類（第25-6図）

蓋の口縁部であるが小片であり、全形は不明である。外面は平行叩きで成形し、内面は横ナデで調整している。端部は丸みを帯び、その端部から6.3cm内面に身の受け部に



第25-7図 特殊土器H類実測図

なると思われる突帯が付けられているが全形は不明である。突帯付近で厚み1.4cmを測る。全体として中央部に山形に上がっていくが正確な角度は不明である。胎土は精選され、焼成は硬い。

#### H類（第25-7図）

四注式の陶棺の蓋である。四隅は丸い。天井部には幅約3.5cm、厚み1.4cmの大棟が取り付く。この大棟から身の接合部の手前にかけて大棟と直角方向に幅3cm、厚み6mmの突帯が付く。この縦突帯は11cm間隔に5本以上ある。

身との合わせ部は高さ 1.4 cm, 長さ 3.8 cm の受け部を形成している。これは本体に粘土を継ぎ足し平行叩きを施して作っている。蓋の横幅は 53.4 cm, 身の横幅は 45 cm 前後となろう。推定復元長 1 m 以上。

#### I 類 (第25-8, 9図)

1, 2 は円筒棺の口縁部である。口径 40 cm ~ 44 cm を測る。外面平行叩き、内面円弧叩きで円筒を作り、その端部の外側に粘土を継ぎ足し、内側に段を作つて口縁部とする。口縁端部外面は丸みを帯び、一部ヘラ削りが施されている。端部内面には 2 cm ほどほぼ垂直に下がった所で幅 8 mm の斜め方向の段を成す。この段の直下で最も厚くなり 2 cm を測る。端部からこの段の下方まではヘラ削りを施す。口縁外面直下から 1.2 ~ 2.2 cm の青黒く発色する色の帯が筆様の道具で塗り付けられている。口縁部の破片は他に 2 片あるがそれらには色帯がない。また外面の一部には円弧叩きが施されており、文様を意識していると思われる。

3 ~ 12 までは胴部の破片である。

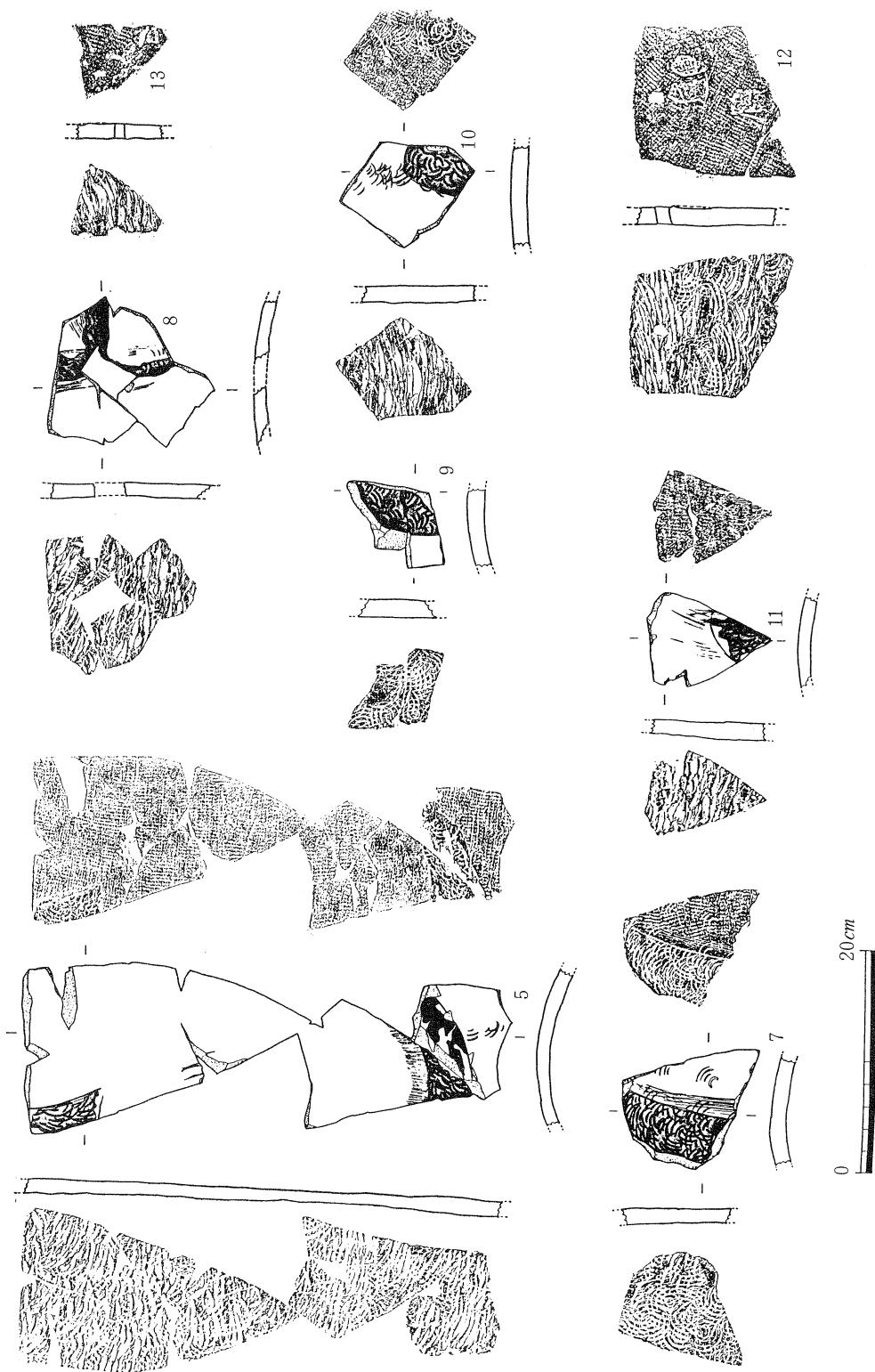
3 は胴まわり推定 150 cm 前後、最大径 50 cm 程の断面橢円形に接合した破片である。棺の長軸と平行に色帯を 2 本付ける。色帯の幅は 2.4 ~ 3.0 cm, 色帯と色帯の間隔は 51.8 cm を測る。色帯間の距離から判断すれば、色帯は 3 本走っていると考えられるが、3 本目は未確認である。色帯を付けた後、さらに松灰と粘土を混ぜた特殊粘土を塗り付けて円弧叩きを施し、文様を表現したものが 4 か所ある。文様①は色帯と交差する帯状の文様で最大幅 4 cm, 厚み 1 mm 弱を測る。色帯の中心から右方へ 8 cm で幅が狭まり、文様はそこで終わっている。文様②は色帯の左手に色帯と平行に円弧帯を表現するもので、大きさは文様①と同一と思われる。文様①と②は繋がるのかどうか不明である。文様③は色帯の右方に付けられた円文であり、推定直径 8.75 cm を測る。表面には円弧叩きが非常に密に施されている。文様④は③のさらに右方に付けられた右上がりの 2 本の帯状の文様である。上部の帯は幅 2.4 ~ 4.0 cm を測り、斜め下方にカーブして幅広くなる。下部の帯はヘラの区画線の幅は 2.2 cm、実際に付けられた粘土の幅は 1.6 cm と細くなる。両者は斜め下方で接する可能性が高い。その場合は上段の粘土帯が主帶で、下段のものが支帶となろう。

4 は破片の左側に棺の長軸方向と平行に幅 2.8 ~ 3.0 cm の色帯を付ける。その色帯から約 6.2 cm 離れて文様帯が認められる。円弧叩きや板カキ目は破片の下方にまで及んでいるが粘土帯は途中で終わっている。帯の幅は 1.75 cm 前後と細く、この破片で見る限り同一の幅で上方へ続くようである。一方中央の色帯から 21.2 cm 離れて直径 8.7 ~ 8.9

第25-8図 特殊土器 I類実測図(1)



第25—9図 特殊土器 I類実測図2



cmの円文を施す。その表面には円弧を集中的に叩き付けている。

5は棺の長軸方向に平行した細長い破片である。上方に弧帶が付くが円弧帶にはならず、端部の角が鋭角となっており、幅が狭まらないで端部が斜め方向に切れるものと推定される。下方の帶は右側で狭まっており、他の円弧帶と同形のものである。

6は左右の円弧帶が両端で合わさり、それによって形成された内側の杏仁形の空白部に斜格子文を施すものと推定される。左右の円弧帶は端部に近づくにつれてその幅を狭め、端部で一方の弧帶が重なるのか、連続しているのかは不明である。内側空白部の斜め格子文はヘラでは弧帶が交差するように付けられているが、粘土は必ずしもそうではなく、はみでた部分や不足の部分もある。しかし、本来的には幅約1cmの斜め格子文を付けよう意識していたものと考えられる。円弧帶は器表面から1mm前後盛り上がっており、周囲はヘラで削り取られている。厚みは1.7～1.8cmを測る。

7は破片の中で文様帶の幅が最も広いもので破断面まで4.5cmある。区画線の外方は板状工具で余分な粘土を削り取る。円弧叩きは文様帶に集中しているが、外側にも施文の前段階で若干付ける。厚みは約1.4cmを測る。

8は直線状の文様帶が三叉になる部分である。上方と右方に伸びる帶が下方に伸びる帶より太く、本体を成す帶と思われ、幅は2.8cmを測る。下方の帶は幅1.0cmを測り細い。これらの帶はそれぞれがほぼ直角に折れ曲がっている。厚みは約1.3cmを測る。

9は右側に文様を施すが、これが弧帶になるか、略楕円形になるかは不明である。文様の幅は破断面まで3.6cm、厚みは約1.5cmを測る。

10は上部にヘラで略楕円形状に区画した内側に特殊粘土を塗り付け円弧叩きで調整したものである。この円弧叩きは文様の外下方にも直線状にのびて付けられている。厚みは1.4cmを測る。

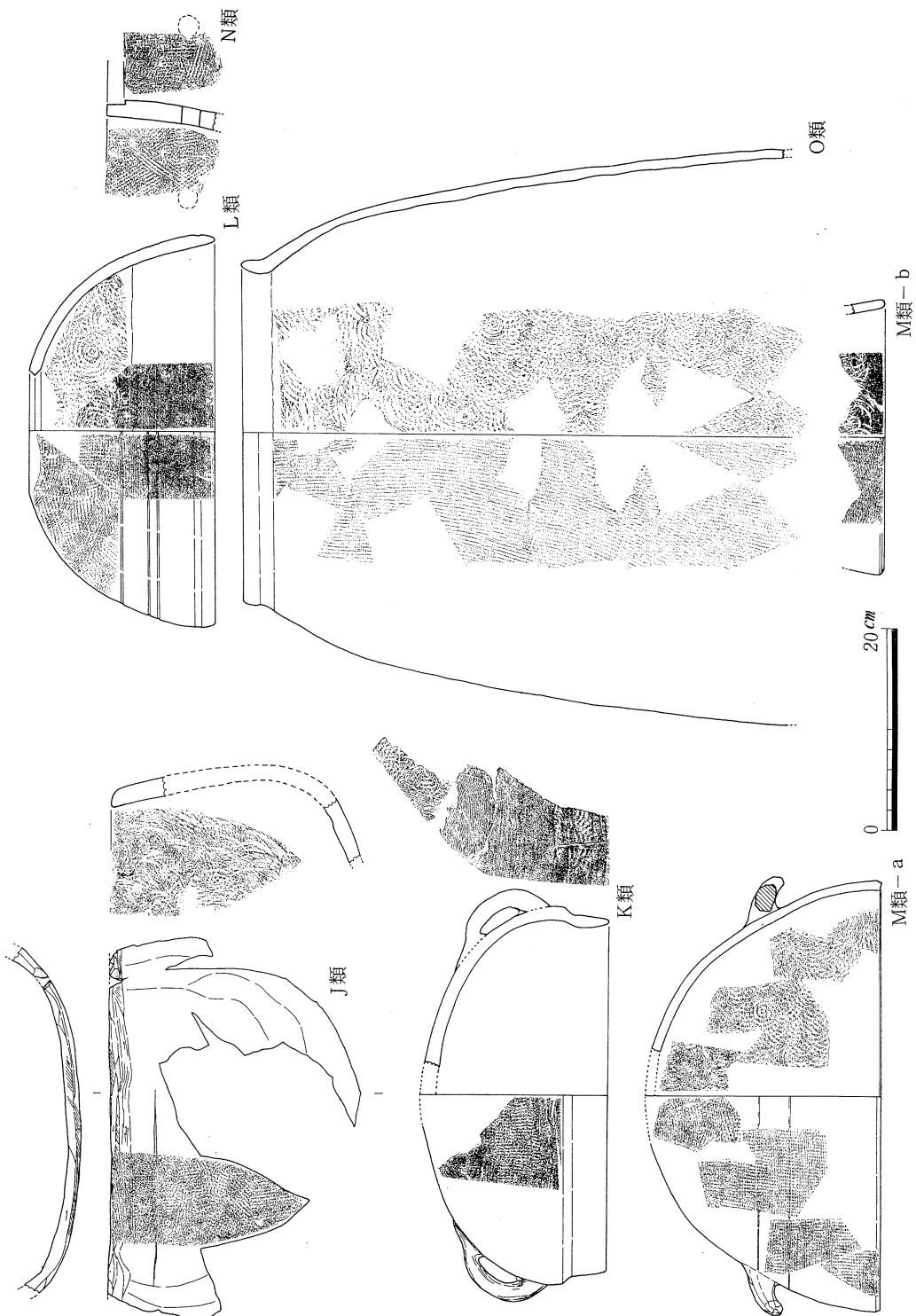
11は破片の下部にヘラで略楕円形状に区画した内側に特殊粘土を塗り付け、円弧叩きで調整した文様を施す。さらに一部を板ナデした後、区画線の外側を板状工具でカキ目調整している。厚みは約1.2cmを測る。

12、13も胴部の破片だが直径0.9～1.2cmの円孔が焼成前に穿たれている。厚みは1.3～1.5cmを測る。

#### J類（第25-10図）

隅丸方形又は隅丸長方形の身である。推定器高27cm、一辺の推定差し渡し40～41cm。胴部断面を見ると下半部から口縁部に向けて内傾し、口縁部は外面をヘラで2～3段にわたって削り取る。底部は曲線を描きながら丸みを帯びた平底を呈する。全体として外

第 25-10 図 特殊土器 J～O類実測図



面は垂直から斜め方向の平行叩き、内面は同心円叩きで成形している。

#### K類（第25-10図）

円筒棺の蓋である。底部はゆるやかな丸底でカーブしながら立ち上がり口縁直下ではほぼ垂直となる。胴部には輪状の把手が1対つく。把手の上できつい段を設け、口縁部は内側に引き込んで垂直に延びる。成形は外面平行叩き、内面円弧叩きで行い、口縁部はヘラ削り仕上げ、内面の胴部中段付近はカキ目調整を施す。口径34.8 cm、推定器高18.6 cmを測る。

#### L類（第25-10図）

円筒棺の蓋である。受け部径38cm、器高18.2cm。外面は平行叩き、内面は円弧叩きで成形する。天井部はヘラで断面三角状に削り取って、直径12cmの円孔を焼成前に穿つ。内外面共、下3分の1は横ナデ調整を施し、端部は丸く仕上げる。口縁近くには7mmの浅い凹文線があり、それより上の胴部には3本の沈線が回る。

#### M類（第25-10図）

円筒棺の蓋である。推定器高23.5cm、口径42.6cm。口縁端部は平坦で天井部中心に向けて曲線を描きながら内傾する。口縁端部から10cm上部に下方に垂れ下がった棒状把手が一対付く。外面平行叩き、内面円弧叩きで成形し、把手から口縁部直上にかけてと天井部付近を回転カキ目で調整している。把手付近には2本の沈線を施している。

#### N類（第25-10図）

口縁部外側にヘラで切った鋭い段を設けるもの。蓋になるか身になるかは不明。口縁端部は水平で幅1.1cm、そこから外下方にはほぼ垂直な1.8cmの壁を作り、その下端から外方へ5mmの平坦部を形成している。以下胴部の厚みは1.8~1.9cmを計る。外面は平行叩きの後、大半を横ナデ調整している。内面は斜め方向の平行叩きのままである。口縁端部から7.4cm下方に直径1.8cmの円孔を穿つ。全体としては方形又は長方形の棺で底部に向けてカーブしながらそぼまる形となろう。実測図では一応身を想定した。

#### O類（第25-10図）

口径33.2cmを計る。口縁のたちあがりは1.9cmと短く直立し、頸部以下胴部に向けて広がっていく。破片の先端で直径56cm、遺存長は約54cmを計る。外面は上下方向の平行叩き、内面は同心円押し当具痕を残す。長さ1m以上の円筒形となるものの底部の有無については不詳である。

#### P類（第25-11図）

陶棺又は円筒棺の蓋である。蓋は半円状を呈し、幅2cm余り、厚み0.8cmの縦突帯を

12～14cm間隔に貼り付けるタイプのもの。縦突帯は身との合わせ目まであって、斜め方向に面取りされている。縦突帯の横の器面上にヘラによる斜めの格子目文が描かれている破片も同一個体であろう。本体の厚みは1.5cm。外面は横方向の平行叩き、内面は同心円の押し当て具痕を残す。R類とは基本的に同様の作りだが、胎土、焼成、色調、細部の手法に差異が認められ別個体と考えられる。

#### Q類（第25-11図）

陶棺又は円筒棺の蓋である。断面は半円状を呈し、厚みは約1cm。天井部から直角方向に幅約3cm、厚み約0.9cmの縦方向の突帯が身との合わせ目まで続く。さらにこの接合面と平行して5mm～1cm離れて横方向の突帯がつく。幅2～2.5cm、厚み0.85cmを計る。

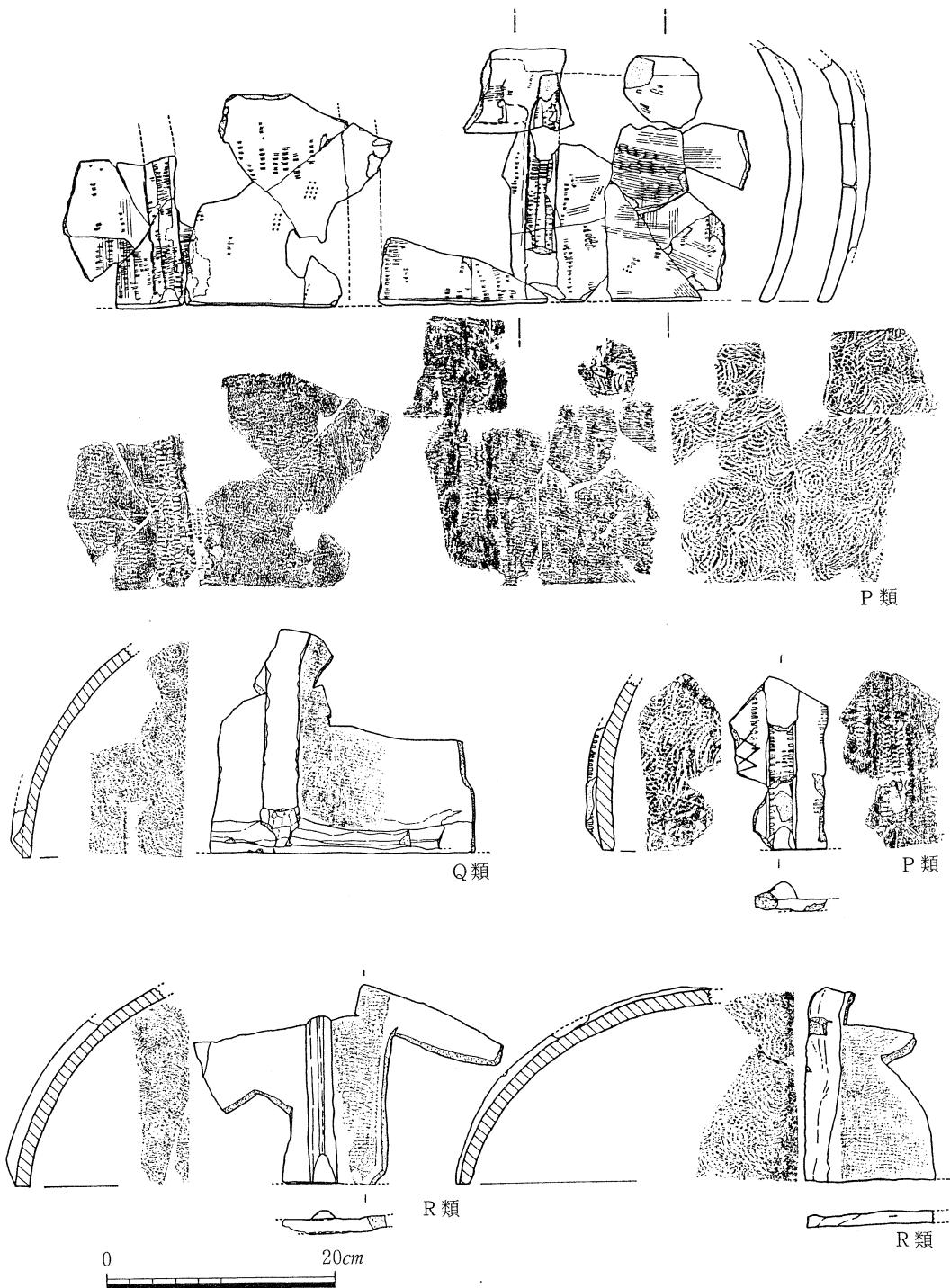
外面は横方向の平行叩き、内面は同心円叩きで成形し、突帯周辺はいずれもナデて調整している。縦方向の突帯の間隔は約15cmである。

#### R類-①（第25-11図）

陶棺又は円筒棺の蓋である。断面は半円状を呈し、厚み1.3cmを計る。天井部中央に大棟の突帯が走り、それと直角方向に幅2.0～2.2cm、厚み0.9～1.0cmの縦突帯を等間隔に貼り付けるタイプになるものと思われる。突帯は身との合わせ目まであって、斜め方向に面取りされている。外面には横方向の平行叩き、内面には同心円の押し当て具痕を残す。

#### R類-②（第25-11図）

①と同一個体と思われる。身との合わせ目を平坦に削り、それと直角方向の面もヘラで削って平坦面をつくっている。その面に沿うように縦方向の突帯を付ける。突帯の厚みは1.5cm～1.8cm、幅は2～3.1cmを計る。直角方向2面に平坦面があることは、蓋を2分作りで左右に分けて作ったことを示している。この2分作りの手法は岡山型の陶棺の作り方によくある。



第 25 - 11 図 特殊土器 P～R 類実測図

### 3. 遺構の検討

#### 1) SD-01

柳浦1式、高広II B期頃の完形に近い遺物がまとまって出土しているが、他の遺構群で多数見られる甕片や特殊土器片は全く出土していない。

北側のD遺跡は、調査前は古墳の可能性を考えていたのであるが、トレンチ調査の結果、表土から10~40cmで地山に達し盛土等ではなく、遺構は検出されなかった。従って、この溝状遺構はD遺跡の関連遺構とも考えられない。C遺跡の他の遺構群とはやや異質なものと言えよう。

#### 2) 小形石棺

内径30~70cmと非常に小形であり、墳丘も恐らく作られていないかなり簡略化した埋葬である。被葬者は幼児であろうか。

#### 3) SD-02, SK-01~15

これらの遺構は一部に方形や長方形、円形の痕跡をとどめるものがあるものの変形していたり、全く不整形で底面の凹凸も激しいものが多い。

甕片、特殊土器類の出土状況を見ると、同一個体片が複数の遺構及び土層にまたがっている。

これらのことからすると、以上の遺構群は、特殊土器や甕を原形のままで棺とするか、もしくは破片の状態で二次的に利用した埋葬遺構が、ある時期一度に掘り返されて人為的に変形させられたものであると考えられる。

埋められていた棺や儀式に使われた土器は壊されて、その破片が土壤の内外に散乱し、次第に埋没していったものであろう。

このC遺跡で、特殊土器や甕を使った埋葬が初めて行われた時期については、共に出土している遺物のなかに山本編年IV期の立ち上がりのある蓋杯がかなり見られることから、7世紀前半代としてよいと思われる。存続時間については、8世紀代を通して行われたものであるか、7世紀代に集中して行われ、8世紀代の蓋杯類などはその後のお祭り用に使われたものと考えるかは議論の分かれるところであるが、特殊遺物の検討をも含めてまとめのところでふれることにする。

次に、遺構群が掘り返された時期については、C遺跡の発掘成果だけからすれば、SK-01内の上部堆積土中に13世紀の青白磁片があることから、同時期かそれ以前の時期を想定できるのであるが、C遺跡の南側の谷にあるイガラビ遺跡、北側の谷にある池ノ奥窯跡の堆積土中からも特殊土器A類の破片が出土しているので、それらも含めて考

えてみる。

先ず、イガラビ遺跡D-2区暗褐色土がA類の出土層であるが、この土層中及びこれ以下の土層を通して最も新しい出土遺物は、亀山焼き系の中世陶器である。このことはSK-01出土の青白磁片からみて、C遺跡の土壙群がほぼ埋まろうとしている時期にA類の破片がイガラビの谷に移動したことを示すものである。

又、池ノ奥窯跡ではA-9区東側第4層灰黄褐色粘土層がA類の蓋の天井部出土層である。この層中からは高広編年V期の遺物を最新のものとし、それ以下の層にもそれより新しい時期のものはないとの発掘成果が出ている。このことはA類の破片が窯跡の谷に運ばれたのが9世紀中頃から後半にかけてであることを示す。

以上、埋葬の存続期間、窯跡の発掘成果等を総合すると、埋葬遺構が掘り返された時期は8世紀末から9世紀前半代にしばられてくる。

#### 4) 集 石 群

石の分布のやや密な部分と粗な部分があり、並べたり積んだりしたとするには規則制がないので集石群とした。この集石群の直下で検出されたSK-01, 06, 07には同様の石がかなり見られ、SK-10, 11にはぎっしりと詰まっていた。

3)のところで述べた通り土壙群は掘り返されたものと考えられるので、この集石群はもともとの埋葬になんらかの形で使われていたものが投げ捨てられて溜まった可能性を想定したい。

#### 4. 遺物の検討

特殊土器については、その器形から大まかに3つのタイプに分類できる。（第27図）

第1類型はA, E, I, K, L, M, O類が該当する。概して直径40～60cm, 長さ1m以上の円筒又は隅丸方形の筒状を呈する棺である。底部は丸底で一方の口を浅鉢又は浅い鍋状の蓋でふさぐ。A, E, I, O類は本体, K, L, M類は蓋である。

A類には器表面に青黒色の馬と人の絵を、E類にも黒色で馬らしき絵を、I類には円文や円弧帶、色帯を隨所に表現している。これらの文様の付け方は、厚みのあるものは粘土に松灰を混ぜて塗り付けたもの、薄手のものは松灰だけを指でなぞったものと推定される。<sup>註1</sup>このような手法は日本はもとより全世界的に類例がない。棺に人物や馬を表現した例は、岡山県英田郡美作町平福の土師質切妻家形陶棺の妻部に中央の人物が両側の馬に手を差しのべている文様があるが、これは完全に浮き彫りとなっており本例とは手法が違う。ただ、<sup>註2</sup>「馬の飼育とか使用に関わる人物の棺」と考えられる点では共通性がある。

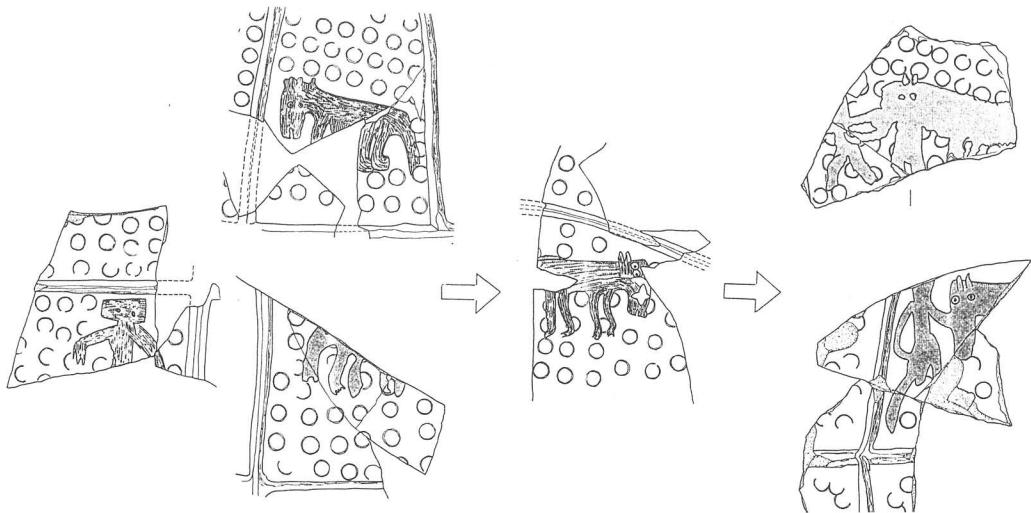
いずれにしても、他地域に系譜が求められるのではなく、大井地区の工人が独自に発案したもののようにある。

A類に描かれた絵画のうち人物の上方と右手にいる馬は裸馬であって野生馬と見なすことが出来る。それに比べて、右手上方に離れている馬は辻金具だけではあるが一応馬具が付けられており、人間に使役されている状態を表している。

人が馬に手を差しのべている図柄を描いた二片は横穴の裝飾絵画にもみられる通り「駒索き」の図であって、首長の馬を飼養する集団（馬飼人のような）が、首長の開く祭宴で自分たちの職掌のシンボルとして駒を索き出し、首長の目の前に連れ出して忠誠を誓うというシーンを表したものと考えられる。

とすると、四角い顔を持つ人物は野生馬を飼養して首長に奉じた馬飼人の長か、ただ単に牧童の如き存在のいずれかであろう。今一度人物を見てみると、非常に堂々とした正面姿を思わせるのであって、馬飼人の統率者（馬飼造）と見なすことが可能である。通常であれば丸みを帯びた顔になろうが、これは角張った顔というよりは通常でない顔、つまり儀式、祭礼の折りの人物を表現したものか、既に冥界に入ってしまった人物の姿でも良いだろう。いずれにしてもこの土器棺に葬られた者である。

土器棺の器表面にこうした絵画が描かれ、一連の時間的な流れ、動きを見出す事ができる（第26図）その背景には、被葬者集団が身らの経歴と業績を絵画として表そうとする意図があったのではないかと思われる。この土器棺は本葬に至るまで統率下の人達に見せて、力を誇示し、維持せんとしたのではなかろうか。



第26図 馬・人による絵画表現の流れ

註3

恐らく100年程後の8世紀前半頃には風土記の蝦蟇島の項に「即ち牧在り」と記載されている通り、現在の中ノ海にある大根島が官宮の牧場であったことが知られるのである。

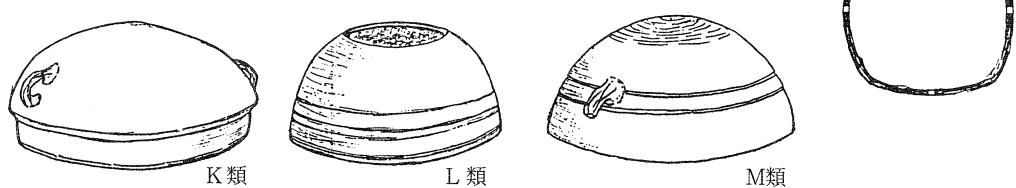
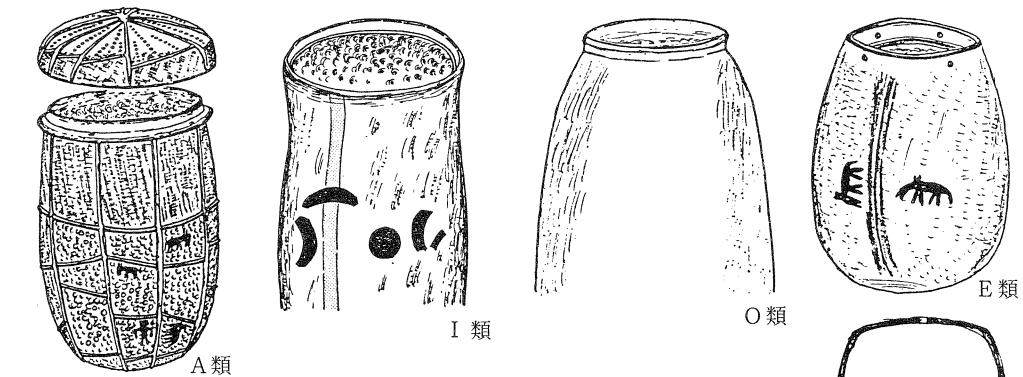
「牧」は続日本紀文武天皇四年（699）三月の条に牧場を定めて牛馬を放つように命令が出されているから、8世紀初頭には設けられていたと思われる。

「牧」は兵部省に所属し軍団で使用する馬や牛を飼育した放牧場で、その管理組織として牧毎に長一人、主帳一人、群（百頭）毎に牧子二人を置くとある。

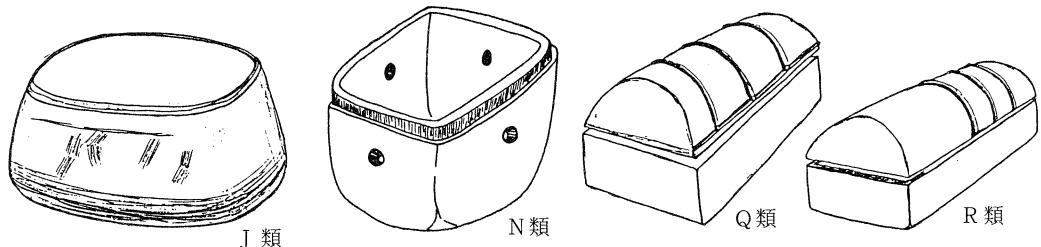
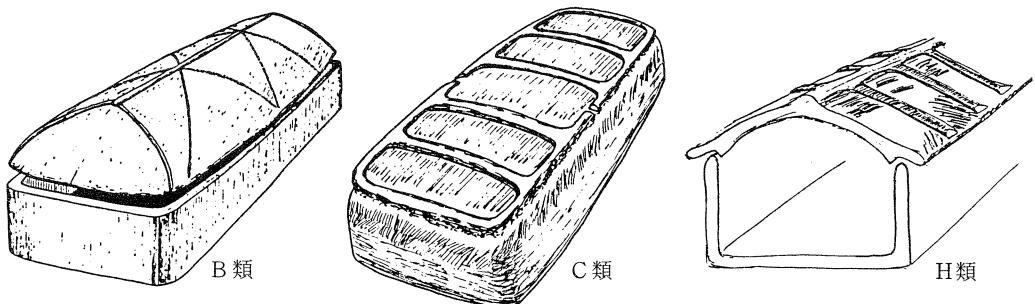
大根島は四周を海に閉ざされた孤島であるから牛馬を放牧・管理するには適している。官宮の牧場となる以前から有力豪族が牧場を設置していたとしてもおかしくはない。

古代において馬に対する信仰としては、神の乗り物であることや、役馬としての良馬を得ることなどの性格があるが、出雲地方においては土馬と呼ばれる須恵器質の焼き物が多く作られ、お祭りの道具として使用されたらしい。その時期は6世紀後半から8世紀まで  
註4 続いている。大井の地では須恵器窯でも須恵器と共に焼成されているし、周辺の集落跡で  
註5 も多数確認されているから、大井地区を中心にして独特の馬信仰があったに違いない。この土器棺に葬られた人物は、こうした馬信仰—馬の飼育の実態、状況証拠から考えると、「牧」の管理者であった可能性が高いと思われる。

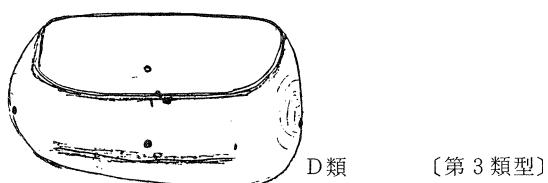
又、A類には細目の突帯が縦横に貼りついているが、全て直交するのではなく、斜めに交差した箇所がある。これは技術の稚拙さからくるのではなく、例えば柳行李などをひもできつく縛った時にできるひものよれが交差角度の違いとなって表れるが、本例では靈魂を封じ込めるため棺をひもできつく緊縛した状態を表現したものであろう。



〔第1類型〕



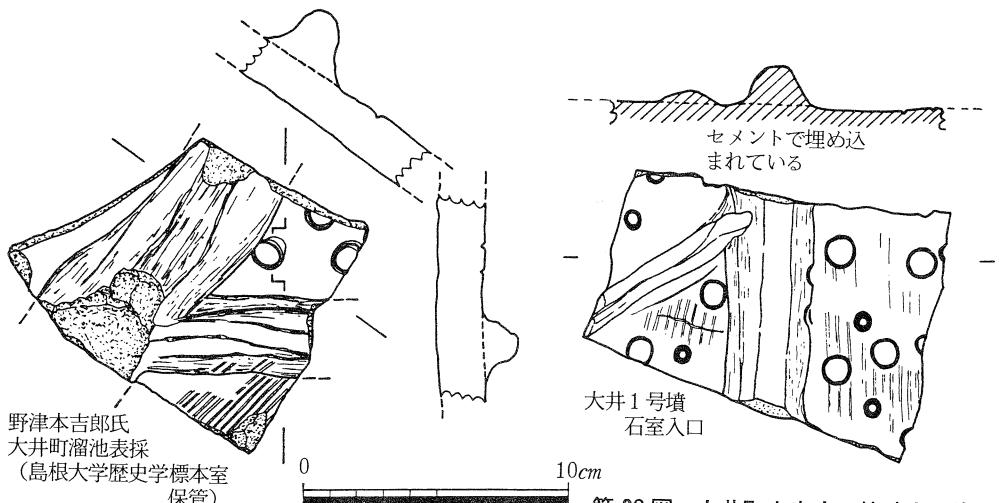
〔第2類型〕



D類

〔第3類型〕

第27図 特殊土器の復元想像図による分類



第28図 大井町内出土の特殊土器片実測図

A類のように円文や突帯で飾られた特殊な土器片は、かって2片が採集されていた。

(第28図) 内1片は、大井町の郷土史家である野津本吉郎氏によって大井の溜池（具体的には不明）から採集され、今は島根大学歴史学標本室で保管されている。本体の厚みは1.3～1.7cm、突帯の幅3～3.5cm、高さ1.3～2.1cmのかなり分厚い突帯を付けるもので、円文も直径1.3cm前後とA類に比べるとひとまわり大きいので別個体と考えられる。

他の1片は野津本宅の裏庭続きの大井1号墳と呼ばれる小規模の石室を有する古墳の石室入口の床面にセメントで埋め込まれた土器片の中にある。器表面に幅3cm、高さ1.3～1.5cmの幅広の突帯があり、それに斜め方向に幅1.1cm、高さ0.5cmの細い突帯が枝分かれしている。平坦面には3種類の円文が付けられている。すなわち、外径1.1～1.2cmのもの、0.7～0.8cmのもの、0.6～0.7cmのものである。このような形状のものは調査では出土していないのでやはり別種のものが付近にあったのだろう。

I類の円弧帯は、当初竜又は蛇のような細長い胴体を持つ動物文と考えたが、頭や脚部を示す破片がなく確証が得られなかった。一応、幾何学的な文様の一部と考えておきたい。<sup>註7</sup>

円文は太陽とか月と考えてみたがやはり確証は得られなかった。高句麗の東京城出土の特殊瓦類のなかに、直径3寸の円文をつける破片があって近似している。<sup>註8</sup>

丸底の底部を有し、合蓋の棺は朝鮮半島の百濟の中心地である扶余において6世紀中葉～7世紀中葉にかけて約1世紀の間、発展流行したといわれるが、今のところ日本との関わりを決定するには不明な点が多くといわれている。<sup>註9</sup><sup>註10</sup>

日本国内では、大阪府堺市陶邑古窯跡群中、梅地区の原山4号古墓出土の「須恵質有蓋土釜状土器」<sup>註11</sup>や兵庫県多紀郡西紀町の沢の浦坪2号墳出土の「砲弾形陶棺」<sup>註12</sup>、さらにこれと同タイプのものが滋賀県守山市寺山古墳出土品にもあるという。いずれも7世紀代のも

のであろう。

こうした類例から考えると、本例は畿内方面からの影響が強いものと考えられる。

第2類型としたものはB, C, F, G, H, J, N, P, Q, R類で、基本型は幅28～45cm、長さ72cm～1m以上、高さ30cmほどの陶棺の変形した箱型で大小がある。

ほとんどの蓋には、大棟と降り棟が突帯で表現されている。これは土師質の亀甲型や切妻型の陶棺によく表現されている文様であり、<sup>註14</sup> 猥内又は吉備のいずれかの影響が考えられる。身との接合部にもB, C, P類のように平坦合わせになるものと、F, G, H類のように段を設けて身の受け部とするものの2種がある。陶棺の分類では平坦合わせのものは吉備型、<sup>註15</sup> 蓋受けのあるものは畿内型といわれる。さらにR類に見られるように蓋を二分作り<sup>註16</sup> していることは吉備型の陶棺作りの特徴である。

第2類型では吉備と畿内の両者の影響があるものと考えられる。又、N類のように印籠式の合わせ目になるものは案外金属製骨蔵器の影響があるかもしれない。

第3類型はD類のように円筒の胴部の横腹を削りとて広い口を設けるもので極めて特異な形態のものである。横幅40～70cm、長さ1m近く、高さ27～40cm近くを測る。類例まれなものであるが、唯一奈良県生駒郡伏見町宝来の6号横穴から出土した4個の異形陶棺が似ている。これは全長80cm、最大幅35cmの小型のもので、上部に31×20cmの長方形の孔<sup>註17</sup> をあけており、その部分の蓋がある。まったく同じという訳ではないが円筒の胴部を開口する手法は同様である。

第1類型は畿内方面からの影響が強く、第2類型は吉備と畿内の両者の影響が強い。第3類型は類例に乏しいが今のところ畿内の影響にもとづくものと考えておきたい。このように考えてみると、大井の窯を営んできた須恵器工人たちが、畿内（具体的には堺市陶邑古窯の工人集団）や吉備（美作や総社付近）と経済的、文化的交流を深める中でイメージを形成し、製作にあたっては大井の工人集団の独特的発想のもとに半ば試作品のような形で作られたのではないかと考えられる。

註1 大谷女子大・中村浩氏、山雲窯元・石倉一弘氏の御教示による。石倉氏は又、耐火度の低い粘土（融点の低い粘土）を塗って焼いた可能性をも指摘されている。

2 間壁葭子「切妻家形陶棺－7世紀における地方支配形態推測への一資料－」『倉敷考古館研究集報第17号』1982年11月

3 加藤義成『出雲國風土記参究』昭和37年11月

4 広江耕史「出雲の土馬」『えとのす 16』昭和56年10月

勝部衛『'81第3回ミニ企画展 謎の土馬—県内出土資料から—』玉湯町立出雲玉作資料館編  
昭和57年1月

- 5 松江市教育委員会『薦沢A遺跡他発掘調査報告書』1988年3月
- 6 島根県教委・内田律雄氏の御教示による。
- 7 滋賀県文化財協会・松澤修氏、奈良大・水野正好氏の御教示による。
- 8 島根県教委・内田律雄氏の御教示による。
- 9 姜仁求『百濟古墳研究』学生社
- 10 福岡大・小田富士雄氏の御教示による。
- 11 大阪府教育委員会『陶邑II』昭和52年3月
- 12 兵庫県教委・市橋重喜「沢の浦坪古墳群」第3回近畿地方埋蔵文化財担当者研究会資料  
1985年10月
- 13 梅原末治「近江國野洲郡守山町字立入古墳調査報告」『考古学雑誌第7巻第11号』大正6年7月
- 14 間壁葭子「岡山の陶棺－白猪屯倉への一私見－」『岡山の歴史と文化』藤井駿先生喜寿記念会編  
昭和58年10月
- 15 註14書
- 16 註14書
- 17 森本六爾「異形の陶棺を発見したる大和國生駒郡伏見村寶來字中尾の遺跡について」『考古学雑誌第14巻第5号』大正13年2月  
『伏見町史』

## 5. 小 結

遺構の検討の項でも触れた通り、土壙は多数あったがその大半が後世の搅乱を受けて形状の一定しないものが多く、遺跡の性格については明確にし難い。

しかし、破片となって発見された多くの特殊土器片は、復元すれば円筒棺または陶棺の類型であることが判明したことから、これら土壙の中にこうした棺が埋置されていた可能性が高くなった。

大阪府下の特殊円筒棺の中には、陶邑古窯跡群・原山4号古墓出土品などのように丸底の底部を有し、蓋を付けるタイプの円筒棺があって、C遺跡のものと酷似している。それらの示す時期は、ほぼ7世紀代（前半頃が多い）である。

C遺跡の特殊土器以外の蓋杯類は、山本清編年でいうところの山陰IV期以降つまり7～8世紀代のものが大半である。

その頃に一体如何なる理由で焼き物の棺が作られ、使われたのか。今少し詳しく見ると、外面に粘土に松灰を混ぜたものを塗り付け、馬や人の絵を表現したものや、円文や色帯で文様を表したものなど他に例を見ないものが多くあり、しかも一つとして同じ形のものがない。まるで試作品のようである。こうした独創的な発想をするのは、土器棺としての需給関係が定まらない以前のことであって、しかも製作者と注文主が非常に緊密な近い関係

にあったからではないかと思われる。

ご承知の通り、本遺跡は大井古窯跡群のなかに所在し、今回の調査でも本遺跡から谷を隔てたすぐ北側の山腹に6世紀末～7世紀初頭頃の窯が2基（池ノ奥4、5号窯）、9～10世紀代の窯が1基（池ノ奥6号窯）発見された。この内4号窯の焚口付近から陶棺片が発見されており、又6号窯では窯道具として使用されたものの中に特殊な陶棺の破片があり、灰原からも発見されていることから、周辺の須恵器窯（未確認）で土器類と共にこうした特殊な棺が焼成されていたことは疑い得ないところである。

これらを製作するに当たっては何らかのモデルがあってのことと思われるが、山陰地方でも類例がないことからすれば、モデルが身近なところにあったのではなくて、大井の須恵器製作集団が吉備地方や畿内・陶邑の集団と技術的、文化的交流を深める中で印象を固め、実際には大井集団の独創力にまかせた部分が大半ではなかったかと考えられる。

こうした棺に納められた人達は論ずるまでもなく、この大井のムラに住み、日常は農業や漁業を営むかたわら、注文に応じて大量の土器を製作し窯で焼成し、製品として出雲地方各地へ出荷していた集団の長クラスの人物であろう。

一方では、A類の円筒棺に見られるように馬との関わりが強いことが指摘できる。多数の良馬を飼育することに成功した馬飼人の長としての性格をそこに認めることができる。

C遺跡はそうした種々の性格をもつ管理者の集団墓地であったと推定される。



大井1号墳石室入口土器片

## 遺物観察表

番号	種類	形態	法量(cm)	形態・手法の特徴	備考
1	須恵器	高台付杯	口径 器高 10.7 3.7	底部端よりやや内側に高台を付ける。 底部外面回転ナデ。	F 3区表土
2	"	杯	底径 7.8	底部片。回転糸切り後多方向ナデ。	G 2区表土
3	"	盤	高台径 14.6	底部片。低い高台を付ける。回転糸切り。	G 3区表土, G 4区 集石中
4	"	高杯	推定口径 9.0	脚部の四方に切り込み様の透し。	F 3区表土
5	"	短頸壺	推定口径 6.3	口縁部は短く内傾。ナデ肩で丸い体部。最大 径のすぐ上にクシ状工具による刻み目。	H 4区表採
6	陶器	甕	推定口径 22.0	底部片	備前焼, F 3区 撲乱
7	須恵器	杯蓋	口径 器高 10.4 3.8	天井部は丸味を帯び、口縁部は内湾気味。	F 4, G 3区 第2層
8	"	杯蓋	口径 器高 9.5 3.9	天井部は丸味を帯びる。外面に杯身片溶着。	F 3区, 第2層
9	"	蓋		蓋状のものか。回転ヘラ切り。	C 5区, 第2層
10	"	杯身	口径 器高 9.0 3.3	たちあがりは短く内傾。回転ヘラ切り後 多方向ナデ。	E 3区, 第2層
11	"	杯身	口径 器高 8.0 2.7	たちあがりは短く内傾。小形で浅い。	C 5区, 第2層
12	"	杯身	推定口径 8.8	口縁部小破片。たちあがりは短く内傾	H 3区, 第2層
13	"	杯蓋	口径 10.6	かえりがつく。	G 5区, 第2層
14	"	杯蓋	つまみ径 3.5	偏平な輪状つまみがつく。	G 3区, 第2層
15	"	杯	推定口径 12.4	口縁部の小破片。高台付杯であろうか。	C 4区, 第2層
16	"	杯	推定口径 11.0	屈曲口縁。	D 6区, 第2層
17	"	高杯	底径 7.8	脚部片。三方一段透し。	F 3区, 第2層
18	"	眞	底径 5.5	底脚付。円孔の上下に沈線。	G 3区, 第2層
19	"	ヰ	底径 4.4	口縁部欠損。灰褐色軟質。	E 3区, 第2層
20	"	短頸壺	口径 5.8	口縁部に重ね焼の痕跡。完形。	F 3区, 第2層
21	"	短壺	胴部最大径 14.6	肩～体部片。肩部回転カキ目、肩部と体部の 境に板状工具による刻み目。	G 3区, 第2層
22	"	広口壺	底径 最大径 9.2 16.2	底部は平。胴部は丸く張る。口縁部欠損。	G 3区, 第2層
23	"	長頸壺		頸部～肩部残存。肩部に回転ヘラ削り。	F 2, F 3, G 3区 第2層
24	"	長頸壺	胴部最大径 16.8	肩部～体部2～2.5mm間隔の回転カキ目。	F 3区, 第2層
25	"	円面硯	口径 底径 6.4 9.5	透しは横長の長方形で上段四方、下段四方に あける。使用痕なし。	G 3区, 第2層
26	"	平瓶	口径 器高 5.15 7.8	高台は貧弱。口縁の注口方向内外面に黒ずん だ痕がある。底部回転糸切り。	G 2区, 第2層
27	"	杯身	口径 器高 13.5 4.7	口縁端部を内外につまみ出してやや内側に傾 斜した平坦面をつくり蓋受けとする。	G 3区, 第2層
28	"	甕	口径 22.8	口縁部のみの破片。	E 4区, 第2層
29	"	甕		肩部と体部の破片	H 4区, 第2層
30	"	甕	口径 55.0	口頸部に雑な波状文を三段にわたり施す。	C 5, D 5区 第2～3層

番号	種類	形態	法量(cm)	形態・手法の特徴	備考
31	銅製品	鍍金環	外径 内径 2.0 1.0	鍍金部分は側面のみ遺存。	I 3区, 第2層
32	須恵器	杯 蓋	口径 器高 11.0 3.7	天井部回転ヘラ切り後多方向ナデ	G 3, H 2区第3層
33	"	高台付杯	高台径 8.4	口縁部欠損。高めの高台をやや内側につける。 静止糸切り痕を残す。	G 4集石中及び第3層
34	"	高台付杯	高台径 12.0	低い高台を底部端近くにつける。回転糸切り後 回転ナデ。	I 2区, 第3層
35	"	聰	底径 5.4	台付。肩～体部に刺突文、その上下に沈線。	G 3区, 第3層
36	"	壺又は聰		底部のみ。外面は回転ヘラ切り後多方向ナデ。 内面にはロクロ目が残る。	G 4区, 第3層
37	"	長頸壺	口径 器高 8.0 18.5	胴部は球形、底部は平ら。肩部回転カキ目。	G 3区, 第3層
38	古銭	寛永通宝	直径 2.3	厚み1mm	G 5区, 第3層
39	古銭	寛永通宝	推定直径 2.2	厚み1mm	I 2区, 第3層
40	須恵器	杯 身	受部径 11.4	たちあがり端部欠損。短く内傾するタイプのものと思われる。	G 4区, 第3層
41	"	杯 蓋	口径 かえり径 11.6 9.0	かえりより宝珠状のつまみをつける。 天井部外面回転ヘラ削り。	SD-01
42	"	杯 蓋	口径 かえり径 12.0 9.2	つまみの痕跡あり。かえりをつける。 天井部外面、回転ヘラ削り。	SD-01
43	"	杯	口径 器高 10.2 3.6	底部平坦。回転ヘラ切り後ナデ。 口縁部は外傾して伸びる。	SD-01
44	"	杯	口径 器高 10.1 3.6	底部平坦。粘土ひもをうずまき状にまるめて 底部を作っているか。口縁部は外傾。	SD-01
45	"	杯	口径 10.4	底部ヘラ切り後。多方向ナデ。	SD-01
46	"	聰	底径 5.2	口縁部欠損。「ハ」の字状に開く高台。 直径1.2cmの円孔と沈線二条。	SD-01
47	"	長頸壺	底径 9.0	口縁部欠損。外面回転カキ目。	SD-01
48	"	長頸壺	口径 器高 8.0 19.8	完形。高台付。頸部三条、肩部一条の沈線。	SD-01
49	"	壺	口径 11.8		SD-01
50	"	横瓶	長径 短径 26.7 17.0	口縁部、底部～胴部の一部欠損 外面平行叩き後回転カキ目。	SD-01
51		土 錘	最大長 最大径 重さ 4.8 2.4 21.7g	管状。胎土は密で黒褐色を呈す。	SD-01附近
52	磁器	梅瓶		2.5×2.5cmの小破片で青白磁の梅瓶。 櫛状工具による渦文を施す。	SK 01上部堆積土 13世紀南宋後半
53	須恵器	杯 蓋	口径 かえり径 13.2 10.8	かえりが付く。天井部外面回転 ヘラ削り。つまみは不明。	SK 01内 暗褐色土
54	"	杯	口径 器高 13.0 4.2	屈曲口縁。底部回転糸切り。	SK 01内 暗褐色土
55	"	杯 身	口径 器高 9.0 3.4 受部径 11.2	たちあがりは短く内傾。底部はやや丸味を帶 びる。回転ヘラ切り。	SK 02 ②土壠
56	"	長頸壺	口径 8.4	頸部に凹線3条。肩部に回転カキ目	SK 02 ⑥土壠
57	"	長頸壺	口径 13.6	口縁部のみ難存。外面に沈線がめぐる。 頸部内面に指圧痕。	SK 02
58	"	杯	口径 器高 8.5 3.5	底部は回転ヘラ削りで調整。 外面にヘラ記号(×)あり。	SK 05
59	"	平 瓶		天井部に円形の粘土板で閉じた痕跡があり、内 面に指圧痕が残る。注口部分と思われるたちあ がりがわずかに残る。	SK 07

番号	種類	形態	法量(cm)	形態・手法の特徴	備考
60	須恵器	杯身	口径 9.3 受部径 11.3 器高 3.5	たちあがりは短く内傾。底部は丸い。	SK 1.4
61	"	長頸壺		頸部のみの破片。沈線二条がめぐる。	SK 1.4
62	"	甕	口径 16.0 器高 33.0	やや小形。外面は平行叩きの後回転カキ目。	SK 1.4
63	"	杯身	口径 13.6 器高 4.6	蓋受け部は小さくつまみだしてつくる。全体に厚手。 底部は切妻形へラ切り。内外面共回転ナブ調整。	SK 1.5
64	"	杯	推定口径 14.0	口縁部の小破片。高台付の杯か。	SK 1.5
65	"	甕	復元口径 37.3 器高 89.2	口頸部に波状文三段を施す。外面格子状の平行叩き。内面同心円叩き。	SK 1.5
66	"	甕	体部最大径 92.2	体部のみ残存。	SK 0.8, 池D表土 F 3, G 3区, 第2層
67	"	甕	口径 56.2	口頸部に波状文三段。中段の波状文直下に直径 5 mm の円形浮文貼付け。	SK 02, 04, 06, 10
68	"	甕	体部最大径 53.8	口縁端部を欠く。	SK 02, 03 G 3第3層上面
69	"	甕	口径 32.0 体部最大径 52.6	口頸部に直径 5 mm の竹管文三段。	SK 0.8, 1.4
70	"	甕	口径 21.8 器高 54.0	外面平行叩き後回転カキ目。内面同心円叩き。	SD 0.2
71	"	甕		体部のみ残存。	SK 0.2, 0.4
72	"	甕	口径 23.0		SK 01, 02, 06, 10
73	"	甕	口径 50.0	口頸部に 5 mm の竹管文二段とその上下に沈線。	SK 04, 1.0, 1.4
74	"	甕	口径 40.0	口頸部に沈状文二段。	SK 01, 02, 06, 10
75	"	甕		体部と底部の破片。	SD 0.2, SK 0.2
76	"	甕		体部の破片。	SK 0.2, 0.6 G 6第3層
77	"	甕		体部の破片。	SK 0.5, 池D
78	"	甕		体部の破片。	SK 0.2 (6)土壌 C 5D 5区 第2~3層
79	"	甕		体部の破片。	SK 1.4, G 4第3層 上面
80	"	横瓶		体部の破片。	SD 0.2, SK 0.5
81	鉄製品	不明			SK 0.2 (1)土壌
82	"	角釘			SK 1.5
83	"	"			SK 0.8
84	"	"			SK 0.8
85	"	"			G 5区第4層上面

池ノ奥C遺跡・池ノ奥D遺跡調査前全景



池ノ奥D遺跡 池ノ奥C遺跡



小形石棺（北から見る）



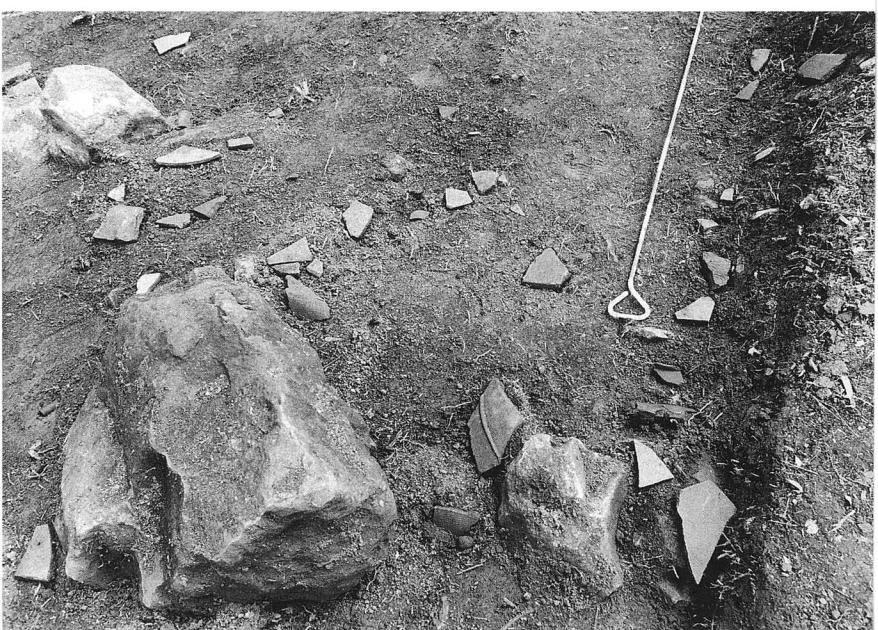
小形石棺（南から見る）



D遺跡東西トレンチ



D遺跡南北トレンチ



C遺跡遺物出土状況



集石群



集石群



S D - 0 1